

## 1・プロローグ

「ノリ、タイムマシンでホントに造れんだが？」

親父から突然質問された事が有った。典孝が東大理学部数学科の三年生だった頃の話だ。典孝は大学が夏休みに入ったので、故郷の山形に帰省していた。

「タイムマシン？親父、なして急にそだな事聞くのや？」

「いや、この前テレビ見てたらよ、どっかのお偉いさんが『人間の想像する事で実現出来ない事は無い』とか言ってたんだぞ。んだらばタイムマシンも造れると思ったんだげんとなく」

「その『実現出来ない事は無い』というのは何か科学的な根拠が有るんだべが？そもそもアインシュタインの相対性理論に従えば（中略）、故に・・・」

「ちよっと待てや。要するに出来んのが？出来ねのが？」

「出来ねな」

「だったら最初からそう言えや。ややこしいこと言うなずー」

「われわれ。しかし、なしてタイムマシンなて？ 未来の世界を覗いて見たいのが？」

「んねんだ。先の事言ってもしようがないべ？ なるようにしかならね」

「んじゃ過去を変えたいとか？」

「そりや、あの時あしとけば良かったという後悔は沢山あるよ。んでもその時その時でもう一杯一杯で、その選択しか出来なかったんだもの。仮にタイムマシンで過去さ戻ったとしても、俺は同じ失敗を繰り返すな。無駄だ」

「んだったらタイムマシンなて要らねべよ」

「未来を知りたいとか過去を変えたいとかそんな大それた話じゃないんだぞ。俺も年くつたんだべな。ちっちゃこい子見掛けつと、めんごくでめんごくでな。コウとノリも昔はああだった、もう一回腕の中で抱っこしてみ

たいとかしみじみ思うようになったんだぞ」

「親父、簡単だ。兄貴に孫作ってもらえばいいんだ」

「それだよ、それ。お前も知ってっと思うけど、二年位前から付き合ってた彼女居たっけべ？どうも最近別れたみたいなんだぞ」

「別れた？」

「んだ。本人は何も言わねし、俺も何も聞かねんだげんと、あいつの態度見てっとな分がんだ」

「うまくやってるように見えるたげんと。兄貴は猪突猛进型だから、そのままの勢いで結婚すんのがなと思ってたよ」

「実は俺もそう思って内心期待してたんだぞ。まあ若い内はいろいろ有っからな。ノリ、お前も若いんだから、勉強一本槍じゃなく、彼女でも作ってみたらどうだ？」

「俺にはそだな暇一秒たりともね。親父と兄貴が汗水垂らして働いて仕送りしてくれのお金で大学行かせて貰ってるんだもの。そのお

金でふらふら遊んでたら、俺はこの腹ば搔き切ってお詫びしなければなんね」

「かぁーッ！お前そだな糞真面目なこと言っ  
てたら、女逃げ出すよ。男として面白くもな  
んともないもの。真面目過ぎんのも考えもん  
だな。まあ、お前みたいな男、結婚する分に  
は望ましいんだべげんと。意外にコウより  
早く結婚したりしてな」

「まず、有り得ねべな」

「先の事、誰にも分がらねって。なるように  
しかならね。それは別として、ちゃんと友達  
は居んだべな？」

「・・・特に居ねな」

「かぁーッ！じゃお前一人ぼっちで勉強ばっ  
かりやってんのが」

親父が絶望したかのように言うので、典孝は  
何かフオローしたくなかった。

「親父、友達居なくとも悲観する事はねえ。  
例えば、子供達に大人気のアンパンマンって  
知ってっぺ？彼なんか友達居ねんだじえ」

「うそ！あのアンパンマンがか？友達沢山居るように見えっげんとな」

「全部偽装なんだ。彼は歌の中で、自分には愛と勇気だけしか友達が居ない、と自らの孤独感を吐露してんだ。真のスターというの

は、そういうものなのかねが？」

「んー。そうなんだが・・・」

親父は今一つピンと来ないようだった。

## 2・健吉

佐藤健吉は山形市内の県立高校卒業後に調理師専門学校へと進み、その後和食系の飲食店に就職した。しかし、二年程でその店が倒産してしまい、やむなく伝手を頼って食品工場で働き出した。二十四歳の時に高校時代の同級生の静江と結婚した。二十五歳の時に長男の孝一が誕生した。ベビー用品をあれこれ購入し、住んでいるアパートが手狭に感じられるようになる。健吉は引越しを考え始めた。色々物色した所、静江の遠縁にあたる人から、山形市内で二十年来八百屋を営んで来た自宅兼店舗を安く譲ってもいいという話を持ち掛けられた。実際に格安物件ではあったが、健吉には未だそれ程貯蓄が無かったし、自宅兼店舗という点にかなり抵抗を感じた。すると、静江は私も手伝うからその店舗で何か商売を始めようと言い出した。子供は未だ小さいが、住み込みなら何の問題も無い。一時的に借金したとしても、二人で働け

ば直ぐに挽回出来る、と主張した。健吉はか  
なり躊躇したが、結局静江の主張を受け入れ  
た。その自宅兼店舗は二階建てで、一階が店  
舗、二階が自宅だった。大豆を安く購入出来  
る仕入れ先を知っていたので、一階の店舗で  
豆腐屋を始める事にした。豆腐は機械を一切  
使用せず、全くの手作りで製造した。その分  
手間暇は掛かるが、初期投資を最低限に抑え  
る事が出来た。健吉は専ら材料の仕入れ・豆  
腐の製造のみで、営業・雑務は静江が一手に  
引き受けた。静江は誰にでも愛想良く振る舞  
ったが、健吉は朴訥な質で、客商売が苦手だ  
った。  
三十二歳の時に次男の典孝が誕生した。そ  
れから約一年程度は豆腐屋を続けていたが、  
妻の静江が体調を崩し、病床に伏しがちな  
ったため、豆腐屋を手伝う事が難しくなっ  
た。この結果、営業機能が著しく低下して  
しまった。また食材を取り扱う以上、衛生面  
にかなり気を配る必要があったが、健吉には

静江のように細々とした部分まで綺麗に清掃する事が出来なかった。人を雇うという選択肢も有ったが、他ならぬ静江が反対した。静江は自分の体に鞭打つてでも豆腐屋を手伝おう、手伝おうとするので、それが返って病状を悪化させているようにも見えた。結局、健吉は豆腐屋をきっぱりと廃業し、近所にあつた顔見知りの表具屋で働き始めた。しかし、女房は病床にあるし、子供達も未だ小さいので、中々作業に専念出来なかった。表具屋の店主は健吉の家庭内の事情や人柄を良く知っていたので、不憫に感じて最低限の工具を貸し付けて、自宅で作業する事を認めてくれた。健吉はこれまで豆腐屋をやっていた一階を片付け、そこに工具を置いて作業を行う事にした。ただし、不慣れな表具屋の仕事だけでは豆腐屋をやっていた頃の半分以上の収入にしかならなかった。別な仕事をかけ持っていて、なんとか収入を増やす必要があつた。豆腐屋をや

つていた頃の生活習慣で、どうしても午前三時に起きてしまうので、朝早く出来る仕事を探した。健吉は中学・高校と柔道をやっていたが、高校時代の柔道部の一つ年上の先輩が新聞屋の店主をやっていたので、その先輩に頼み込んで配達員として雇ってもらう事にした。これにより、なんとか生活費は賄えるようになったが、まだ一歳を少し越えた程度の典孝の面倒まで充分手が回らなかった。男親では、どう扱っていいか分かり兼ねる時が多かった。かといって、病床の静江に余計な負担を掛けたくはなかった。通常であれば、保育所に預けざるを得ない所だ。しかし、健吉には唯一頼みの綱があった。二歳下の妹の民子の存在だ。健吉は三人兄弟の真ん中で、上に修一という兄がいたが、兄とは殆ど行き来しなかつた。と言っても、二人の仲が悪いといふ訳ではない。二人とも生来無口で、人付き合いが苦手な質だったので、お互い行き来し

ようとしなかつただけの話だ。下の妹の民子は、二人の兄とは正反対で、天衣無縫な陽気さで誰にでも愛嬌を振る舞った。健吉も、民子にだけは気を許した。民子は二十歳になると結婚し、直ぐに女の子を産んだ。典孝が一歳を迎えた頃には既に小学四年生になっていた。歩いて十分程度の近所に住んでいるという事もあり、頻繁に行き来した。健吉が忙しくて手が回らない時は、良く典孝を民子に預かってもらった。民子もその娘も子供が大好きだった。健吉は人に甘える事が嫌いな質だった。妹という事もあつたし、典孝を連れて行く。と大喜びして、それが決して演技ではないと分かつていたので、ついつい甘えてしまつた。

静江は一年間闘病生活を続けたが、その甲斐虚しく亡くなつてしまつた。健吉が三十四

歳、孝一が九歳、典孝が二歳の時だ。それから健吉は男手一つで幼い子供二人の面倒を見なければならなくなった。それでは大変だろうと、再婚の話が二、三有る事は有ったが、健吉は全く取り合わなかった。孝一が中学生、典孝が小学生になり、ある程度手が離れるようになる、健吉は今度は夕刊配達も始めた。表具屋の仕事は顧客から直接発注を受けているのではなく、下請だったので、納期さえ守れば自由に時間を使う事が出来た。夕刊を始めたのは、少しでも収入を増やしたいという理由だけではなかった。限られたスペースで単調な表具作業をずっと続けていると、さすがに息が詰まった。途中で新聞を配り歩くのは丁度いい気分転換になったのだ。毎日二時半頃夕刊配達に出掛けて四時頃戻り、表具屋の仕事を再開して、夕方六時になると今度は夕食の準備を始めた。朝食は市販のパン等で済ます事が多かったが、夕食はい

つも健吉の手造りだった。健吉は調理師の経験を持っていたので、飾り気は無いがいつも手堅い料理を作った。七時に二人の子供に先に夕食を食べさせ、その後その食べ残しを突きつつ、晩酌をし、九時には就寝する。それが健吉のライフスタイルだった。

## 3・孝一

佐藤孝一は小学三年生の時におつ母を亡くした。小学校一年までは両親とも豆腐屋を営んでいたらしいが、断片的な記憶しか残っていない。小学校二年になると、おつ母は病床に伏しがちになっていったから、おつ母との思い出といつてもこれというものは無かった。但親父もおつ母の事を殆ど話さなかつた。但し、酒を飲んで機嫌のいい時に、幼稚園でぎょう虫検査のエピソードを何回か話した事が有つた。それは次のようなものだ。ある時、幼稚園で尿検査とぎょう虫検査があつた。尿検査は朝一の尿を採るのだが、幼稚園児の朝一の尿を採るのはなかなか難しい事だ。幼稚園に行くまでにオシッコが出ないというケースも珍しくは無かつた。おつ母もそちらにばかり気を取られていたようだ。おつ母は、まだ眠っていた孝一のパンツをずり下げると、ぎょう虫のシールをチンポコに

貼り付け、いきなりグリグリし始めた。親父が不審に思い、

「最近の幼稚園はチンポコ検査もやんのが？」

と確認した所、

「んねんだ。ぎょう虫検査さ。こっちの方はいつでも採れるから楽勝なんだげんとな。」

尿の方が難しくってね」

と答えたらしい。

「馬鹿！ぎょう虫はチンポコさ居るんでねえ！肛門さ居るんだ！」

それを聞いて驚いたおっ母が、急にシールをはがそうとしたため、シールに貼り付いたチンポコがビローンと伸びた。

「やめれえーッ！チンポコもげるくくく！やさしく剥がしてけろ。やさしく剥がしてけろ」

おっ母を怒鳴り付けたのは、後にも先にもこの時ばかりだ、と親父は言っていた。

孝一は小さい頃から運動神経が良かった。特に走るのが速く、小学六年生の時には百メートルを十三秒台で走り、学年でも一、二を争う程であった。他方、基本的に勉強は好きではなく、家で宿題以外の勉強は殆どしなかった。それでも成績は不思議に良くて、小学・中学校ではずっとトップクラスの成績だった。勉強が出来て、かつ爽やかなスポーツマンタイプだったので、当然女性には非常に人気があった。

## 4 ・ 高校中退

孝一は、山形県下の第一の進学校である山形東高等学校に進んだ。生徒数は一学年三百名程度だったが、孝一の成績は二百番台後半だった。そうすると、否が応にも劣等生といわれるようになった。これに対し、うレツテルが付いて回り、教師達からも冷たくあしらわれるようになった。これに対して、何くそ、と思う内は未だ見込みがあつた。いつの間にかその感覚すら麻痺し、『どうせこちとら劣等生でござい、そのどこが悪い』と開き直るようになってしまった。部活はスキー部に所属していたが、これも悪影響を及ぼしていた。スキー部が活動するのは、雪が積もっている間だけで、それ以外はスキー部としては特別な用途で頻繁に利用された。落ちこぼれのレツテルを貼られた連中がスキー部に屯ってタバコを吸ったり、マージャンをやったり、酒盛りをしたり、好き勝手な事をしていたのだ。スキー部は悪の枢軸になって

いるような面があった。高校二年生の夏休み明け、実力テストが行われた。それは夏休みに出された課題を確実にこなしていれば、出来る問題ばかりであった。しかし、孝一は全く手付かずの状態だった。たので、散々たる結果だった。特に数学はテスト時間が二時間もあり、途中で退屈してしまった。それをスキー部の同級生に話したら、  
「コウもそうだったけの。俺もよ、暇で暇でよ。もうどうしようもねえから、ボツキしっ  
たっけず。吾十有七にして立つ。孔子センセの先いってっつ」  
そう答えた。スキー部の連中はそのレベルだったのだ。  
冬が到来し、雪が積もり始めると同時にスキー部も活動を開始した。冬休み中の一月の上旬、毎年恒例の合宿が蔵王で行われた。例年宿泊する民宿が、その年はたまたま予約が取れなかったため、別の民宿で予約を取っ

た。スキーの練習が終わり、晩御飯が済んだ後、スキー部の連中は酒を持ち出して来て、酒盛りを始めた。これはその年に限った事ではなく、以前からの定例行事であった。引率のスキー部顧問の教師が居る事は居たが、それは形式的に付き添っていただけで、合宿の練習自体には全く関与せず、スキー部員達が大部屋で雑魚寝するのに対し、自分だけ別室を取っていた。真夜中になっても大部屋のどんちゃん騒ぎが収まらないものだから、民宿の女将がクレームを言おうとして襖を開けて見た所、高校生達が酒を飲んでいるのにビツクリした。山形県一の進学校である山形東高の生徒が何たる様だ、と眠っていた引率の教師を叩き起して猛抗議した。その教師は、合宿の度に酒盛りしている事実について薄々感付いていながらも、見て見ぬ振りをするよくなタイプだった。おそらく例年泊っている民宿の人もそうだったのだろう。いわば暗黙の了解のようなものであったが、今回部外者

から猛抗議があり、何の対処も無いとする  
と、自分自身の管理責任が問われ兼ねないとい  
う事で、この事実を冬休み明け直後の職員  
会議にて報告した。前々からスキー部員の風  
紀の悪さは問題視されていたため、結局当事  
者全員が停学処分になった。  
停学期間中はずっと自宅謹慎しなければな  
らなかつた。当初はおおっぴらに学校をサボ  
れる程度にしか考えていなかったが、二、三  
日経つと暇を持って余すようになつた。かと言  
つて他の同級生達は日中勉強している訳だ  
し、同じく停学を食らつたスキー部の友達の  
所に遊びに行く訳にも行かなかつた。自宅謹  
慎と行つても本屋位ならいいだろうと考え、  
自転車で本屋にまで出掛けた。気に入つた本  
を二冊手に持ち、店外に置いてあつたマンガ  
本と一緒に買おうと思つて入口を出た瞬間だ  
つた。  
「君、待ちなさい！」  
孝一は本屋の店員に肩を掴まれた。言い訳を

する間もなく、孝一は警察に突き出された。警察ではまず最初に、『君は高校生位だろうが、この時間帯に何故外をぶらついているのか？』と質問された。現在停学処分を受けていると説明した所、どうしようもない奴だという事になり、直ぐに担任の教師が呼び出された。担任は渡辺寛治と言って、四十後半の国語の教師だった。通称『ナベカン』と呼ばれていて、手厳しい事で有名だったが、その分親身になって指導してくれるので、生徒達からは結構人気があった。本屋としては、お金さえ払ってくれば事を荒立てるつもりはないという事だったので、警察の方は直ぐに帰されたが、その後学校に連れて行かれ、親父も呼び出されて三者面談が行われた。孝一は、本を万引きする気は毛頭無く、店外に置いてある本と一緒に買うつもりだったと躍起になつて説明した。それについては、担任も親父もそうだったのだろうとあっさりと認めた。担任は国語の教師らしく、『李下に冠を

正さず』という言葉もあるから、人から怪しまれるような挙動な極力避けた方がいいと言った。担任の説明では、今回は不運な面もあったが、自宅謹慎の身でありながらそれを破り、どのような事情であれ結果として警察沙汰になつてしまつた点はかなり問題であるという事だつた。学校の成績も非常に悪いし、停学処分が長引けば、高校三年生に進学できない可能性があると云つた。それまで孝一は黙つて聞いていたが、慚然としてもう高校を辞めると言い出した。もう勉強について行けないし、興味も無い。別の道を歩みたいと言つた。これを聞いて、担任は慌てた。半分発破をかけるつもりで言つていたが、まさか高校を辞めると言い出すとは思わなかつたのだ。担任は態度を軟化させ、孝一を懇々と諭した。高校を中退するなどという事は、滅多に言うものではない。経歴に大きな傷跡を残し、今後の人生に大きなマイナスとなるのは間違いない。例え留年したとしても、高校は

卒業して置いた方が絶対いい。学歴が全てではないが、現実問題として高校中退となると相手にされない。担任の言い分は尤もであったが、孝一は従う気になれなかった。結局その日は家に持ち帰って親子で相談する、という事になった。

帰る道すがら、親父が言った。

「コウ、今日はとんだ災難だったな。あだないちやもん付けるんだったら、店外に本なて置くなつて感じだよな」

親父にそう言ってもらおうと本当に救われた。そして、親父には本当に申し訳ないと思っただ。おっ母が死んだから、親父は男手一つで俺と典孝を育ててくれた。父子家庭が寂しくなかつたと言えれば嘘になるだろう。でも、家に帰れば必ず親父と典孝が俺を待っていてくれた。親父はいつも黙々と仕事をしていた。典孝の方はと言うと、こちらも黙々と机に向かつて勉強していた。典孝は小学校低学年の頃から何も言われなくても自ら進んで机に向

かうような子供だった。そんな二人の姿は無言の励ましかったし、自分は決して一人ぼっちじゃないと思えた。なにより、七歳下で、自分より遙かに母親恋しかろう典孝が健気に努力している姿を見ると、うじうじしている自分が恥ずかしくなった。そして、夕食を食べながら今日あった事を話すうちに、いつしか寂しさなど無くなっていたものだ。

孝一は、中学三年の頃の出来事を思い出した。ある日文化祭に出す催し物をどうするか、学級会議で話し合われた。喧々諤々の大議論になり、話がまとまらなかった。担任の了解を得て、放課後に話し合いを続ける事になった。漸く話がまとまり、各自の役割分担を決めた頃には八時を回っていた。『親父が心配しているがもすんねな』、と思いつつ急いで家に帰った。驚いた事に一階の作業場に明かりが点いて、親父が障子の張り替え作業を行っていた。夜に表具作業を行うのは滅多に無い事だった。

「親父、ただいま」  
「お、コウか。遅かったな」  
「ゴメン。放課後に文化祭の打ち合わせがあ  
つて遅くなった」  
「んだがした」  
「親父、急ぎの仕事でも入ったのが？夜仕事  
するなて、珍しいな」  
「いや、ちよつとな・・」  
そう言うと親父はどっかりと腰を降ろした。  
その姿が余りに疲れているようだったので、  
仕事が詰まっているのかなと思つた。それ以  
上深追いしなかったが、後で典孝に確認した  
所、孝一が余りに遅いものだから親父が非常  
に心配して一階と二階を何度も行ったり来た  
りした。何をやっても落ち着かないから、そ  
れだったらいっそのこと仕事をしていようと  
いう事になつたらしい。それを聞いて孝一  
は、親父の気持ちが多分なかつた自分を恥  
じた。そして、今後帰宅が遅くなるようだつ  
たら、必ず親父に連絡するようになろう、親

父に心配掛けるような事は絶対するまい、と決意したのだった。

それが、今の自分はどうだ。スキー部の合宿中に酒をかつ食らって停学になり、おまけに警察沙汰まで引き起こしている。親父にどれだけ心配や迷惑をかけているか分からない。い。そう思うと、ポロポロポロ涙が溢れ出した。

「親父、ゴメン」

孝一が腕で涙を拭いながら言うと、

「なあに、気にすんな」

親父が事も無げに答えた。親父は柔道二段でがたいが良い人であったが、子供に手を挙げた事は一度もなかった。普段は寡黙で、黙々と仕事をした。晩酌で酒が入ると手の平を返したかのように陽気になり、良く冗談を言った。孝一は、そのどちらの親父も好きだった。詰まる所、孝一は親父の事が好きだったのだ。

「親父。担任の前では、ついカッとなって高

校辞めるとか言ってしまったけど、俺どうしたらいいんだべ？」

孝一は学校の先生には反抗的な態度を取る事はあっても、親父に逆らった事は一度も無かった。親父が辞めんな、と言えば従うつもりだった。孝一に取って、親父は絶対的な存在だったのだ。親父はいっになく、厳格に答えた。

「コウ、自分の事は自分で決めろ！そして、自分が決めた事には自分で責任を取れ！どうしても、どうしても我慢出来なくなった時だけ、家さ帰って来て泣け！」

それを聞いて、この親父の息子で本当に良かったと思っただ。例え世界中の皆を敵に回したとしても、親父だけは俺の味方でいてくれる、そう思えた。

結局、孝一は一月中旬に高校を中退した。そもそも勉強がつまらなかったし、『水兵リ』

「べ僕の船・・・」とか『咲いた咲いたコス

モス・・』とか必死に覚えた所で、今後の人生に役立つとは到底思えなかった。それにもし留年した場合、一つ年下の連中と同等に扱われる事になるが、それがどうしても我慢出来なかった。担任の渡辺寛治先生からは高校を続けるように再三説得を受けたが、もう就職先が決まっていると大嘘をついて受け流してしまった。渡辺先生は孝一を目の敵にしているような所があり、国語の授業中何度も手厳しく注意した。孝一はその度ごとに反抗的な態度を取った。傍から見れば犬猿の仲に見えたらうが、その実、妙に馬が合う部分もあった。孝一は渡辺先生が親身になって心配してくれているのが分かったが、半ば意地になつて辞めてしまつた。しかし、辞めた所でこれはいつて当てがある訳では無かつた。孝一は、暫く家の中で無為に過ごしたが、やる事が無い、という事がこれ程辛いとは思わなかつた。時間が経つのがなんと遅いことか。自分だけ社会の枠組みから外れてしまつたと

いや、やっぱり条件はかなり厳しかった。ようにも手に職は無く、高校中退というところ、この疎外感がある、こんな事をしていていいのか、という罪悪感がある。しかし、就職し

## 5・新聞配達

孝一が日々悶々と過ごしている姿を、親父が見るに見かねたのか、

「コウ、二月から朝刊の新聞配達ばしてみねが？」

と切り出して来た。早朝の冷え込みが一番厳しい時期で、以前なら即座に断る所だった

が、

「やる」

と二つ返事で承諾した。始める前に一応面接がある、という事だったので、開始前に孝一は一人で出かけて行った。新聞屋が何処にあるかは知っていたが、中に入ったのは初めてだった。間口が五メートル位と決して広くは無いのだが、入口を入れて直ぐ右手に真っ赤なスポーツカーが置いてあった。これが新聞屋の主人の愛車らしかった。左手には新聞のチラシを入れるためのテーブルが置いてあった。

「この狭いスペースに車なんか置いて。別に

駐車場を借りればいいのに」

それが孝一の新聞屋に対する第一印象だった。新聞屋の主人は四十台半ばで、頭はロマンスをかけているような人だった。非常に端正な顔付きをしており、サングラスが良く似合った。本人もそれを承知でかけていたのだろうが。奥さんの方は人の良さそうなおばちゃんという印象だった。高校時代の健吉さ良「お前が健吉の息子か。高校時代の健吉さ良く似ったごと」

それが主人の第一声だった。この主人は親父と同じ高校で、柔道部の先輩・後輩の間柄だった。そして暫く自分の高校時代の自慢話をした。自分の腕を見せて、

「昔の腕回りはこの倍位あったんだ。今は病気にしちやっけて細くなつたげんともな」

と言った。親父が自分の高校時代の事を話したのは滅多に無かったので、これまで聞いた事が無いような親父のエピソードもあった。高

校時代、親父は女性から結構人気があったが、柔道一筋で全く相手にしなかった事、後に女房になったおっ母も一方的に親父に想いを寄せていた事等を初めて知った。中でも親父が高校総体の県大会で準優勝した事がある、という話には本当に驚いた。

「俺がお前の親父に直接指導して、育ててやったんだ」

主人は誇らしげに言った。その時の孝一は、右も左も分からないような状態だったから、この言葉を額面通り受け取って、新聞屋の主人は凄く偉い人なんだなと感心した。

「じゃ孝一くん、明日から五時半まで来てける。七時まで配達を終了するのが原則だから」

最後にそう言った。結局、用件らしい用件はこの最後の一言だけだった。その日に孝一は早速目覚まし時計を二つ購入し、五時十五分にセットして寝るようになった。親父の方はほっといても自然に三時に目が覚めるらし

く、孝一が目覚めるともう親父は居なかつた。新聞屋に行くのと、新聞が区域ごと分かれて置かれており、後は配達人が区域ごとに自転車或いは原付バイクに新聞を積んで配りに出発するだけの状態になっていた。配達所の奥に狭い廊下を挟んで居間があるのだが、そこはいつも明かりが消されて真っ暗だった。最初のうちは新聞屋の主人や奥さんが一仕事を終えて、少し休んでいるのかなと、ぼんやり考えていた。

生来早起きではなかったのに朝起きるのは一苦労だったが、直ぐに配達には慣れ、他の配達人とも少しずつ親しくなっていた。一番親しくなったのは大橋さんという七十半ばのおじいちゃんだった。定年を過ぎてから新聞配達を始めた人で、その道十五年の大ベテランだった。皆がじつちゃん、じつちゃんと呼んでいたのだから、孝一もじつちゃんと呼ぶようになった。じつちゃんとは新聞屋に来る時間がいっつも同じ位だったのだから、新聞を自転車

に積みながら色々話を聞かせてもらった。それで分かったのは、新聞屋の主人も奥さんも朝は寝ていて、殆ど顔を出さないという事だった。そして、親父がチラシ入れから新聞の切り分けまでを全て一人でやっているらしいかった。親父からそんな話をついぞ聞かなかつたので、非常にビックリした。五年位前までは新聞屋の主人が中心となつて切り盛りしていた。ところが、酒の飲みすぎか何かで慢性肺炎になつてしまひ、徐々に朝起きる回数が減つていき、終いには全く起きなくなつた。以前から、親父は朝一番に新聞屋に顔を出し、主人の補佐を行つていた。新聞屋の主人の作業量が減るに従ひ、親父の作業量が増えていった。そして最終的には完全に親父一人が切り盛りするようになったらしい。「お前の親父はおとなしいけど、本当にたいした奴だな。この新聞屋はお前の親父で持つているようなもんだ。それに引き換え、この主人はなんだべな。何にもすねもん

な。口ばかりは達者だけんどもな。じっちゃんは今よくそう言っていた。それを何度も聞いているうちに、孝一も新聞屋の主人を軽蔑するようになっていった。その新聞屋は週休制で、親父は月曜日が休みだった。そのため、この新聞屋は月曜日が非常に大変だった。なにせ五時半に新聞屋に行っても、他の配達人も来たばかりで、入口の直ぐ傍に新聞が百部ごとの塊で山積みされていている状態だったのだ。それらをテーブルの上に乗べて一部一部にチラシを入れる必要があった。チラシは、新聞に入れ易いように一枚を横折にし、それに他のチラシを差し込んで一部にまとめてテーブルの上においてあるのが通例であった。しかし、チラシの種類が二、三種類ならその作業がなされずに、そのまま置いてある事がよくあった。月曜日にチラシ三枚入れとなると、皆で手分けして作業しても配達に出れるようになるまで一時間は掛かった。そうすると配達に出れるのが六時

半過ぎになった。七時を過ぎると、新聞が届かないという苦情電話が殺到した。月曜日は一番大変であると同時に、親父の有難さが身に染む日でもあった。二月下旬の月曜日のことだ。それは新聞配達を始めて四回目の月曜日で、過去三回の経験から、孝一は少し早目に行こうと思いついた。目覚ましをいつもより三十分前の四時四十五分にセットしたが、それが返って仇になってしまった。目を覚ますと五時四十五分、で、二つセットしたのはずの目覚ましは、双方ともいつの間にかオフになっていた。親父は一階で既に表具屋の仕事をしていたが、起こしてはくれなかった。新聞配達を始める前、  
『コウが寝坊しても、俺は起ごさねがらな。自己責任で対応しろ』と言われていたのだ。六時頃新聞屋に行く、その日はチラシが三枚で、じっちゃん一人がチラシ入れの作業をやっていた。どうも他の配達員も寝坊しているらしい。これは配達に出るのが七時近くに

なるな、と腹を括った。すると、珍しく新聞屋の奥さんがむっくり起き出して来た。六時を過ぎててもチラシがかなり残っている状況を見て、さすがにこれはまずいと思ったのだから。三種類のうちの二種類を無造作にテーブルの下に置きながら、

「これとこれ、入れなくて良し！」

と高らかに宣言した。孝一はそれを聞いて、

「おお、奥さんはなんと雄々しい決断をするのだろう」と感激したものだ。後々考える

と、それは犯罪行為であったが。それから奥さんもチラシ入れを手伝って、なんとか六時半には配達に出掛ける事が出来た。

基本的には孝一は時間を持って余っていたので、三月から夕刊配達も始めた。大橋のじつちゃんも夕刊配達をしており、良く顔を合わせた。親父は二区域配達していたので、孝一とじつちゃん配達準備をしている所に、最初の区域の配達を終えた親父が戻って来るのが通例だった。親父とじつちゃんは親子程

年の差があったのが、非常に馬が合うらしく、実の親子のように打ち解けて良く話をした。親父は基本的に人付き合いをしなかった。親父は小さいので、これは珍しい事であった。親父は小さい頃自分の父親を亡くしており、父親の記憶は全く無いと言っていた。何処か自分の父親の面影を追い求めていたのかもしれない。た。じっちゃんにも親父と同じ位の息子がいるが、東京の方に就職して殆ど帰ってこないと言っていた。じっちゃんは親父を新聞屋の大黒柱と称した。あんな新聞屋の主人なんかは存在意義がない。あんたがいるから新聞屋が成り立っているんだといつも言っていた。親父もじっちゃんを立派な人格者と称した。孝一もじっちゃんを大好きになった。それにしても、新聞屋の主人は夕刊すら全く手伝おうとしなかった。奥さんの方は、夕刊の準備、翌日のチラシの準備、新聞の入れ・止めの管理、集金等を担当していた。たまに奥さんに用事があった居間の方に入って

いくと、大抵主人はちゃぶ台を手前に置いてあぐらをかき、ムスツとした顔でタバコを吸いながらテレビを見ていた。会釈くらいはしようと思つて主人の方を見ても、主人は孝一を見向きもしなかつた。ちゃぶ台の上には、いつも水のようなものを入れたグラスが置いてあつた。おそらく水ではなく、日本酒と思われた。奥さんと色々話していると、突然主人が

「ああ、また始まつたよ」

と人生に絶望したかのように言つて、腹を押さえ、俯く事が有つた。それでも奥さんは何事も無かつたかのように話を続けた。いちいち反応していられたのだろう。奥さんは

「うちの旦那は慢性膵炎で、ホントは入院しなけりやならない程ひどい」

と言つて、ケロツとしていた。

ある時、主人は奥さんと盛んに議論していった。主人は

「中央は汚ねー、汚ねー」  
と連呼した。話を聞いてみると、用事があつて、山形で一番大きい中央販売所に行つて配達員に色々話を聞いて見ると、週休制は無く、休みは新聞休刊日のみで、それでいて配達部数に比して給料はかなり低いという事だつた。実際配達部数は孝一よりずっと多いのに、給料は孝一より安かつた。  
「だいたい休みを与えないなんてのは、労働法違反なんだぞ」  
主人は憤つていた。そう言うだけあつて、この新聞屋は金銭面に関しては寛容な所があつた。親父は代配専門で、週休で休んでいる人の区域を配つていた。当然配達料も割高なのだが、その他に特別手当と称して十万円受け取つていふと言つていた。また、希望者には朝刊配達後、奥さんが朝食を振る舞つた。週休制もこの新聞屋がいち早く取り入れたらしい。それでも孝一は主人に賛同する気になれなかつた。朝刊は手伝わない。夕刊も手伝わ

ない。集金する訳でもない。何もせずただ飯食ってる自分が一番汚いのではないか、絵に描いたような偽善者ではないか、そう思った。朝刊と夕刊をやって、ある程度収入は得るようになった。このままの状態を続ける訳には行かない。孝一は徐々に焦燥感を募らせて行った。そうかと言って、就職するにしても手に職が無ければ駄目だ。とにかく何か資格を取ろうと考えた。親父が一年間調理学校に通って調理師免許を取得した話は知っていた。料理は殆どした事が無かったが、興味は持っていたので、自分も調理師学校に通ってみようかと考えた。しかし、募集要項を見ると高校卒業以上となっていた。ここでも高校中退という壁が厚く立ちはだかった。他に調べて見た所、一年修業すれば『食育インストラクタ―』という資格を取得出来る料理学校があったので、取り敢えずそこに通ってみようかと

考えた。親父に相談すると即座に賛成してくれた。早速願書を取り寄せ、来月の四月から通う手続きをした。日中は家の台所は空いていたから、自由に使う事が出来た。基礎的なレシピ本を購入して、簡単な料理を作る事から始めた。やってみると、料理は意外に楽しかった。次第にレシピ本では飽き足らず、この部分はこう作ったらどうだろう、と考えるようになった。自分流にアレンジし出すと、これが非常に面白かった。同じ食材を使ったとしても、舌触りや味が全く異なるものが出来る。料理とは何と奥深いものだろう。孝一は料理の研究に没頭するようになった。食事する時も、単に食べてうまいとかまずいだけでは無く、この味付けはむしろこうしたらいいのではないかと、調味料にあれを使ってみたらどうかと色々と考えるようになった。実は親父の料理で前々から一つだけ不満な点があった。それは料理の彩を全く考慮していないという事

だ。同じ料理でもやはり見た目が良ければおいしいと感じるものだ。料理は触角、臭覚、味覚、視覚のどれも手抜きしてはいけない。そう思っただけでいたが、やはり親父に意見する事は出来なかった。

孝一は四月から料理学校に通い始めた。料理学校は単に料理を作るだけかと思っていたが、食について様々な事を学ぶ必要があり、たかが料理学校と侮っていた自分を恥じた。夕刊配達があると、落ち着いて勉強出来ない。ので四月から辞めたが、朝刊配達は続けていた。せめて料理学校に掛かる学費位は自分で稼ぎたいと思っていたのだ。土曜日は料理学校は休みだった。しかし夕刊は休みではなく、基本的に夕刊の配達人が不足していたため、良く代配という形で配達を手伝った。代配はその都度代配料を貰うのであるが、朝刊・夕刊・区域を問わず固定料金だった。夕刊は薄いし、マンションに配達する場合、夕刊の場合は一階の集合ポストに入れば良か

ったので、非常に割のいいアルバイトであつた。五月に入つて、じつちゃんが突然入院した。直腸癌と診断され、癌部分を切除して人口肛門を付けたという事だった。もう配達は辞めるのかな、と思つていた。しかし、二ヶ月後、じつちゃんは見事に復帰した。じつちゃん、復帰した日、朝の五時半に新聞屋に行く。家で親父に聞いてみた所、四時半に店に来て配達に出掛けたという話だった。体に負担を掛けないように、早めに出てゆっくり配ったのかなと思つていたら、親父がしみじみと言つた。「いやー、コウ、俺はじつちゃんにまた教わつたよ。二ヶ月ぶりに店に出て来て、じつちゃん、なんて言つたと思ふ？ 『明日から配達だと思つたら、一睡も出来なかつた』だとさ。配達歴十五年の大ベテランがだぜ。俺もなんかやさしい言葉掛けたくなつて、『じつ

ちゃん、新聞配達なんか辞めて、もっと体に負担の掛からない楽な仕事に変えたらどうだ？』って言ったのさ。そしたら俺はごしゃがったよ。『健さんからそだな話聞くとは思わなかつた！働くって事は傍を楽にする事だべ？皆から有難うって感謝されてなんぼさ。朝起きて皆の一番の楽しみは新聞を読む事だもの。俺は単に新聞ば届けてるだけでね。さわやかな朝ば届けてんだ』俺はそれを聞いて、自分が恥ずかしくって恥ずかしくって。本当に穴があいたら入りたかったよ。『そう言つて、親父はボロボロ涙を流した。孝一はそれを聞いて、今のセリフは親父ではなく、新聞屋の主人にこそ聞かせてやりたかった、と心底思った。』

じっちゃんも復帰して一ヶ月後に再入院した。そしてその一ヶ月後に亡くなってしまった。実は直腸癌は全身に転移しており、余命二か月という診断が下されたらしい。家族はそれを隠した。本人は癌が全身に転移してい

る事を知らぬまま亡くなったという話だった。さすがの親父もこれは堪えたようだった。が、悲しんでいる暇は無かった。病気で休む配達人が居る。寝坊する配達人が居る。突然辞める配達人が居る。新入りの配達人が居る。新聞を新しく取る人が居る。止める人が居る。新聞はこちらの事情お構いなしに、毎朝三時に配送されて来る。そして、問答無用で最悪七時までには配達を完了しなければならぬ。新聞配達は諸行無常を地で行くような仕事であつた。

じっちゃんが亡くなって三週間程度経つた土曜日の事だ。孝一は夕刊の代配を終え、奥さんに代配料を貰おうと居間の方に入ろうとした時、主人が喋っている声が聞こえて来た。盛んに『あのじい』と叫んでいた。どうもじっちゃんの事を話しているようだった。た。あ。あのじいは大嫌いだったよ。配達員の分際で、何かにつけて俺にいちやもんつけやが

って。あのじじいはどうせ年寄りの道楽でや  
ってたんだべ？罰が当たって死んだんだ。馬  
鹿な奴だ」  
それを聞いた瞬間、孝一の中で何かが切れ  
た。居間の戸を開けると、主人はちゃぶ台を  
手前に置いてあぐらをかき、タバコを吸って  
いた。孝一は主人目がけて居間の中をズカズ  
カ入って行き、主人の胸座を無造作に掴ん  
だ。そして、前後に大きく揺すりながら怒鳴  
り付けた。  
「テーマにじっちゃんを馬鹿呼ばわりする資  
格あんのが！じっちゃんは『俺は単に新聞ば  
届けてるだけでね。さわやかな朝ば届けてん  
だ』って言ってたんだ。テーマにはそんな気  
持ちこれっぽっちもねえべよ！テーマ、いつ  
か『中央は汚ねー、中央は汚ねー』って言っ  
てたな。一番汚ねーのは、何もせずにただ飯  
食ってるテーマ自身だろが！！」  
主人を揺するうちにサングラスが外れた。そ  
こに現れたのは、怯えきった、今にも泣きそ

うな、弱い弱い中年男の顔だった。主人は余り突然の出来事に何の抵抗も出来ず、なされるがままだった。タバコをもみ消すと、落ちたサングラスを拾って俯いたまま、無言で二階へと階段を昇って行った。奥さんは茫然として突っ立っていた。孝一は、代配料を受け取らないまま家に帰った。もう二度とあの新聞屋に出入り出来ないだろうと覚悟した。そして、親父にどう報告しよう、親父に申し訳ない、そればかり考えた。親父は、いつも四時頃夕刊配達から戻り、表具屋の仕事を再開して六時頃まで働くのが常だったが、この日は六時になっても帰って来なかった。その当時、典孝は小学五年生だった。親父の帰りが遅いので、気を揉み始めた。めた。兄貴、親父遅いね。何かあったんだべが？途中で事故でも遭ったのんねべね？」典孝にそう言われると、もう気が気でなかった。しかし、孝一には親父が新聞屋に居る事

は分かっていていた。かなり揉めている事も分かっていていた。俺はまたしても親父の顔を潰すよ  
うな事をしてしまった。もう謝罪のしようが  
ない。六時半になって、親父が帰って来た音  
がした。孝一は一目散に一階へ駆け降りる  
と、親父の前に土下座して、そのまま号泣し  
た。親父は急に行く手を阻まれる格好とな  
り、立ち往生してしまった。  
「コウ、頼む。こだな所で泣がねでけろ。今  
日は時間ねえがら弁当買って来たんだ。コ  
ウ、話は弁当食いながら聞く。取り敢えず二  
階さ行くべ」  
そうして皆で二階へと上がって行った。  
「ちよっと待っててけろ。せめて味噌汁作っ  
から」  
そうやって、親父は調理を始めた。そうこう  
するうちに、最初はかなり取り乱していた孝  
一も、平静を取り戻して行った。  
「どうれ、弁当食べっぺ。コウ、話があるん  
だったら、食いながら聞くぞ」

「親父、俺、俺・・・。あのくそ野郎、じつ  
ちやんば馬鹿呼ばわりしやがって。絶対に許  
さねえ！」  
いざ、説明するとなると、頭にカーツと血が  
昇った。孝一は感情が先走るタイプだったか  
ら、興奮すると説明が極めて下手だった。孝  
一を制して親父が言った。  
「ちよつと待てや。じゃ、まず俺から先に話  
させてけろ」  
親父の話をもとめるところだ。親父が二区  
域目の配達を終えて新聞屋に戻ると、二階か  
ら主人がドタドタ降りてきて、物凄い剣幕で  
怒鳴って来た。  
「俺は何もしてねのに、突然お前の息子に胸  
座を掴まれて暴力を受けた。しかも、親子程  
年の違う若造にテメー呼ばわりさった。暴行  
罪及び侮辱罪で、お前の息子を訴えてやる。  
保護者としてどう責任取るんだ！」  
親父としては突然そう言われても、何の事や

ら皆目見当が付かなかつた。とにかく主人が怒り心頭で、思い出せば思い出す程怒りが増幅している事は分かつた。親父は平身低頭ひたすら謝罪した。それでも主人の怒りは収まらず、本気で警察に通報する事を考えたようだ。しかし、新聞屋が警察沙汰を起こすのは世間体が悪い事、暴力を受けたといつてもこれといつて怪我も無ければ物損も無い事、相手は未成年者である事、そもそも配達人の管理責任者は自分である事などから断念したらしい。

「あの野郎、二度とこの新聞屋に近付けんなよ！」

主人は何度も念押しした。親父にすれば、暴行、暴言については完全にこちらが悪いが、それに至った経緯が全く分からなかつた。主人に聞いても、

「知らね！あの野郎に聞いて見ればいいだろうが！」

としか言わなかつた。

「主人とこれ以上話しても、埒が明かないと  
思ったから、家さ帰って来たんだ。しかし、  
コウ、お前ホントに主人の胸座を掴んだり、  
テメー呼ばわりしたんか？」  
「・・・した」  
「なしてそだな事したのや？」  
「あいつ、じっちゃん的事ば『あのじじいは  
どうせ年寄りの道楽でやってたんだべ？罰が  
当たって死んだんだ。馬鹿な奴だ』とか抜か  
しやがったんだぞ。あいつにそだな資格ねえ  
べ？朝刊は手伝わね。夕刊も手伝わね。集金  
する訳でもね。何にもすねで大口叩いている  
あいつば見てつと、腹が立って腹が立ってし  
ようがなかったんだぞ」  
「んだが・・・」  
そう言つて、親父は腕を組んで考え込んだ。  
「あん人は俺の高校時代の柔道部の先輩なん  
だよ。昔はこうで無かったんだげんとな。五  
年位前までは朝もちゃんと起きたんだっ  
け。慢性腓膜炎になつてからだな。起きなくな

ったの」

「慢性肺炎って要するに酒の飲みすぎだべ？  
昼間っからあんな風にちゃぶ台の上さ日本酒  
置いて、タバコぷかぷか吹してるんだった  
ら、そだなもん治るはずねえべよ」

「コウ、そだいごしやぐなずー。いずれにせ  
よ、二十歳以上年上の人さ向かって手を挙げ  
てしまったのは、完全にこっちが悪いんだ。  
お前、頭さ血が昇つと前後不覚になつてしま  
う所あんだよ。それは絶対直さねどだめだ。  
そういう時に、一步引いて冷静に考える事が  
出来ねど。残念だげんと、新聞屋のバイトは  
今日までだな」

「・・・分がつたつす」

「それからな、あんな人は気の毒な人なんだ。  
出来ればあんな人を許してやれ。『罪を憎んで  
人を憎まず』、だ」

「・・・」

孝一は何も答えなかつたが、そればかりは  
幾ら親父の言う事でも従う事は出来なかつ

た。自分の所の配達員が亡くなったんだ。それを『罰が当たって死んだんだ。馬鹿な奴だ』とは何事だ！それに俺はクビになり、明日からは行かない。一区域穴が空くという事じゃないか。それをどうやってカバーするつもりなんだ。テーマは何にも考えてねんだろが！放っておけばなんとかなると思ってるのが！やはり、孝一は一步引いて冷静に考える事は出来なかつた。

新聞配達を辞めて、孝一は多少時間にゆとりがなくなるようになった。早起する必要があるようになった。料理学校に通う学費位は自分で稼ぎたいと考えていたから、何かいいアルバイトはないかと探した。親父に相談して見た所、心当たりがあると云った。その二日後、朝刊配達から帰るや否や、

「コウ、中華屋『上海』で働いてみねが？」

と切り出して来た。『上海』というのは、山形でも指折りの中華屋で、余りのビツクネームに孝一はビツクリした。

「『上海』？あだないいところ？」

「働くったって、お前、調理師免許ある訳でねし、単なるアルバイトだぞ。皿洗いとか、客から注文聞いたりとか、雑用するだけだべ。んでもよ、将来料理関係の仕事に就きたいのであれば、そういう環境に慣れておいた方が何かといいのんねが？」

「やる！やる！やる！やる！んでも親父、そだな伝手持ってたんか？」

「伝手って訳ではねんだ。俺、代配専門だからあちこちさ新聞配ってっぺ？今日はあそこ。あの店長の家さ新聞配る区域だったんだよ。あの店長早起きだから、良く会うよ。俺が新聞配達始めた頃から配ってっから、もう十年位になるな。ある意味十年來の知り合いなんだ。何時頃郵便受けに新聞取り来っか大体見当付くがらよ、今日の朝新聞配る時、電信柱の影でそつと観察してたんだ。そして、偶然ば装って話し掛けて、『家の息子、アルバイトで雇ってくんねが？』って頼んだら、あっさりいいって言うてくれた。んでもよ、あん人は厳しい事で有名なんだよ。見習いで雇った人の殆どは半年以内に辞めるって自分で言ってた。アルバイトなら、また違うがもすんねけどな。コウ、大丈夫か？」

「大丈夫だっす」  
そのような経緯で、孝一は中華屋で週二回

アルバイトをするようになった。親父の言う通り単なる雑用係のようなものだったが、孝一にはこれ以上無い勉強の場だった。第一、プロの調理を間近で観察する事が出来た。また、盛り付け方法も非常に参考になった。客の食べ残しをこっそり食べる事もあった。これは何も食い意地が張っていた訳では無い。味を確認したかったのだ。一番良かったのは、余った食材をただで貰える、という事だった。それを家に持ち帰って、料理の研究に活用した。色々な食材を組み合わせ、どんなレシピ本にも無い創作料理を作るのが趣味だった。孝一は俄然張り切って働いた。途中かかった。孝一は俄然張り切って働いた。途中から週二回を三回に変えてもらった程だ。孝一は単なるアルバイトだったから、時間を守り、与えられた仕事をきっちりこなし、客に失礼の無いように振る舞えば、まず怒られる事は無かった。しかし、社員達は店長から良く怒られていた。店長は全く妥協を許さない

人で、歯に衣着せぬ口調で厳しく指導した。見習い社員の中には突然来なくなる人もいた。孝一は横目でそれを観察しながら、もし自分が社員だったら、と自分の立場を置き換えて考えるようになった。これも非常にいい経験であった。

孝一は料理学校のカリキュラムを修了し、食育インストラクターの資格を取得した。中華屋では、孝一のアルバイトとしての勤務態度を高く評価していたから、正社員として雇って貰える事になった。親父の目論見通り事が進んだのだ。正社員と言っても、最初の三ヶ月は見習い期間で、調理の指導は全くなく、雑用ばかりやらされた。少しでも気を抜くと先輩社員から手厳しく怒られた。店長の厳しい指導に耐え、ふるいにかけて店に生き残っている先輩達もやはり厳しく、プロ意識の高い人ばかりであった。孝一の他にも一人正社員として雇用された人がいたが、一ヶ月後に

「俺は雑用係じゃねえ！」

と言いついて残して辞めてしまった。試用期間が過ぎても、調理は全くさせてもらえず、下働きばかりやらされた。正直、孝一も何度か腐りかけた。こんなやつてられっかと思つた。しかし、挫折する訳にはいかなかった。途中で投げ出せば、親父に恥をかかす事なる。どんなに辛くとも耐えるしかない。これ以上親父の顔に泥を塗る事は絶対に出来ない。孝一を支えたのは、その一念であつた。

## 7・典孝

佐藤典孝は小さい頃から運動が大の苦手だった。おまけに背は低く、痩せていて、青白かった。兄貴がスポーツマンタイプだったから、対照的だった。顔付きも兄貴とは似ていなかった。どうも、兄貴は父親似で、典孝は母親似らしかった。尤も、母親は典孝が二歳の頃亡くなったから、典孝には母親の記憶は殆ど残っていなかったが。性格も対照的で、兄貴が社交的で友人も多数いるのに対し、典孝は内気で一人で行動するのが好んだ。性格の方は兄貴が母親似で、典孝は父親似であった。運動は駄目でも、典孝には圧倒的な特技があった。勉強である。学業成績は極めて優秀で、小学生の頃からずっと一番だった。自ら進んで机に向かうような子供であつたから、当然の如く近眼となり、小学四年の頃には、やや厚めの眼鏡を掛けるようになった。一緒に遊ぼうと誘われても拒否したから、『ガリ

勉『、『もやし』、『青瓢箪』、『ド近眼』等の陰口が常について回った。しかし、典孝は自分に自信を持っていたから、何を言われようと気にしなかった。典孝に取ってそれは負け犬の遠吠えにしか聞こえなかったのだ。事実、そういう奴らに限って勉強で困った事がある。と手の平を返したようにペコペコして、敬語まで使って来た。自分はエリートだ、そんな犬どもとは住む世界が違うんだと思っていた。典孝は小学生の頃から人一倍エリート意識が強かった。中学生になると、典孝は宇宙に興味を持つようになった。典孝は『一番』というものに非常に固執していたから、二十世紀で最も優れた物理学者と言われるアインシュタインを尊敬していた。彼の伝記や相対性理論の入門書を読むうちに、必然的に天文学について造詣が深くなっていた。太陽系、銀河系、気の遠くなるように広い宇宙・・・。喧騒な日常を離れて宇宙に想いを馳せるのは、非常に

ロマンを感じる事だった。  
超常現象には眉つば物も多いが、典孝はU  
FOの存在は信じていた。この広い宇宙で地  
球外生命体が居ないはずが無いのだ。実際、  
一度だけUFOを見た事が有った。中学一年  
の夏休みの事だ。良く晴れた昼間に、典孝は  
親父と一緒に一階の作業場にいた。親父は  
黙々と表具屋の仕事をしていた。典孝がなに  
げなく外を見ると、太陽は丁度頭の真上にあ  
った。太陽を直視しないように目を細めた  
時、典孝はあれっと思った。太陽の周りを鳥  
のようなものが飛び回っていたのだ。最初は  
カラスかと思った。しかし、形が違う。それ  
は楕円形で、決して鳥の形はして無かった。  
また、飛ぶ高度が違う。明らかに、通常鳥が  
飛ぶ高度よりはあるか高方を飛んでいた。そし  
て、なによりも飛び方がまるで違う。それは  
上下左右へ変幻自在に飛び回っていたのだ。  
その変則的な飛び方をじっと見つめながら、  
典孝は親父に言った。

「親父、UFOだ」  
驚く程冷静な声だった。親父も仕事をしながら、冷静に答えた。  
「んだが」  
この一言を以って、典孝の人生初の、そして唯一の超常現象体験は幕を閉じた。わずか三十秒足らずの話である。それ以来UFOを見た事は無いが、今でもあれは間違いなくUFOだったと確信している。

8・ズルムケ

典孝は兄貴の孝一と同じく、山形東高等学校に進んだ。しかし、成績に関しては、天地程の開きがあった。孝一の成績は二百番台後半だった。が、典孝は高校でもずっと一番を維持していたのだ。そうすると、どの教師からも一目置かれるようになり、別格の扱いを受けけるようになった。

高校二年のある時、廊下を歩いていると、五十過ぎの年配の教師から呼びとめられた。「おい、佐藤君。君、佐藤孝一の弟なんだってな」

「えっ？はい、そうですけど」

「僕はね、国語を教えている渡辺って言うんだ。以前君の兄貴の担任をしてたんだよ。君の兄貴から聞いた事ないかい？」

「あっ。先生が渡辺先生ですか。兄貴の担任をして頂いた事は知っていたんですけど、顔と名前が一致しなくて」

「そうか。僕も最初全然気付かなくてね。」

顔は似てないし、佐藤なんて名字ありふれて  
いるしね。ついこの前同僚の教師から教わっ  
て知ったんだよ。しかし、君はいつも成績ト  
ップだろ。賢兄愚弟という言葉はあるが、君  
ん所は全く逆だね。どう？兄貴は元気か  
い？」  
「はい、元気です。今『上海』という中華屋  
で働いています」  
「うん。五年位前にそこに就職したと聞い  
た。今でもそこに勤めているという事は、長  
続きしてるんだな。君の兄貴なんか、高校辞  
める時、『もう就職先は決まってる』とか大  
嘘ついたんだぜ。俺もそれは嘘だと思ったか  
ら、父親に電話で確認したら、案の定嘘だっ  
た。でも、君とこの父親も寛容なのか何な  
のか、『孝一は一度言い出したら聞かないか  
ら、本人の好きにさせてやってくれ』だと  
さ。まあなんだかんだ言ってる、山形でも指折  
りの中華料理屋で働いているんだから、大し  
たもんだよ。じゃ、兄貴によるしくな」

そう言っ、渡辺先生は去って行った。典孝は早速この事を兄貴に報告した。兄貴は驚いたように言った。

「ナベカンって未だ東高さ居たんか。もうとつくにどっかに飛ばさったと思っ、たよ。あの野郎には氣をつけろよ。あの野郎、なにかと俺に目を付けやがってよ。授業中に口笛吹いたとかいちゃもんつけて、俺のホッペタ思いつきり切りつねりやがって。あの野郎、くそ生意気にも小説の本なんか出してんだ。

『火星冒険』って本なんだ。タイトルからしてダメだべ？面白やぐもなんとねー本だ」

「うん。図書館で『渡辺寛治先生の書いた本』って紹介されてたよ。俺、宇宙に興味持ってるから読んだ事あんだよ。物理学的には火星に対して誤った認識をしている箇所が沢山あんだ。でもまあフィクションだし、ストリー的にはまずまずなのかねが？兄貴も読んだ事あんの？」

「あるはずねーべ。なしてあだな面白やぐも

なんともねー本読まなきゃなんねーの」  
「兄貴、あの先生のこと目の敵にし過ぎなん  
でねえの？兄貴のこと気にかけてたぜ」  
「んねんだ。お前には分がんねがも知やねけ  
ど、あの先生な、あの先生な・・・」  
典孝は、はっとした。兄貴が今まで見た事が  
無いような苦渋に満ちた表情をしていたから  
だ。  
「ブルムケなんだよ！」  
「ブルムケ？」  
「ああそうだ。高校内に合宿所ってあっぺ？  
あそこの風呂場の脱衣所で、偶然あいつば見  
かけた事あったんだよ。その時、俺、はつき  
りと見ちまった。パンツを脱いだ際は、確か  
にホーケーだったんだ。次の瞬間見た時に  
は、ちゃっかりブルムケてやがったんだ。男  
として最低だべ？」  
話を聞きながら、典孝は胸に熱いものがこみ  
上げて来るのを感じた。

典孝には秘かな楽しみがあった。高校から歩いて程ない所に、銭湯屋があった。典孝は帰宅部だったから、授業が終われば直ぐに家路に着いた。しかし、毎日直ぐに家に帰った訳ではなく、週に何回かはその銭湯屋に立ち寄っていた。学校で勉強し、それが終わって家で直ぐ勉強、となると余りに素っ気ないし息が詰まった。息抜きだって必要だ。かといってスポーツで汗を流すのは性に合わなかった。足を伸ばしてゆっくり銭湯に浸って汗を流すのが最上の息抜きだったのだ。午後四時頃となるとかなり空いていたし、高校の学校帰りに銭湯に寄るという発想は皆持って無いように、同級生に会う事はまず無かった。よって、心置きなく銭湯に浸かる事が出来た。しかし、典孝には一つだけ悩みがあった。それは典孝の男性器が小さく、包茎である事だった。小さいのはしようが無いとしても、高校生にもなつて包茎というのは、非常に恥ずべき事のように思えた。しかも、山形県下で

第一の進学校である山形東高校で成績トップの自分が、だ。タオルで固くガードするのも罪を背負った罪人のようだし、第一湯舟に入る時はタオルを外さなければならなかった。包茎といつても仮性包茎だったので、パンツを脱いだ直後、典孝は素知らぬ顔でズルムケた。しかし、ズルムケにも後ろめたさはあった。『こんな卑怯な事してんの、もしかすると世界で自分一人だけかもしれない』

典孝はずっとそんな罪悪感にさいなみ続けて来たのだった。しかし、ズルムケ野郎は自分の他にも居たのだ。しかも、意外に身近な所に。

「兄貴、俺さ渡辺先生ば責める資格はねえ。実は俺もズルムケなんだ」

典孝は兄貴に正直に告白した。

「俺、中学の時からずっとこう考えて来た。明日こそ本ムケになってやる、絶対なつてやるって。んだども、高校生になった今でもホ

「ケーのまんまだ。今はもう半分諦めてんだ  
げんと、皆の前だどつい意地を張ってズルム  
ケちゃうんだ」  
「ノリ、お、お、お前・・・」  
兄貴は典孝の両肩をガツチリわしづかみにし  
て、絶叫した。  
「お前もだったんか！！」  
なんのことはない。兄貴もズルムケだったの  
だ。兄弟揃って、ズルムケである事が分かつ  
た瞬間だった。  
典孝にすれば、渡辺先生は通りすがりに見  
たショーウインドーのような存在に過ぎなか  
ったが、兄貴にすれば、毎日否応が無しに突  
き付けられる残酷な現実だったに違いない。  
つまり、渡辺先生は自らを写す鏡だったの  
だ。典孝は続けた。  
「けど、俺の場合三分しか持たねんだ。三分  
経つといつの間にか元に戻ってる。単に戻る  
だけじゃなくて、必ずチン毛を巻き添えにす  
るから嫌やねん」

「兄弟！血は争えねえな」

兄貴は感慨深げだった。

「ノリ、いつそのこと俺とお前とあの先生でトリオ組むべ。トリオ名は『ズルムケ三兄弟』だ！」

「俺と兄貴で『ズルムケ兄弟』では駄目なのか？」

「それでは弱い。あの先生を加えて、三兄弟でねど我慢できねえっ！」

「あれっ」

「ん？何した？」

「兄貴、さつきからあの先生のことボロクソ言ってるげんと、ホントはあの先生のことスキだったりして・・・」

「バ、バ、バカ野郎！そだなごとあるはずねえべ」

兄貴は大いにうるたえると、急に話題を変えるように言った。

「しかしノリ、あの先生な、湯舟に入っても、体を洗っても、ずっとズルムケたまままだ

ったぞ。何かコツみたいなものがあったべ  
が？」

「さあ・・・。ひよっとすると、その道のプ  
ロカもしんねえぞ。『仮性包茎』って本書い  
てんだべ？」

「オメー、上手いこと言うねえ。今度あの先  
生に会ったら聞いてくんね？ズルムケのコツ  
を」

「あー、分かった、分かった」

典孝は勢い余って答えてしまったが、結局そ  
の約束は果たされないまま終わった。

行われた。最初の席は出席番号順に割り振られた。典孝の直ぐ前の席は、斎藤佳勝という丸坊主の男で、泉福寺という寺の住職の息子だった。典孝のお母のお墓も泉福寺に有り、佐藤家は泉福寺の檀家であった。高校三年を留年しており、勉強は全く出来なかった。が、恰幅が良く貫禄十分で、一種独特の雰囲気があった。彼は昼休みになると、いつも背筋をピンと伸ばして椅子に座り、腕組をしたまま静かに目を閉じていた。その圧倒的に威厳溢れる態度で、誰ともなく『佳勝先生』と呼ぶようになった。典孝は基本的に人付き合いをしなかつたが、唯一佳勝先生とは馬が合っていて良く喋った。一部からはでこぼこコンビと揶揄された。典孝は小柄で痩せているのに、対し、佳勝先生は大柄で恰幅が良かったし、典孝は常に学年一位であるのに対し、佳勝先生は学年で限りなく最下位に近かったから

だ。典孝の直ぐ後ろの席は、高橋清子という  
テニス部の女で、通称『キーコ』で通ってい  
た。背が百七十センチあり、典孝よりも五セ  
ンチ高かった。テニスの腕前は中々で、山形  
県の高校総体で入賞した事も有るらしかつ  
た。クラスにはキーコの他女性が四人居り、  
その内の一人が飯田綾子と言った。こちらは  
演劇部で、学芸会で催された劇の主演を演じ  
た事も有った。この二人は中学も一緒に仲が  
良く、いつも行動を共にした。家が近所だっ  
たので、登校も一緒だった。典孝が登校して  
いる途中、丁度この二人の後を歩いた事が有  
った。やたらキーコの背の高さが際立つと思  
ったら、よくよく見るとキーコはつま先立ち  
で歩いていらした。後で伝え聞いた所では、高校  
最後の総体に向け、登下校の間もトレイニン  
グを積んでいらしたらしい。キーコのつま先立ち  
歩きは結構有名で、『鉄のふくらはぎを持つ  
女』と異名を取っているという噂も聞いた。  
受験学年なので、程なく志望大学の調査が

行われた。

「今から配る用紙に、現時点の志望大学を書いてくれ。今後の学習指導の資料にするから」

担任がそう言って配布した調査用紙には第三希望まで記載する欄があった。典孝は第一希望に東大理Ⅰと記載し、後は空欄とした。東大しか眼中に無かったのだ。キークの隣りの男子が、キークの用紙をちらっと見て叫んだ。「高橋さんて慶應の医学部なの？すごいねー。慶應の應ってこんな字だっけ？」

「厳密にはね。あたしのお兄ちゃんも慶應の医学部だしね。」

そう受け答えるキークには、何やら余裕すら感じられた。席が前後している事といい、典孝は何やら宿命的なものを感じた。三年生で成績の席次を争うのは、この高橋なのではないかと。部活に懸命に取り組んだ人がいざ真剣に勉強し出すと、凄まじい力を発揮すると耳にした事が有ったのだ。しかし、それが

単なる杞憂に過ぎない事は、数日後行われた  
国語の実力テストで明らかになった。  
テストが終わり、後部座席から前の座席へ  
用紙を重ねて渡す方式で答案が集められた。  
キーコが用紙を裏返して一番上に重ねて前の  
席の典孝に渡そうとした際に、突然キーコは  
叫んだ。  
「えーッ！これって裏もあつたのーッ！」  
試験が終わって緊張が解かれ、安堵に包まれ  
た空気を切り裂くような金切り声だった。ど  
うやらキーコは通常通り問題は片面のみで、  
よもや裏面に隠し覆われているとは夢にも思  
わなかったらしい。勿論テストの最初に口頭  
で説明はあつたし、テスト時間もいつもより  
長めであつた。なにより、両面印刷である事  
は直感的に分かりそうなものだ。そのような  
幾多の障壁を乗り越えて、キーコは片面であ  
る事を信じ切つた。  
その一点だけ見ても、キーコの実力が透け  
て見えるような気がした。よくよく考えれ

ば、成績上位者は廊下に貼り出されるが、ついでに『高橋清子』という名前を見かけた事は無かった。キーコは高橋病院という地元では結構名の知れている病院の娘で、上に六歳上の兄が一人いた。兄は二浪して慶應の医学部に入学し、当時その四年生だった。それを凄く自慢して、何かにつけて吹聴した。志望大生について、『お兄ちゃんが慶應医学部ならあたしも』と単純に考えたのだろう。典孝は昼休みも勉強しているタイプだったので、近寄り難い印象を持たれ勝ちだった。が、キーコは席が前後している事もあり、気軽に話し掛けてきた。そして、宿題見せてだの、昼休みまで勉強するのだの、青白い顔してもっと体鍛えなさいだの、事あるごとにちよっかいを出してくるのだった。それでも本人は悪気を持っていないのは明らかだった。し、陰口を叩かれるよりは面と向かって言うてくれた方が余程良かったので、特にキーコに対して不快感は抱かなかった。

第二学期が始まるに当たり、初日に席変えが行われた。平等にくじ引きで決められ、典孝の隣は飯田綾子になった。席はそれが確定ではなく、当人同士の了解があれば交換可能となっていた。目の悪い人が前の座席の人と席を交換する、という事は良く有った。綾子は自分の視力が最近弱くなったから、前の席の人と交換して欲しいと言い出した。そして、キーコに向かって

「キーコ、お願い！席交換して！」

と両手を合わせて直談判した。

「えーッ！なんであたしが！」

キーコは顔を真っ赤にして抵抗した。

「だってキーコの席がすごく黒板が見え易いんだもん。それにキーコ、目がいいでしょ？」

「えー、でも・・・」

「お・ね・が・い！」

「でも・・・」

これではらちが明かないと思ったのか、佳勝先生が割って入った。

「キーコ、うだうだ言わねで替わってやれよ」

そうすると、

「はい」

と素直に従った。そして、なんであたしがノリ君なんかの隣に、とかブツブツ言いながらも典孝の隣に座ったのだった。

その翌日の昼休みの事だ。佳勝先生は、いつものように背筋をピンと伸ばして椅子に座り、腕組をしたまま静かに目を閉じていた。

何を瞑想しているかは定かではなかったが、圧倒的な存在感を醸し出していた。典孝が午後からの授業に備え、いつものように予習に励んでいると、珍しく飯田綾子が近寄って来た。キーコが席を外していたので、そこへ座った。

「あれ、飯田さん。何したの？何か用？」

典孝が聞くと、綾子はしばしためらっていた

が、意を決したようにこう切り出した。

「ねえ、ノリ君。キーコの気持ち、分かってあげて・・・」

「藪から棒に何の話や。そもそもキーコの気持ち、持って何だよ」

「昨日の席替えの時、あたしがキーコと席を替わってあげたでしょ？ そしたらキーコ、喜んで喜んでね」

「うそだずー。あんなに真っ赤になって嫌がってたべよ」

「そうじゃないのよ！」

両手で机を思い切り叩くと、綾子は典孝に詰め寄った。

「ノリ君は大秀才のくせに、何故女心にそんなに鈍感なの！」

「女心に鈍感？」

「そーよ。何故分かってあげられないの？ キーコの一途な気持ちを・・・」

綾子はまるでドラマの主人公のような口振りで言った。典孝は、綾子の言う意味を全く理

解できず、一瞬口をつぐんでしまった。

「一体何を言ったの？素直に話を聞くと、まるで高橋さんが俺さ気があるみたいだよ」

「気があるも何も、キーコの目には最初からノリ君の事しか映ってないわ」

「まさか。なにかにつけて俺さ文句並べ立てる高橋さんが、俺さ気がある訳ねえべよ」

「それがキーコの精一杯の愛情表現なのよ。キーコ、自分の気持ちをどう表現していいかわからなくているの。私にはキーコの気持ちがよく分かるわ」

「冗談も程々にしてけろず！幾ら女同士だからと言って、他人の気持ちにそんなに手を取るように分かるはずねえべ？」

「私には分かるの！だって、だって、だって、私もノリ君の事・・・」

そう言い掛けて綾子は思わず口を覆った。それはあたかも自分が言いかけた言葉に自らが一番驚いているかのようだった。綾子の顔が見る見る赤く染まっていった。

「佳勝先生の丸坊主！」

あまりその場にそぐわない捨て台詞を吐くと、綾子は両手で口を覆いながら廊下に飛び出して行ってしまった。瞑想していたはずの佳勝先生がおもむろに目を開けると、吐き捨てるように言った。

「畜生め。綾子まで泣かせやがって・・・」

綾子の只ならぬ様子に、昼休みのざわついた教室が一瞬凍りついた。余りに突然の出来事だ、何が起こったかを誰もが把握できなかったのだ。唯一の手掛かりが、綾子の残した捨て台詞だった。

「佳勝先生の丸坊主？何を今更・・・」

綾子の無意味に思えた捨て台詞が、この上ない融氷剤となつて凍りついた空気を融かし、教室の雰囲気は、瞬く間に平静に戻つたのであつた。

それ以降、綾子は典孝を変に意識するようになった。これまで普通に話し掛けに来たのが、出来なくなつた。典孝に話し掛けて

けようとすると、  
「ノリ君って、あれ？ノリ君って、あれ？」  
というように何度もとん挫して、自分で自分の頬を叩いた。隣に座っているキーコは、特に何も言わなかったが、ジーツと綾子を観察していた。  
ある昼休み、典孝が図書館で調べ物をして教室に戻ると、なにやら言い争う声が聞こえてきた。声の主がキーコと綾子である事は直ぐに分かった。教室の中でそこだけが浮いた存在になっていたのだ。綾子は典孝の席に座って、硬い表情でキーコを睨みつけていた。キーコは故意に笑顔を作っていたが、その目は涙で潤んでいた。  
「だからそれは私が最初から言ってる事ですよ！」  
綾子はまるで冷徹な女刑事のように厳しくキーコを問い詰めていた。傍目からでも、どちらに分があるかは明白だった。しかしキーコは負けん気が強かったから、容易に引き下され

ないようだった。手持ち無沙汰に突っ立って  
いる典孝を横目でちらつと見ると、意を決し  
たように言い放った。  
「なによ、ノリ君の前では何も言えないくせ  
に」  
優位に話を進めていた綾子も、これには虚を  
突かれたようだった。  
「な、なんで突然ノリ君の話が出てくる  
の？」  
「綾子ってば、むっかしからそう。好きな人  
の前では急にしおらしくなって、なあんにも  
言えなくて」  
「・・・」  
「好きなんでしょ、ノリ君が・・・」  
綾子はしばし呆然としていたが、急に両手で  
机を思い切り叩いて、教室中に響き渡る大声  
で叫んだ。  
「ノリ君が好きなのは、キーコ、あなたじゃ  
ないの！」  
教室にどよめきが起こった。ついに言っちま

ったか・・・。皆が知っていないながら知らぬふ  
りをしていた事。当事者のキーコだけが気付  
かずに過ごして来た事。キーコに愛の通告を  
行ったのは、一番の親友の綾子であった。キ  
ーコは椅子から弾かれたように立ち上がった  
た。  
「ノリ君が好きなのは、あ・た・し・・。」  
両目から大粒の涙がこぼれ落ちた。  
「や、や、やーねー！綾子ったら変な冗談言  
わないですよ！」  
「だってホントでしょ。皆知ってるよ」  
「あーッ、れーッ！今日は綾子姫に一本取ら  
れちゃったって感じーッ！」  
それからキーコはまた椅子に座ると一人ニヤ  
ニヤして、何やらブツブツつぶやいていた。  
「どうやら綾子が、『典孝の事が好きなのはキ  
ーコの方だ』という意味で言ったセリフを、  
『典孝が好きなのはキーコだ』と聞き違えた  
らしい。普通なら自分の置かれている状況、  
話の流れからいって、綾子の本意を汲んでも

良さはそうなものだ。そういう一般論はキーコ  
には全く通用しないようで、綾子のセリフを  
額面通りに受け取ってしまった。それだけキ  
ーコが純粋で、一本気だったということだろ  
う。

10・拡大コピー  
典孝はずっと一番だったから、学期末に渡  
される通知表の主要科目の成績は全て五だっ  
た。体育は大の苦手だったが、不思議な事に  
四であった。兄貴は運動神経が良かったが、  
高校時代の体育の成績は三か四だったように  
思う。学業成績が良いと、何か特典のような  
ものが付くのかどうか良く分からないが、と  
にかくそうだった。いつも意気揚々として親  
父に成績表を差し出すのだが、親父は  
「ふーん」  
みたいな感じで、特に反応しなかった。高校  
生の途中まで、親父は学業成績に余り拘らな  
い人だと思っていた。  
ある時、民子おばちゃんが家に遊びに来  
た。その頃になると、一人娘も既に嫁いで、  
結構気ままに暮らしているようだった。夕食  
が終わり、親父が酒を飲みながらおばちゃん  
と談笑していた。酒が入ると親父は人が違っ  
たかのように雄弁になった。兄貴は中華屋勤



て、直ぐに便所に駆け込んだ。親父はいつも素知らぬ顔をしていたが、その実自分の事を非常に誇りにしてくれていたのだった。典孝はそれがこの上無く嬉しかった。そして、自分を誇りにしてくれる親父を非常に誇りに思ったものだ。

典孝は当初の予定通り、東京大学理科一類のみを受験し、他は一切受けなかった。試験には十分手ごたえがあったし、自信があった。た。合格発表はわざわざ東京まで見に行く必要はなく、翌日の新聞を見れば十分と考えていた。しかし、やはり一抹の不安を拭う事は出来なかった。東京まで行かずとも、出来るだけ早く結果を知りたいとは思っていた。合格発表は三月十日の午後一時からだったが、インターネットでも合格発表を見る事が出来るという話だった。典孝の周囲はパソコンには縁の無い人ばかりだったが、唯一おばちゃんのご主人が会社でインターネットを出来る

事を知っていた。そこで、内密におばちゃんのご主人に連絡を取り、夕方でもいいから合格発表を見てくれないかと頼んでおいた。いよいよ三月十日になった。その日典孝は平静を装っていたが、何をやっても全く手に付かなかった。こんな事なら、やはり東京に行つて合格発表を見て来ようか、とすら考えた。しかし、結果は既に確定しており、それを知るのが数時間遅れた所で何が変わる訳ではなかつた。また、往復の交通費がもつたくないように思えた。親父はいつも午後二時半過ぎに夕刊配達に出掛けるのであるが、その日は一時に出掛けて行った。もしかすると、親父も落ち着かないのかな、と思つた。その三十分後だ。親父が新聞屋から電話を掛けて来た。「ノリ、受かつたぞ！」

「えっ？」

新聞屋にはインターネットが出来る環境が整つていた。親父は新聞屋の奥さんに依頼して

パソコンを借用し、合格発表を調べたらしい。全くパソコンをいじったことが無い人だから、奥さんの手も借りて悪戦苦闘したものの、いざ合格が分かると「俺も確信持ってたから、そだい気にしてなかったげんとな」と、しゃーしゃーと抜かしたという。内密におばちゃんのご主人に頼んだ事が、何故か親父の耳に入り、居ても立っても居られなくなつたようだ。親父は典孝以上に合格発表を気に掛けていたのだ。綾子は成績が中位で、山形大学へと進んだ。キーコは成績がそれ程良くなかったが、東京の短大へと進んだ。佳勝先生は成績が極めて悪かったが、なんとか卒業できた。大学へは行かず、寺で修行すると言っていた。

## 1 1 ・ 東大入学

典孝の東京での生活が始まった。典孝は駒場キャンパスへ自転車で二十分程度のマンションを借りた。1Kで月七万円だった。もつと安い所を探したかったが、電車通学になれば電車賃が上乘せされるし、余り通学に時間を掛けたくなかったので、結局そのマンションへと落ち着いた。親父からは月十二万円振り込むと言われていた。家賃を除けば月五万円残る。典孝は遊びは一切せず、勉強一筋を貫くつもりだったから、十分それで生活できると踏んでいた。

東京大学理科一類での修学は、前期課程（教養学部）二年間と、後期課程（専門学部）二年間に分かれる。前期課程は幅広い一般教養を学び、二年生の夏休みに学生の志望と成績を元に具体的な学部が振分けられる。典孝は当初、物理学科へ進んで相対性理論について研究したいと考えていた。しかし、相対性理論というのは数理物理学に属する分野

で、それを理解するには幅広い数学の知識が必要だった。アインシュタインと親交のあった矢野健太郎氏も物理学者ではなく、一般相対性理論の数学的基礎付けをなす微分幾何学の権威であった。それに加えて、典孝はチームを組んで行う実験というのが大の苦手であった。結局、典孝は数学科へと進む事にした。

## 1 2 ・ 数学演習

通常の学科の場合、前期課程は駒場キャンパス、後期課程は本郷キャンパスで修学するが、理学部数学科は駒場キャンパスに残る。数学科の三年の場合、曜日によって異なるものの、通常午前十時から十二時十五分まで講義を行い、午後一時から二時半まで演習を行う。それで授業は終わりだ。実験が無い分、自由に使える時間が非常に多い事が、数学科の最大の特徴だった。演習では、毎回担当教官が複数の問題を準備してプリントを渡す。それを黙々と解かせる教官も居たが、解けたと思った者が黒板に解答を書き、それを皆に説明する形式を採る教官が多かった。但し、その場で直ぐに即答できるような問題は少なく、大抵は一旦家に持ち帰って解答を準備し、翌週の昼休み時間に事前に黒板に解答を書いて置き、その説明から授業が始まる、という演習スタイルが通例だった。最初のうちは、様々な学生が入れ替わり立ち替わり解答

を行い、活況を呈していたが、回数を重なるにつれ、次第に解答者は固定化して行った。演習というのは規定回数以上解答すれば、後は何回解答しようと成績は変わらないだろうから、良く解答する学生というのはそれだけ学習意欲の高い学生だった。当然得意・不得意はあるから、代数系の演習は良く解答しても、解析系の演習は全く解答しない、或いはその逆、というケースは良く見られたが、どの演習でも良く解答を行うレギュラー解答者が三人居た。典孝は人一倍勉強熱心だったから、レギュラー解答者の一人だった。しかし、典孝は自分が他の二人のレギュラー解答者と全く異質である事に気付いていた。他者は大抵どの参考書にも載っていないようなオ리지ナルな解答をした。それは完全に独力で解答した事の表れだった。模範解答を凌駕するような見事な解答をして、担当教官から絶賛される事も有った。一人典孝だけは、常に教科書通りの模範解答を行った。というの

も、典孝は問題を独力で解いた事は一度も無かった。問題を出されても、大抵の場合どこをどう手を付けていいのか皆目検討がつかなくたって、同じ問題を探して解答を見るのが関の山だった。ただ、解答の内容を単純に丸移しするのでは無く、まずその内容を完全に理解し、自分なりに解答を工夫したり、簡略化したりした。また、複数の解答のいいところ取りして、新たな解答を創り上げる事も出来た。解答を完全に自分のものにしていったから、何を聞かれても的確に返答できたし、全く隙のない解答だったから、典孝は一流解答者として高く評価されていた。典孝はその事を非常に誇りに思う一方、非常に恥じてもない。というのも、研究者というのは、未だかつて誰も考えた事も無いようなオリジナルな結果を出し、それが評価されてなんぼ、という事を良く知っていたからだ。そういう意味では、何か問題が出された時に、真っ先に模

範解答を見てそれを母体に答えるのと、全く白紙の状態から自力で解答を練り上げるのとでは、雲泥の差があった。そして、研究者としての道が後者の延長線上にある事は明白だった。このままではいけない、自力で問題を解決する事を習慣付けなければ、自分の研究者としての明日は拓かない、そう考えて何度かトライしようとした。しかし、何の手掛かり無く問題を解こうとするのは、白い巨大な壁をひたすら凝視するに等しかった。問題を解き始めて三十分経過して何の進展も無ければ、それ以上時間を掛けても無駄と思われたので、諦めて解答を見るようにした。そんな事を何回か繰り返し返すうち、結局典孝は自分で考えるのを辞めてしまった。自分の研究者としての資質に不安を抱きながらも、今の自分に来る事をこなして行くしか術が無かつた。

第六学期（三年生の冬学期）が終わり、春休みに入った。特に何の課題も宿題も無く、

本来なら学生に取って一番気楽な時期なのだろうが、休む間もなく典孝は大学院の受験勉強を開始した。数学科の大学院のテストは毎年八月末から九月頭にかけて行われる。それは典孝にとって、大学生活における最大のイベントと言って良かった。大学に入った時から大学院に進む事を目標としていたし、就職の事も全く考えていなかった。まず手始めに過去三年間の入試問題を入手し、何度も何度も解答した。また、他の国公立の大学院の入試問題も入手し、これも何度も解答した。そして東大特有の出題傾向を徹底的に分析した。ここまでは、あらゆる試験をパスして来た典孝が常套的に行つて来た事だった。しかし、これまでの試験と決定的に異なっている点があった。それは問題は出題されて、解答の最初の糸口が見つからず、完全にお手上げ状態になる事が非常に多くなつたという点だ。それは数学演習の時と同様だった。但し、入試までにまだ多少猶予があるし、それ

ま  
で  
に  
出  
来  
る  
限  
り  
多  
く  
問  
題  
を  
こ  
な  
し  
て  
慣  
れ  
て  
行  
く  
し  
か  
な  
い  
、  
そ  
う  
考  
え  
た  
。

13・セミナー  
大学四年になると授業の他に、週に一回セミナーが開かれる。数学科では、このセミナーが卒業論文の代わりという位置づけとなる。各学生が、自分が興味を持っている分野を自由に選択できる。典孝は相対性理論について研究したかったから、それと最も関連する微分幾何に関するセミナーを選択した。担当教官の竹内教授はその道の第一人者だった。セミナーの内容は、竹内教授が指定した本を読み、その内容を順番に前に出て発表するというものだった。セミナーは典孝を含めて三人で、典孝を除く二人は定期的に自主勉強会を行っていたようだった。その内の一人は数学演習のレギュラー解答者の一人で、頭の切れが抜群だった。負けず嫌いの典孝も、こいつには全く歯が立たないと観念していた。もう一人は幾何学系の数学演習だけ良く解答するが、それ以外では殆ど解答しなかった。典孝の中では、自分より格下と見做して

いた。二人とも海外の雑誌や微分幾何における最新の論文に目を通しているらしく、それについてあれこれと活発に議論していた。典孝は脇でそれを聞いていて、何を喋っているのかまるで分からなかった。学者同志の会話であれば、分からなくて当然という言い訳が立つが、同級生の会話であれば、その理屈は通用しなかった。しかも、自分より格下と考えていた奴が相当研究を進めているではないか。自分は今まで何を勉強してきたのだろう？ 一点でもいい点数を取って一番になる。自分が心掛けて来たのはそれだけだった。しかし、研究者として要求されるのはそんな事では無かったのだ。自分で数学上の問題点を見つけ、何処までもそれに執着して研究する姿勢。有用で独創的な理論を創造する能力。研究者として必要不可欠となるのはそのような資質であり、それが自分には完全に欠落しているのかもしれない。前々から漠然と感じていた不安は強くなる一方だった。その不安

を、厳然たる現実として突き付けるような出  
 来事が起こってしまった。  
 セミナーで使用している本というのは、英  
 語で書かれた微分幾何学の入門書だった。各  
 章は複数のセクションに分かれており、その  
 セクション単位で発表が行われた。各セクシ  
 ョン末に数題演習問題があり、その解答も発  
 表に含まれるのだが、その本に解答は載って  
 いなかった。竹内教授は本の内容の説明以上  
 に、演習問題をどう解くかに目を光らせてい  
 た。教授自ら『演習の解答を見れば、その学  
 生の習熟度が手に取るように分かる』と断  
 言していた。典孝がセミナーの最初の発表で  
 割り振られたセクションは、演習問題が一題  
 だけだったが、典孝にはどのよう解けばい  
 いか皆目検討が付かなかった。三十分の格闘  
 の後、自力での解答を完全に諦めた。三年の  
 数学演習の際は、演習問題集を三、四冊探せ  
 ば、大抵は同じ、または類似した問題が見つ  
 かったのだが、今回は英語の本の中の演習問

題という事も有り、中々見付けることが出来なかつた。典孝を除く二人はお互いに質問したり、相談したりして対応しているようだった。しかし、全く人付き合いをせず、全てを独力で対応して来た典孝は、その二人の輪に加わる事がどうしても出来なかつた。散々探しまくった揚げ句、ある古い参考書の中に類題を見付けたが、その本には解答の概略しか記載が無かつた。余りに論理が飛躍しているため、何回読んでも良く理解できなかった。しかし、典孝にはもうその本しかすがるものが無かつた。良く理解出来ないまま、なんとか体裁だけ整えて発表を行った。これがまずかつた。竹内教授は普段は温厚でも、こと学問に関しては一切妥協を許さない人だつた。典孝の解答について、矢継ぎ早に鋭い質問を浴びせ掛けた。ただでさえ教壇に立って緊張しているのに、この所を聞かれると困るな、と不安に感じていた箇所をズバズバと質問されるので、すっかりしどろもど

ろになつてしまつた。次第に思考力が落ち、  
冷静になつて考えれば直ぐ分かるような初歩  
的な質問すら答えられなくなつた。途中か  
ら、『もう何もかも投げ出して、何処かへ逃  
げ出してしまいたい』、その一心だつた。傍  
聴していたセミナーの二人のメンバーは、名  
解答者として名を馳せていた典孝が、サンド  
バックが如く打ちのめされるのを好奇の眼差  
しで見つめていた。少なくとも典孝にはそう  
感じられた。何を聞いても上手く答えられ  
ず、木偶の坊のように突っ立っているだけの  
典孝に業を煮やしたのか、とうとう竹内教授  
は激昂した。「君は大学数学の基本を分かっ  
ていない、数学演習の時の典孝の活躍ぶりを知  
ていればまた違った対応をしたかもしれない！  
」  
い。最初の発表という事もあり、少し発破を  
かけておこうという気持ちもあつたのだろ  
う。とにかく、それは常にトップを走り続け  
て来た典孝に取つて、過去最大の侮辱だつ

た。君には研究者としての資質は無い。諦めなさい。そう引導を渡されたような気がした。」「んー。ー」典孝は思わず宙を仰いだ。この俺に大学数学の基本が分かっていないというのか！大学三年の時の成績は、かなり上位の方だったはずだ。この俺を誰だと思ってるんだ！竹内教授に怒鳴り返してやろうかと思っただけ。しかし、それは意味の無い、虚しい事だと分かっていた。今ここでどれだけ答えられるか、それが全てなのだ。典孝は一つ大きな深呼吸をした。そして、すっかり舞い上がっていた自分を反省し、教授の質問一つ一つに集中して逐一回答して行こうと考えた。あ、それなら分かると思いついたら、上手く答えられなかった質問が幾つかあったのだ。元々典孝は基本を良く理解していたし、的確にナビゲートしてくれる相手がいれば、その通り行く事が出来た。しばしの格闘の後、ついに教授が言った。

た。  
「よし、それでいいだろう。佐藤君は座って  
いい」  
そして、教授自らが立ち上がって、問題の解  
説を始めた。どうやら解答に到ったらしかっ  
た。しかし、典孝は教授の質問一つ一つに忠  
実に回答していっただけで、それらを繋ぎ合  
わせると何故解答になるかまでは理解してい  
なかつた。典孝は席について、張り詰めてい  
た糸が切れるのを感じた。教授の解説も全く  
頭に入らなかつた。

## 14・大学院入試

八月中旬となり、いよいよ大学院入試が後二週間と迫った。典孝には入試の前に絶対準備して置かなければならない事が一つ残っていた。それは口述試験の準備だ。大学院入試は筆記試験の他に口述試験というものがあがり、教授達の直接の質問に口頭で答える必要があった。そんなのは後回しでいい、最後の最後にやればいいと考えていたが、万全を期すためには最低限の準備は必要だった。口述試験で必ず聞かれるのは、筆記試験はどうだったか、大学で何を勉強して来たか、大学院で何を研究したのか、という事だった。筆記試験については、実際にそれが終わらない事には答えようが無かった。また、大学で勉強して来た事は何を聞かれてもきちんと答える自信があった。典孝が準備しなければならぬのは、大学院で何を研究したのか、という問いに対する回答だった。考えてみれば、大学院の口述試験対策に大学院で何を研究した

いかを考える、というのは極めておかしな話だった。が、正直な話典孝は、一番著名な物理学者であるアインシュタインの、一番著名な理論である相対性理論を研究したい、漠然とそう考えて来ただけであつた。相対性理論がリーマン幾何学をベースにしていることなど全く知らなかつたし、そもそも自分が数学科に進むこと自体想定していなかつた。ここに到つて、典孝は最新の数学の結果に目を通して、おこうと初めて思い付いた。例え付け焼き刃であつても、研究意欲満々に見られたかつたのだ。尤も、そんなにわか仕立ての対応はたちまち見破られてしまう事は分かつていた。なにせ向こうはその道の第一級の研究者揃いなだから。しかし、そんな事をしても無駄だ、無駄だと言う自体が無駄な事だつた。とにかく、口述試験用に模範解答を準備しよう。今の自分に出来るベストを尽くそう。典孝はそう考えた。

少し勉強して分かつたのは、セミナーのメ

ンバー二人の間で度々取り沙汰されていたポ  
アンカレ予想の解決というのが、微分幾何の  
分野で今一番旬の話題らしい、という事だっ  
た。セミナーの二人のメンバーは、それにつ  
いて非常に興味を持っていたのだ。よくよく  
考えれば、それは極当たり前の話と言えた。  
典孝は、自分はかなり遅れを取ってしまった  
いる事を痛感した。しかも研究者としての資  
質は未知数だ。そもそも自分は本当に研究者  
に成りたいのか？学問の内容に興味があった  
のではなく、名誉欲、自己顕示欲を満足させ  
るための手段としての学問に興味があっただ  
けではないか？それは典孝が無意識のうち  
避けて来た疑問だった。が、例えそうであっ  
たとしても、今は過去を振り返って自問自答  
している猶予は無かった。

八月末になり、いよいよ大学院入試本番を  
向かえた。まず、筆記試験が二日間に分けて  
行われる。口述試験は、筆記試験の合格者の

みを対象に行われるという事だった。一日目の午前中は英語の試験で、和訳と英訳の問題が各一題ずつ出題された。これはまずまず解答出来た。午後は、大学数学基礎に関する試験で、最初の二問は必答、残りの五問から二問選択する形式だった。試験時間は三時間だった。四問解答する上では決して長いとは言えなかった。例年第一問は線形代数、第二問は微分積分の問題であった。第一問だけのは、恐らくこのように解くのだろうと予測できたが、残る問題はどうか皆目検討がつかなかった。ここで典孝は決断を迫られる事になった。予測が付く第一問を確実に取りに行くか、それとも下手な鉄砲も数打ちや当たる戦略で行くか？典孝の経験から言うと、後者の方がより高い点数に繋がる確率が高かった。無解答なら全く点数にならないが、解答の最初の取っ掛かりであつても、何か記載しておけば情状酌量の点数が貰える可能性があるので。取り急ぎ予測がつく第一

間を手早く片付けてしまおうと思った。夢中で計算して、なんとか答えらしきものが得られたが、全く自信は無かった。最後にもう一度見直す事にして、どの問題を選択するかを素早く決め、全四問全てに手を付けておこうと考えた。分からないなりに、少しでも高得点に結びつくように悪戦苦闘しているうちに、ふと気付くともう残り十五分程度になっていた。大慌てで、最初に解いた問題を見直して見た。解答の三分の一まで来た時、典孝は危うく大声を出しそうになった。極めて単純な計算ミスを犯していたのだ。道理で、解答しながら余分な尾鰭が付くような違和感があつた。ここで典孝は再度選択を迫られる事になった。この問題を見捨てて、他の問題を見直すか、それともこの問題をやり直すか。素早く考えた結果、最も取り組み易いこの問題をやり直すのが得策と考えた。ミスを犯した箇所以降を消しゴムで急いで消そうとした瞬間、

「ビリッ」

大きな音をたてて答案用紙が三センチ程度破けてしまった。残りには十分。正直もう駄目だと思った。しかし、どんな状況下であろうと冷静に対処し、自分のベストを尽くすべきと思っ直して、破けた周辺を四角で囲み、濃い目に×を書いた。そして四角の下を丁寧に消し、そこに解答の続きを書こうとした。果たしてこんな書き方が許されるのか、という気もしたが、背に腹は替えられなかった。計算ミスをした箇所を訂正し、少し計算を進めて行った時、この問題はこう解くんだ、と閃いた。先程は随分遠回りしたが、この問題はもつとスマートに解ける問題だったのだ。あと十五分あれば完全に解ける、と思った瞬間に時間切れになった。なんとも後味の悪い顛末を迎えてしまったが、反省点を挙げれば切りが無かった。漏れ聞こえて来る他の受験生の声は、例年より難易度が上がった、全然分からなかったという意見が主流だった。それを

聞いて状況は皆一緒である、と少し安心した。その日、自宅に帰ってからもう一度数学の問題を見直して見たが、完答出来たの是一問も無かった。後は情状酌量の点数に期待するだけだ。しかし、第一問の単純な計算ミスだけはどうしても悔やまれた。平常の自分なら考えられないミスなのだ。冷静に冷静にと自分には言い聞かせたつもりだったが、やはり冷静さを欠いていたのだろう。今は気持ちを切り替えて、明日の試験に全力を尽くすしかない。そう考えた。

二日目の試験は、数学の専門的問題で、十八題から三題を選択して解答する形式だった。試験時間は十一時から十五時までの四時間で、これが最も重要度の高い試験となる。十八題中一題、数学クイズのような問題があった。これなら何の予備知識も無く解けるように見えた。昨日の反省を活かし、解けそうな問題を確実に取りにこうと考え、まずそ

の問題から着手した。後から考えれば、それは失敗だった。実は、それはかなり難易度の高い問題だったのだ。一見解けそうに見えるものだから、なかなか踏ん切りがつかず、一時間半程悪戦苦闘したが結局解けず、時間を置いて再度挑戦する事にした。他に解けそうな二問を選択し、とにかく分かる所まで書いた。後は解きかけの三題を順番に見て行つて、少しでも分かった点、思い付いた点があれば解答を継ぎ足して行くという変わった点がある。き方をした。結局、二日間の試験でまともに解けたのは英語だけ、という状態で試験は終了した。今回の大学院入試が、おそらく人生で最後の、最も重要な入学試験のはずなのだ。が、まさかここまで惨敗を喫するとは予想だにしていなかった。筆記試験の合格者の発表は翌日の午後五時、数理学研究科棟一階に掲示されるという事だったので、その日は直ぐに自宅へ戻った。

発表まで丸一日あったが、やっと終わっ

た、という達成感と、もう駄目だ、という絶望感と、それでも内申点はかなり良いはずだ、という期待感が入り混じった複雑な心境だった。何をやっても手に付かず、ただひたすら無為に過ごした。翌日の午後五時近くになっても、典孝は未だ自宅に居た。本当は気になって気になって仕方なかったが、午後五時丁度に行けば、揭示版の周りに人が屯していると思われた。余り皆と顔を合わせなくなかったから、少し時間ですらそうと考えたのだ。しかし、五時を少し過ぎると、もう我慢の限界だった。いつもなら自転車で二十分掛かるのだが、十五分程度で到着した。揭示版へ一目散に駆け寄りたい、という欲望を抑え、落ち着き払ってゆつくりと歩いて行った。道すがら、何処からか「まさかあの佐藤君が・・・」という会話が聞こえたような気がした。否、気のせいかもしれない。数理科学研究科棟の

傍に行つて見ると、合格者一覧が貼り出されて  
ているのが見えた。もう多少時間が経過して  
いるためか、それに見入っている人は殆ど居  
なかつた。小走りに合格者一覧に近寄つて、  
貪るように自分の番号を探そうとした。しか  
し、その必要は無かつた。大学院の受験番号  
は受け付け順に採番されるようだ。典孝は募  
集が始まると同時に願書を出したので、受験  
番号も受験の席次も先頭だつた。合格者の最  
初の番号が自分の次の番号から始まっていた  
のだ。第一印象でやはり、と感じたのは心の  
何処かで覚悟していたのだろう。末尾の方に  
口頭試験に関する注意事項が記載されてあつ  
たが、もうこれは無縁の情報だつた。口頭試  
験用にあれこれ対策を練っていたが、全て水  
泡に帰してしまつた。あなたは口頭試験を受  
ける資格が無い、と門前払いを食らつた格好  
だ。先程

「まさかあの佐藤君が・・・」

と聞こえたのはそら耳では無かつたのかもし

れない。今となつては、そんな事はもうどうでも良かった。典孝は俯いて、誰にも顔を合わせないように急いで自宅に戻った。そして布団を頭から被つて貝のように閉じこもつてしまった。眠つても、起きても、ずっとそうしていた。このまま消えてしまいたい、そう思った。これまで勉強一筋に打ち込んで来た人生を完全否定されたような気がして、もう何をやる気になれなかった。しかし、典孝にはどうしてもやらねばならない事が一つ残つていた。約一ヶ月前の夏休みが始まった時、九月頭になれば大学院入試も終わるし、一段落着くから九月下旬まで帰省すると親父に連絡してあつたのだ。大学院の最終的な合格発表は九月中旬だが、一人一人に合格結果を通知するという事だったのだから、帰省中でも結果を知ることが出来た。また通常の場合、九月の中旬は試験・補講が行われる期間であるが、典孝が受講した講義は全て試験が無く、レポートを提出すれば済ん

だ。よって、冬学期の始まる十月まで特にやる事は無く、帰省するにはうってつけだった。いずれにせよ、今回の件を親父と兄貴に報告し、かつ今後の事を相談しておく必要があった。携帯で時刻を確認すると、もう午後二時過ぎだった。約二十時間ぶりに布団から出て、電話でこれから帰省する事を伝えておこうと考えた。しかし、大学院入試の事に話及んで根掘り葉掘り聞かれるのは嫌だった。ので、携帯でメールだけ送って置く事にした。親父は携帯を持っていなかった。兄貴の携帯に今日の夕方帰省するとメールした。その後携帯の電源を切り、携帯と財布のみ持って山形駅へ向かった。

15・親父立つ  
夕方六時頃山形に着いた。昨年末に帰省し  
たばかりだった。が、全く来た事が無い異郷に  
降り立ったような心境だった。普段は、兄貴  
の都合のいい時間に合わせて帰って、車で送  
り迎えして貰うのだが、今回はそれが嫌だっ  
たので、バスで帰った。今回ほど気の重い帰  
省はこれまで無かった。親父と兄貴に何と報  
告すればいいのか？何とか二人ともすんなり  
納得してくれるような言い訳が成り立たない  
ものか？いっそのこと、大学院には受かった  
事にして、これ以上経済的負担を掛けたくな  
いから、大学院進学を断念した事にしよう  
か、とも思った。しかし、そんな嘘をついた  
所で直ぐにばれるだろうし、肉親相手に偽装  
工作をしてもしょうがなかった。有りのまま  
話すしかないのだ。家に帰る途中、駐車場に  
兄貴の車が止まっているのを見て、おやっ、  
と思った。兄貴の奴、家さ居るみたいだな。  
普段はこの時間は居ないはずなんだげんと

な。なんかあったんだべが？電話で確認して見つか、とも思ったが、ここまで来ると直接帰った方が早かった。日も暮れ始め、カーテンを閉めて明かりを点ける家がぼつぼつ出始めた。自分で言うのも僭越だが、ここ界限では大秀才のお兄ちゃんを通っており、ちよつとした顔だった。いつもなら東大生様のお通りである、と言わんばかりに威風堂々と胸を張って歩くのであるが、今回は出来る限り人と会いたくなかった。その意味では、暗くなつて来た事は典孝には望ましかった。家が近くなつた時、約五十メートル先から数人の若者達が連れだつて歩いて来るのが見えた。もしかすると知っている人かもしれない、と典孝は考え、大急ぎで家と家の狭間の暗闇に身を隠し、息を潜めた。そして、若者達が通り過ぎた後、良く周りを確認して再度歩き出した。

典孝はしみじみ思った。学業成績こそが自分に取って最高の鎧であった。それを身に付

けていたからこそ自分は堂々と外を闊歩出来  
ていたのだ。その鎧を失った今、なんと自分  
は惨めで無力なことか。俺はこんなに弱い男  
だったのか。ろくに外も歩けないではない  
か。すっかり日が暮れるまで身を隠して置こ  
うかとも思ったが、家は直ぐそこだし、余り  
帰るのが遅くなれば心配を掛けると思ったの  
で、下を向いたまま小走りに家へ向かった。  
家に帰って親父と兄貴に報告するのは気が進  
まない事ではあったが、大学院入試に失敗し  
た男として世間の好奇の目にさらされるの  
は、より耐え難かった。  
玄関の戸を開けると、いきなり兄貴に出く  
わした。典孝の顔を見るや否や、兄貴は不平  
を並べ立てた。  
「お前なして携帯の電源切ってたんだぞ！ いつ  
もなら、何時に着くから迎えに来てけるって  
言うべ？ それが今回はメールで『今日の夕方  
帰る』だけなんだもの。しかもなんぼ電話し  
ても通じねえし。何かあったのかと心配にな

「って、今日は早退して来たんだぞ」  
兄貴の言葉に反論の余地が無かったので、ただ黙って俯いていると、親父がひよいと現れた。  
「コウ、そだいごしやぐなずー。大学院の試験が終わって気が抜けたんだべよ。どうせ合格発表は少し先なんだべ？暫くゆっくりして行けや。さあ、入れ入れ」  
親父は筆記試験の合格発表が既に済んでいる事を知らなかった。典孝も別に隠そうとした訳では無かったが、筆記試験とか口述試験とか詳しく説明した所で返って混乱するだろうと考え、敢えて説明していなかったのだ。少し腰を落ち着かせてから話を切り出そうと思ったので、促されるまま家の中に入った。  
「今日は合格の前祝いに豪勢に行こうかと思つて色々食材買って来たんだぞ。ただ、何時に帰ってくっか分がんながったから、これから作んだ。ちよつと待っててける」  
そう言うのと、親父は料理を始めた。兄貴は、

ムスツとした顔でテレビを見ていた。どうも今回の帰省の典孝の態度が気に入らないようだ。典孝はそれが良く分かったが、不合格の件をどう切り出すかに気が行っていたので、何のフオロ―も出来なかった。それを知ってか知らずか、親父が一升瓶を携えて来て、兄貴の前にドンと置いた。

「コウ、へぶぐってねでこれでも飲んでろ。夕飯出来るまで、少し掛かつからな」

「お、親父、越乃寒梅でねかつ！いいのかわ、こだな高級酒！」

「今日は特別だぜ。ただ、未だめし前だからな。食前酒だ。あんまり飲むなよ」

「キヤツホー！」

兄貴はいきなり機嫌が良くなると、マイグラスを持ち出して来て、グラスに半分酒を注ぐと一気にそれを飲み干した。

「くはあーッ！高い酒は全然違うね。普段飲んでる安酒とは雲泥の差だ。ノリ、お前酒飲めるようになったんか？」

「いや、まだ飲まんねんだ」  
「酒ぐらい飲めねど駄目だぞ。ほれ、コップ  
さ半分だけ注いでやる。飲んでみろ」  
そう言っつて、兄貴は日本酒を半分だけ入れた  
コップを典孝の前に置いたが、典孝は飲む気  
になれなかった。それから兄貴はちびちび酒  
を舐めながら最近取り掛かっている創作料理  
について話した。限られた予算内で、いかに  
工夫を懲らして美味しい料理を作るかについ  
てあれこれと苦労話を並べ立てた。  
「この越乃寒梅みてな高級なものが旨いの  
は、ある意味当たり前さ。んだども俺ら貧乏  
人は中々手が届かねべ？誰にも安く手軽に出  
来て、しかも美味しい料理を作ってみたいん  
だ。これまで誰も作った事が無いような料理  
をな。明日今度の新作ばお前さ作ってやっか  
ら、食べてみてけろ」  
「分がった、分がった」  
いつもの事だったので、いつもの如く受け流  
した。考えてみれば、兄貴の『これまで誰も

作った事が無いような』という台詞はこれまで何回も聞いて来たが、今日ほど典孝に重く響いた事は無かった。創作料理について語る時の兄貴の目はいつも生き生きしていた。その目は最新の数学の結果について語る同級生達の目と相通ずるものがあつた。誰も作つた事が無いような物を作るのは非常に難しい事だ。難しいからこそ面白いのだ。面白いからこそ夢中になるのだ。これは数学や料理に限らず、万事において言える事だろう。俺は大学院の入試に失敗したが、仮に受かつたとしても、直ぐに壁にぶち当たっていたに違いない。

「今日はステーキだぞ。前祝いだ、前祝い」  
「ジュージュー音を發てた肉を皿に載せて親父がやって来た。」  
「キャットホー！嬉しいね、嬉しいね。さあ、ノリ、食うべ、食うべ」

先程までの不機嫌さはどこへやら、兄貴はすっかり上機嫌だつた。

「しっかしノリ、なして今日そだい元気ないんだぞ。なんかあったんか？」

親父が典孝の傍にあぐらをかいて座ると、こう言った。

「いつも元気である必要なくてねーべ。さあ、ノリ、冷めねうち食べろ。食べながら幾つか教えてける」

そして、大学院というのは一体何処にあるのかとか、マスターとかドクターというのは何かとか、幾つか大学院に関する初步的な質問をした。今後の生活の事を考えて、最低限の知識は必要と考えたのだろう。典孝が一番困ったのは、親父も兄貴も既に大学院に受かったかのような口振りをする事だった。これには理由があった。

遡ること約五ヶ月前、典孝は大学三年次の成績証明書を取得した。

結果は典孝の予想以上に良かった。典孝は、成績証明書というのは親父と兄貴が汗水垂らして働いたお金を有り難く頂戴して、自

分がどれだけ勉強したかを示す証書と考えていたから、早速実家に郵送してやった。すると、その翌日に兄貴から電話が掛かって来た。「いやー、ノリの成績表はいつ見ても見事だぞねえ。お前、中学、高校とずっと一番で来たべ？ なんだも東大に入ってまでこれ程の成績を挙げるとは、正直思わなかったよ。佐藤家の誇りだな。東大の中でもこれ程の成績を挙げる奴は中々居ねのんねが？」

兄貴がしきりに誉めそやすものだから、典孝もつい図に乗って

「んだべな。うちの数学科の中でも、かなり上の方だと思うよ」

と答えてしまったのだ。尤も、それは決して誇張では無かった。典孝は常に一番前の席で講義を受けた。熱心にノートを取っていたから、試験前になると全く口を利いた事が無いような人からノートの貸し出しを依頼される事が良く有った。出された課題は確実にこな

したし、基本的に良く勉強していたから、一度演習で出された問題がそのままテストに出されたような場合は、まず外さなかつた。一言で言うところ、典孝は模範的な優等生だったのだ。典孝が兄貴にした話が親父や周囲の人にどう伝わったかは知らないが、ある時民子おばちゃんから電話が掛かって来て、いきなり「ノリ君で東大でも成績トップなんだって？」

と言われた時はビツクリした。人づてに伝える内に話が誇張されていったのだろう。いつの間にか、大学院は受かったも同然という雰囲気になってしまっていた。典孝は再度考えた。なんとか大学院に合格した事にする方法はないか？

そんな事を考える内につくづく自分が嫌になつた。俺は一番身近な身内にすら、自らを偽る事しか考えられないのか？典孝は眼前にあった水を飲み干そうとした。その瞬間、あつ

と思つた。水では無く、兄貴が注いだ日本酒

だったのだ。半分やけになつて、一気に飲み干した。

「お、ノリ。見事な飲みっぷりでねか！」

兄貴がすかさず声を掛けた。典孝は、胸がカアーツと熱くなつて、自分の顔がみるみる紅潮して行くのが分かつた。瞬間、頭が真っ白になつて、思考が停止した。暫くすると、ロボロボ涙がこぼれて来た。横にいた親父が驚いて声を掛けた。

「ノリ、何した？ なして泣いてんだ？」

「ワア——ッ！」

突然典孝は号泣した。

「親父、お、お、俺大学院落つたんだ」

「落つた！？」

親父と兄貴が同時に言った。

「もう昨日筆記試験の合格発表があつたんだ。ホントは次に口頭試験があんだげんと、その前に落とさつたんだ。親父、俺もう駄目だ。何もかもおしまいだ。もうどうしていいか分がらね。ワア——ッ！」

典孝は大泣きに泣いた。生まれて初めて理性のタガがはずれた瞬間だった。『日本のアイデンティティ』と呼ばれるような学者になりたい。それが典孝の夢だった。尤も、そんな大それた事は誰にも話した事は無かったが。俺は中学、高校とずっと一番で来た。東大でも一番になるつもりだった。一番である事が、自分に課せられた使命のように感じていたのだ。大学に入ってからは、そういう使命の他に責任感が加わった。俺が大学に行くのに、親父にどれだけの経済的な負担を強いっているか、身に染みて分かっていたのだ。親父は毎月十二万仕送ってくれた。東大には比較的裕福な家庭が多かった。俺の家庭はかなり低所得層に属する部類だろう。それでも送り額は決してひげをとらなかつた。何しろ、俺はアルバイトなどしたことも無かつた。それでもひもじい思いをしたことは無い。欲しい本は自由に買う事が出来た。そういう生活をしてお釣りが来たのだ。兄貴も結構援助

してくれたりらしい。親父と兄貴が汗水垂らし  
て働いたお金を仕送って貰って、それでふら  
ふら遊びほうけていたら、この腹を搔き切っ  
てお詫びしなければならぬ。俺は本気でそ  
う考えてたんだ。飲み会なんか出たことな  
った。女と話したことも無かった。俺にはそ  
んな暇は一秒足りとも無いと考えていた。真  
面目過ぎると言われればそうなのかもしれな  
い。しかし、これが俺の生き様だ。俺にはこ  
の生き方しか出来なかつたんだ。  
常に一番だったから先生達も別格扱いだっ  
た。同級生から羨望の眼差しで見られる事も  
多かつたが、あからさまな中傷を受けた事も  
有った。『ガリ勉』、『もやし』、『青瓢  
箆』、『ド近眼』。しかし、俺にとってそれ  
は負け犬の遠吠えにしか聞こえなかつた。東  
大入学後も、『大学生はもっと遊ばなきゃ』  
と面と向かって言ってくる同級生が居た。し  
かし、俺は全く取り合わなかつた。人にちよ  
っかい出したがるのは、自分の生き方に自信

を  
持  
て  
な  
い  
証  
拠  
だ  
ら  
う  
と  
思  
っ  
た  
。  
事  
実  
、  
そ  
う  
い  
う  
奴  
ら  
に  
限  
っ  
て  
試  
験  
の  
前  
に  
な  
る  
と  
、  
手  
の  
平  
を  
反  
し  
た  
か  
の  
よ  
う  
に  
ノ  
ー  
ト  
を  
貸  
し  
て  
だ  
の  
、  
課  
題  
の  
レ  
ポ  
ー  
ト  
を  
見  
さ  
し  
て  
だ  
の  
と  
擦  
り  
寄  
っ  
て  
来  
た  
も  
の  
だ  
。  
俺  
は  
そ  
う  
い  
う  
奴  
ら  
を  
心  
底  
軽  
蔑  
し  
て  
い  
た  
か  
ら  
、  
極  
力  
関  
わ  
ら  
な  
い  
よ  
う  
に  
し  
た  
。  
俺  
に  
は  
俺  
の  
生  
き  
方  
が  
あ  
る  
。  
自  
分  
を  
信  
じ  
て  
努  
力  
す  
れ  
ば  
、  
必  
ず  
道  
は  
拓  
け  
る  
。  
そ  
う  
考  
え  
て  
、  
寸  
分  
惜  
し  
ん  
で  
勉  
強  
し  
て  
来  
た  
。  
し  
か  
し  
勉  
強  
が  
進  
む  
に  
つ  
れ  
、  
大  
き  
な  
壁  
に  
ぶ  
ち  
あ  
た  
る  
の  
を  
感  
じ  
る  
よ  
う  
に  
な  
っ  
た  
。  
勉  
強  
す  
れ  
ば  
す  
る  
程  
そ  
の  
壁  
は  
益  
々  
高  
く  
強  
靱  
に  
な  
り  
、  
俺  
の  
行  
く  
手  
を  
頑  
と  
し  
て  
阻  
む  
よ  
う  
に  
に  
感  
じ  
ら  
れ  
た  
。  
こ  
ん  
な  
事  
で  
諦  
め  
て  
た  
ま  
る  
か  
！  
そ  
う  
思  
っ  
て  
何  
度  
も  
体  
当  
た  
り  
し  
た  
が  
、  
壁  
は  
び  
く  
と  
も  
し  
な  
か  
っ  
た  
。  
他  
方  
、  
同  
級  
生  
の  
中  
に  
は  
、  
そ  
の  
壁  
を  
や  
す  
や  
す  
と  
乗  
り  
越  
え  
て  
行  
く  
奴  
ら  
が  
い  
た  
。  
壁  
の  
向  
こ  
う  
で  
面  
白  
そ  
う  
に  
議  
論  
す  
る  
同  
級  
生  
達  
を  
ど  
れ  
程  
羨  
ま  
し  
く  
思  
っ  
た  
ら  
う  
。  
あ  
い  
つ  
ら  
に  
出  
来  
て  
俺  
に  
出  
来  
な  
い  
事  
は  
無  
い  
。  
俺  
は  
諦  
め  
な  
い  
。  
絶  
対  
に  
諦  
め  
な  
い  
。  
そ  
の  
覚  
悟  
で  
い  
た  
。  
し  
か

し、大学院入試では、口頭試験すら受けさせ  
てもらえなかった。事実上、門前払いを食ら  
ったようなものだ。勉強一筋に生き抜いて来  
た結果がこれだ。そして俺は、それを親にす  
ら偽わろうとする情けない男なのだ。  
親父と兄貴が見守る中、典孝はひたすら泣  
き続けた。勿論大学院に落ちたのが悔しいと  
いう気持ちが大きかったが、それだけではな  
かった。自分の卑屈さに泣いた。弱さに泣い  
た。  
暫くして、親父がすつと立ち上がった。反  
射的に親父を見上げて、ハツとした。親父は  
これまで見た事が無いような厳かな顔をして  
いたのだ。親父は典孝の泣き声に負けない位  
大声で言った。  
「ノリ！泣きたかったら泣け！すがりたかつ  
たらすがれ！誰だつてそだい強くないべ？俺  
が命懸けでお前ば支えてやる。その代わりお  
前さ言って置きたい事が有んだ。もし、お前  
の友達や知り合いが、どうしても、どうして

も困ってお前にすがって来たら、出来る範囲で構わね。支えてやれ！人間ってのは、支えられなくて生きてんだ。一人ぼっちじゃ絶対生きてがんね。人が二人と書いて『仁』と読む。もしお前の友達がうずくまって泣いてんだったら、せめて『何したの？』って声掛けてやれ。そして話ば聞いてやれ。それだけで、友達はかなり救われるはずだぞ」

「んでも親父、その友達が悪意を持って俺ば騙そうとしてたら、どうなるんだ？」

「騙されてやれ！何処の世界に好きこのんで人を騙そうとする人間が居るんだ！余程の事情が有ったの事だべ？人の言葉と書いて『信』と読む。信じて、信じ切って騙されるんだったら本望だべよ。お前がその心掛けで生きてんだったら、今後お前が困り果てるよ。うな事が有った場合、きっと誰かがお前を支えてくれる。人生ってのは、そういうもんだと俺は考えてんだ。それから、お前さっきどうしてもいいか分がらね、とか言ってたけ

ど、自分の事は自分で決める！そして、自分が決めた事には自分で責任を取れ！人に支えなくてもらう事が有ったとしても、自分の人生は、結局自分が切り拓いて行くしかねえんだ。コウにも同じ事ば言った事あんだ。ノリ、お前も立派な大人なんだから、分かってる？

「

典孝は涙を拭いながら、何度も頷いた。

## 16・大学卒業

一年自主留年して来年再受験するという選択肢が無くは無かったが、結局典孝は大学院進学をきっぱりと諦め、就職する事にした。二十二年間の人生において、初めての挫折だった。人一倍負けん気の強い典孝は、『諦め』という事が大嫌いだった。常に『成せば成る』の精神を掲げて生きて来た。しかし、今回の大学院入試ではつきりしたのは、成しても成らない事が幾らでも有る、という事だった。例えば、小学生に将来の夢を聞けば、サッカー選手とか野球選手という答えが良く返って来るが、その夢を実現できるのは、ごくごく一部に過ぎない。これはプロ選手として登録できる数に限りがある以上、確率的に自明の理だ。確率論な制限を外し、更に時間的、コスト的な制限を外してみたらどうか？見近な例で言うと、俺の兄貴は昔から足が速く、小学六年生の頃には百メートルを十三秒台で走ったと語っていた。ろくにトレー

ニングもせず、だ。俺はスポーツ全般が苦手だし、全く体を鍛えていないから、仮に今百メートル走った場合は二十秒近くになるかもしれない。一流のトレーナーと契約して、日々短距離走のトレーニングをひたすら積んだとしよう。最初のうちはぐんぐんタイムが伸びるだろうが、限界はあるだろう。特に短距離走は天賦の才能がものをいう競技だ。一年間きっちり練習しても、十三秒台で走れる保証はどこにもない。或いは、一生かけても無理かもしれないのだ。努力が足りないと、言われれば、そうなのかもしれない。見切りをつけていると言われれば、そうなのかもしれない。時と状況を弁えて、退却する事も立派な選択肢である。典孝はそう考えるようになった。ここで選択を誤れば、親父や兄貴にどれだけ迷惑を掛けるか分からない、という気持ちが一番強かったが。

典孝は遅まきながら、就職活動を開始し

た。就職担当の教授が良く面倒を見てくれた。のと、そもそも東大生である事、更に東大でもかなり成績が良かった事から、すんなりと内定が決まった。日本情報サービスという日本でも指折りのIT企業で、就職したい会社ランキングの上位にランクインするような優良企業だ。その事を親父に報告すると、「あー、良かった、良かった。これで俺も肩の荷が降りたよ」と心底安心したように言った。実は、典孝は山形の企業に就職する事も選択肢の一つに考えていた。親父も内心はそれを望んでいるよ。うな気がしていた。しかし、就職担当の教授は山形の企業など眼中にないようだったし、条件面でもやはり格差があった。取り敢えず内定が取れ、親父も心底喜んでいらっしゃる。たので、典孝はほっとした。典孝は中古のノートパソコンを一台持っていたが、せいぜいインターネットやメール、ワープロに使っている程度だった。最新技術

に慣れておく必要があると考える、思い切った  
新型のノートパソコンをローンで購入した。  
いざそれを使ってみると、パソコンがここま  
で進化したのかと驚愕した。様々なソフトが  
プリーンスツールされており、慣れれば慣れ  
る程便利さが実感出来た。典孝はすっかりパ  
ソコンのとりこになり、もっと早くからパソ  
コンを活用しておけば良かったと後悔した。  
同級生の中にはパソコンに数学用のソフトウ  
ェアをインストールし、研究に活用している  
奴らが結構いた。典孝がそうしなかったの  
は、パソコンが古く、研究に活用するだけの  
性能が無かったという理由が大きいが、それ  
だけではなかった。パソコンなんかの力を借  
りずとも、数学の研究は出来る、そういう信  
念を持っていたのだ。かのインシュタイン  
の時代にはパソコンなんか無かった。彼は紙  
と鉛筆だけで頭の中で思考実験を繰り返し、  
相対性理論を作り上げて行ったではないか。  
インシュタインに出来るなら自分にだって

出来る。当初はおこがましくもそう考えていた。しかしその考えは誤りだった。よく雲泥の差という言葉が使われるが、自分とアインシュタインとの隔たりはそれほどでは無かった。自分が泥とすれば、アインシュタインは遠い宇宙の果てのブラックホールのような存在だった。尤も、人類史上最高の天才と比較すること自体意味の無い事だったが。それはさておき、典孝がパソコンを本格的に使い出して分かったのは、予想以上に自分がパソコンが便利である事と、予想以上に自分がパソコンを使う仕事に向いているという事だった。最新OS・プログラム言語の基礎知識について、も、時間を見つけて少しずつ勉強していった。勿論大学の講義もこれまで通り、熱心に受けた。結果として、典孝は東大理学部数学科を非常に優秀な成績で卒業した。大学院の試験には失敗したものの、それは胸を張っていい事だった。

大学の卒業式が終わった後、典孝は学生最

後の帰省をした。四月からの社会人生活に向けて、IT技術の勉強をする事以外は特に何もする事は無かった。ふと典孝は、おっ母の墓参りをしようと思いついた。これまでの経緯をきちんとした形で報告しておかなければと考えたのだ。高校までは親父や兄貴と一緒に出掛けていたが、大学に入ってから全く行って無かった。典孝が二歳の頃亡くなり、親父もおっ母の事を話すのは殆ど無かったのだ。正直典孝には縁の薄い人だったが、大切な母親には違いなかった。母親の墓のある泉福寺は歩いて二十分程度の所にあった。墓前で手を併せて拝んでいると、後から声を掛けられた。「おい、ノリ」

振り返ると、そこに立っていたのは高校の同級生の佳勝先生だった。佳勝先生は泉福寺の住職の息子なのだ。元々恰幅が良い質だった。が四年振りに会った佳勝先生は更に恰幅が良くなり、もう一端の寺の住職の風格を持って

いた。

「お前が一人で来るなて珍しいな。お前の親父は毎月顔を見せてっげんとな」

それを聞いて、親父が毎月おっ母の墓参りをしている事を初めて知った。

「今度大学は無事に卒業して就職が決まったんだ。その事を母親にも報告して置こうと思つて。俺が二歳の頃死んだから、全然覚えていねんだ」

「んだがした。この前高校を卒業したと思つたら、もう大学出て就職か。早いもんだぞね。人間の一生なてこんな風に流れていくのか。しっかしお前も男手一つで育てられて、良くぞ全く曲がらず、真っ直ぐに育つたもんだ。大したもんだ。お前も、お前の親父もな」

佳勝先生は感慨深げに言った。

「佳勝先生に褒められるなて初めてだな」

「ノリ。俺、お前に前々から聞きたかった事があるんだ。お前、自分の親父のこと好き

か？  
「へ？佳勝先生、なしてそだな事聞くのや？  
凡そ世の中に自分を生み育ててくれた父親や  
母親の事を嫌っている人間なて居るんだべ  
が？」  
「んだがした・・・。少なくとも俺は自分の  
親父が嫌いだったな」  
「なして！？佳勝先生の場合、自分の師匠で  
もあるんだべ？」  
「んだがら余計がもすんねな。今はもう無く  
なったけど、昔は良く拳骨で殴られたよ。特  
に俺はお前と違って出来が悪かったからな。  
『クソ親父、今に見てる』俺を支えたのはそ  
の一念だった。ところだ。俺の親父の親  
父、つまり俺の爺さんが半年位前に亡くなっ  
たのさ。もう九十超えてたげんとな。その爺  
さんの葬儀で親父がお経を読み上げたわけ  
さ。そのお経の途中で、親父の奴号泣しやが  
ってさ。ボロボロ涙流しながら鬼の形相でお  
経を続けようとするんだよ。隣で俺もお経を

読んでたんだげんと、俺まで泣けて来ちゃつてな。その事が有ってから、俺は考えるようになった。俺の場合はどうだろうって。親父が死んでお経をあげるのは俺になるだろうってな。それが、どんな気持ちになるだろうってな。それからだな。自分にとって両親とは何か、自分の生き方はどうだったか、人間は何のために生まれて来るのか、どのように生きるべきなのか、そういった事を色々考えるようになったのは。それまではそんな事全く考えなかつたよ」

それを聞いて、典孝は腑に落ちない点があった。

「佳勝先生。俺も、前々から聞きたかった事が有んだ。高校三年生の頃、昼休みになるといつも腕組んで瞑想してたけべ？あれはいつも何考えてたのや？」

「ああ、高三の昼休みの時か。お前にだけ言うけど、飯田綾子って居たっけべ？俺あいつのごと好きだっけんだ。それでよ、綾子の奴

今日どだな下着付けてんだべ？何色のパンツ  
はいてんだべ？そういった類の事を一生懸命  
考えていたんだっけ」  
「んだがした・・」  
典孝は努めて平静を装ってそう言ったが、内  
心は違った。く・だ・ら・ねくくく！威風辺  
りを払う態度で瞑想に更けているように見せ  
掛けながら、実際はそんなどうしようもない  
ことを考えていやがったのか！こんなことな  
ら聞くんじゃないかった。秘密のベールに包ま  
れていた方が余程良かった。ただそう言った  
所で、佳勝先生に罪は無かった。典孝が勝手  
に勘違いしていただけの話だ。表面だけ大層  
に見えて、実情は全く異なる事は良くあるの  
かもしれない。久々に佳勝先生に会って、い  
い話を聞いたのか、下らない話を聞いたの  
か、なんとも微妙な心境になった。

## 17・入社

日本情報サービスに入社して、最初の二ヶ月間は全新入社員が研修所に集められ、新人研修を受けた。住まいも新人研修用の寮が別途準備され、二人一部屋だった。そこで社会人としての基本的な礼儀、マナー、パソコンやプログラムの基本について研修を受けた。典孝は大学四年の後半に既に勉強していたから、全て完全に理解出来た。当然研修担当の社員からは非常に優秀だと褒められた。大学院入試に失敗し、自信を失いかけていた面があったが、俺は社会人としても立派にやっていける、そう確信した。六月になり、新人が各部署に配属された。日本情報サービスは全国に支社を持っている。た。仙台に支社は有るものの、山形には無かった。もし、山形に支社があれば、山形支社勤務という選択肢もあったかも知れなかつた。典孝はどうせやるからには本格的にやりた。いと考え、本社勤務を希望した。その希望

通り本社へ配置され、住まいも会社の独身寮へと移った。典孝が配属されたのはパッケージ開発発部第一課で、パッケージソフトの開発、販売、保守、メンテナンスを専門に行う部署であった。パッケージソフトとは、パソコンショップ等の店頭で包装された状態で販売されているソフトウェアの事である。

部長は戸田と言い、眼鏡をかけ、恰幅のいい五十がらみの男だった。非常に温厚で、所作に余裕が感じられるが、この人物を怒らせたらただでは済まないだろうな、と感じさせると言い、日焼けした、スポーツマンタイプの男で、四十五歳という事であったが、歳よりもずっと若く見えた。工藤課長は上司や顧客には懇懇丁寧な対応をするが、部下に対しては、打って変わって非常に親しげに、ざっくばらんに接した。その態度の切り替えは鮮やかであった。配属された時点では、課を挙げ人事・勤怠・作業管理を一つに統合したパ

ツケージ開発を行っていた。典孝が最初に言  
い遣ったのは、パッケージの操作手順を覚え  
る事、操作していて気付いた点、動作不良と  
思える点を報告する事だった。典孝は物覚え  
が非常に良かったので、操作手順を瞬く間に  
覚えてしまった。また、初心者であるが故に  
指摘できるような事を多数指摘した。最新O  
S・プログラム言語についても勉強していた  
し、ソース解析も出来たので、即戦力として  
非常に重宝がられるようになった。  
新人が配属されてから二週間後に新人歓迎  
会が催された。少し間隔が空いたのは、課員  
のスケジュールが中々合わなかった為だ。新  
人歓迎会の席で、工藤課長が戸田部長の横に  
座り、戸田部長が新人の女の子の間に非常に  
人気が高い事をしきりに力説した。  
「そんなことは無いだろ」  
やんわりと否定しながらも、戸田部長はまん  
ざらでもない様子で、終始ご機嫌だった。典  
孝は黙って聞いていたが、突然戸田部長が話

しかけてきた。  
「おい、佐藤。お前新人だから、新人の事は一番詳しいいだろ。俺が人気あるなんて話聞いたこと無いだろ？」  
「んー。全く聞いたこと無いですね。さしずめ工藤課長の勘違いか、聞き間違いと聞いた所でしようね」  
典孝がニコリとせず、大真面目にいったものだから、場が一瞬にして凍りついてしまった。課長はこん棒で力一杯殴られたかのようになり、頭を抱えた。  
「あはははは、佐藤、おっ前バカ正直な奴だなあ。まあいい。そういう所がお前の持ち味なんだろうから、それを大事にしろ」  
「いやー、そんなに誉めないで下さいよ」  
その場の雰囲気解しない典孝は、全く検討外れの受け答えをした。  
翌日、典孝は工藤課長に飲み連れて行かれた。二回断ったが、しつこく誘うので、渋々了解した。そしてその席で、懇々と説教

される事となった。

「お前が非常に優秀な男である事は認めるよ。ただ惜しむらくは、人間が堅すぎる。視界が狭すぎる。融通が効かなすぎる。分かるか？ 今日だってあれだろ。俺が飲みに誘ったからお前露骨に嫌な顔してたけど、上司に飲みに誘われて嫌な顔しちやいけないんだよ。例えそれが嫌な上司の場合でも、だ。まあ、今日の話はいい。問題は昨日さ。お前あれはな이다ろ。自分でそう思わない？ 話の流れ的にお前は部長の発言を否定しなければならなかったんだよ。お前が否定する、という暗黙の前提を基に、部長はお前に発言を求めたんだ。ところがお前が全肯定しちまったから、話の流れが完全に止まっちゃったんだよ。うちの部長が寛大な方だから、事無きを得たけれども、普通だったらただでは済まされないぞ」

「課長、じゃ僕は何て答えれば良かったんですか？」

「かぁーッ！お前マニユアルが無ければ、自分の判断では何にも答えられないのかよ。正解なんて無いんだよ。臨機応変に、その場に即した受け答えが出来なきゃ駄目なんだよ。例えば、だ。『人気あるなんて聞いたことないだろ』と問われて、『いや、結構人気あるみたいですよ。戸田部長っていつもキチツとした服装して、清潔感あるよねって噂してるのを聞いたことあります』とでも答えれば、戸田部長だって『そうかぁ？』って感じで、その場は丸く収まったんだよ」

「あ、そう言えば女の子達が、『戸田部長のスーツって、テカテカしていて国会議員が着てるものみたい』って、噂しているのを聞いたことがあります」

「そうだろ。女ってのはそしらぬ顔して、細かい所チェックしてるんだよ。お前なんか、いつも同じスーツ着てるけど、せいぜい三万位だろ。部長のは一桁違うからな。ああいうのは、たっかいんだぞー」

「じゃ、明日部長に会ったら、『今日のストツは高級そうですね』って言います」

「言わんでええ！いきなりそう言われたって嫌味にしか聞こえないんだよ。佐藤、お前素直だし真面目だし仕事熱心だし、すんげえいい奴なんだけど、大事なものが欠けているよ。お前もっと遊べ。学問が人生の深さなら、遊びは人生の幅だ。お前は、その幅が全く無いんだよ」

「はあ」

「もしくは、早めに結婚しろ。結婚すれば、否応無しに世間の荒波に揉まれる事になるって」

「じゃ僕、頑張って彼女作ります」

「ん、女と付き合ってみろ。遅かれ早かれ絶対必要な事だ。そうすれば、お前も大分変わると思うぞ」

18・クドサン

新人社員の主業務の一つは電話番号だった。勿論新人社員宛てに電話が掛かってくる事は無く、単純に電話を取り継ぐだけだった。新人歓迎会が終わって間もない頃の事だ。典孝が電話を出ると、外人女性の声が聞こえて来た。

「クドサン、お願いシマス」

「クド？工藤ですか？」

「ハイ、クドサンデス」

横目でちらつと工藤課長を見ると、他課の課長となにやら談笑しているようだった。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「マイデス」

「マイ様？」

「マイチャンデイイデス」

「どちらのマイチャンでしょうか？」

「ブルーツリーノマイデス」

「工藤は今打ち合わせ中ですが、お急ぎでしょうか？」

「トテモ急ギデス」

「では少々お待ち下さい」

工藤課長の様子からすると世間話のようだったし、急ぎの用という事だったので、取り敢えず電話を回して見ようかと思い、一旦保留にした。

「工藤課長、お電話ですが如何致しましたよ  
う？」

「ああ、電話？後でかけ直すから用件聞いと  
いて」

「あ、はい分かりました」

保留を解除し、典孝は続けた。

「もしもし、工藤ですが今どうしても手が離  
せません。失礼ですが、どういったご用件で  
しょうか？」

「クドサン、今日来ルネ♪」

「は？工藤が本日お伺いするか否かの確認の  
電話ですか？」

「ハイ」

「私の口からはっきりお約束する事は出来ま

せん」

「ナゼクオナーイー！クドサン、最近アンマ  
リ来ナクナツタネ。来テモ別ナ子バカリ指名  
スル。アタシトテモサミシイデス。マイチャ  
ンマイツチャウ」

典孝は対応するのに嫌気がさしてきたので、  
早々と話を切り上げようとした。

「じゃ後で工藤に折り返させますから、お電  
話番号お願いします」

「クドサン良ク知ツテルネ」

「分かりました。じゃ失礼します」

二の句が告げぬように、電話を切った。随分  
変な電話だと思ったが、用件だけ伝えればい  
いと思っただので、それ程気に留め無かった。

会話の内容から、どのような種別の女か直ぐ  
分かりそうなものだった。しかし、典孝は夜  
の華やかな花街に足を踏み入れた事は一度た  
りとも無かったから、皆目検討がつかなかっ  
たのだ。

暫くして、課長が席から立ち上がってゆっ

くり前へ歩いてきた。  
「よしし、皆聞いてくれ。今日は月曜日だから、定例ミーティングをやるぞ。あ、そうだ。佐藤、さっきの電話誰から？」  
「あ、はい。ブルーツリーのマイチャンです。」  
典孝はきつぱりと返答した。他の課員から失笑が漏れた。課長の表情はこわばり、血の気が一気に引いた。課長は真っ先に戸田部長の方を見た。その際怪訝そうに顔を上げた部長とバッチリ目が合ってしまった。  
「さ、さ、佐藤くん、君なにか聞き間違いしてるんじゃないのか？ブルース・リーの舞いの事だろ？」  
カンフーのポーズを取りながら、課長はしきりに目配せした。典孝は敢然と立ち上がって、一步前へ進み出した。  
「聞き間違いではありません。ブルーツリーのマイチャンです。最近工藤課長がマイチャンを指名しなくなっていたという事で、非常に寂

しがってしまいました。今日はブルーツリーに行  
って、マイチャンを指名してやって下さい」  
典孝は深々と頭を下げた。典孝は課長に教わ  
った通りに、課長の発言を完全否定したのだ  
った。ドツと哄笑が沸き上がった。一番喜ん  
だのは他ならぬ部長であった。  
「おい、佐藤！おっ前いつからそんなおとぼ  
けキャラになったんだよ。なあ工藤君、その  
店今度俺にも紹介してくれよ」  
「いえ、あの、その、は、はい、分かりまし  
た」  
あわてふためく課長だったが、彼のキャバク  
ラ好きは課員の間では有名な話で、昼と夜と  
で人格が一変する男として知られていた。本  
人もそれを自認しており、部長には未だばれ  
ていないんだ、と誇らしげに語っていた。尤  
も、部長自身遊べない男はダメだ、という哲  
学を持っていたので、課長の秘事が露見した  
所で、評価が下がる事は一切無かった。

19・プレゼン  
六月末に開発中のパッケージの社内プレゼンを行う事になった。ノートパソコンで実際に操作し、その状況をプロジェクターでスクリーンに写すのだが、その操作役に任命され、それが典孝だった。典孝が最も一連の操作に習熟している、というのがその理由だが、新人社員が任命されるのは異例であり、非常に名誉ある事だった。プレゼンの発表は、いつも課長が直々に行うらしい。課員の話では、課長はプレゼンの名手として知れ渡っている、との事だった。プレゼン前日の六月二十九日、課員数名を集めてリハサルが行われた。課長はリハサルでも決して手を抜かなかった。名手と言われるだけあり、その説明は過不足無く、的確で、分かり易かった。懇懃丁寧な口調を基調にしているが、大抵な所は熱っぽく、時にユーモアを交えて、極めて雄弁に語った。何の原稿も無く、完全に自分の言葉で語るので、話に説得力があった。

た。課長と典孝は、事前に何の打ち合わせもしていなかかったが、典孝が話の流れから次に操作すべき内容を予測し、指示が出る直前に画面内容を出すものだから、非常にセンスがいいと誉められた。部長は最初の方だけ少し顔を出していたが、直ぐに席を外してしまっただ。それだけ課長への信任が厚いという事だろう。パッケージには検索・集計機能があり、指定月・指定部署の勤怠情報、作業別実績等を瞬時に集計し、表計算ソフト『エグザイル』を自動起動して集計結果を表示させる事が出来た。これがこのパッケージの最大の売りであり、プレゼンのハイライトとなる所だった。この所は、事前に一度エグザイルを起動しておく、エグザイルの起動が速くなる事や、少し間合いを取りたいので、ここに限っては先んじて操作しないように、等課長から典孝に事細かな指示があった。サンプルデータとして、社員千人分のデータが既にインプットされていた。部署を指定しなければ

ば全社員が対象になるのだが、その場合でも  
わずか数秒で集計結果が表示された。このパ  
フォーマンスの良さが売りの一つだった。機  
能になるが、給与計算ソフト市場シェアN  
・1の『縄文給与』と連携機能があり、こ  
ちらから縄文給与を直接起動し、入力内容を  
基に給料を自動計算させる事が出来た。但し  
これはあくまでもオプションであり、プレゼ  
ンで見せる予定は無かった。プレゼンであれ  
これ欲張り過ぎると、総括して何が言いた  
のか曖昧になってしまい、逆効果になる事  
課長は熟知していた。六月三十日の社内プレ  
ゼンには、会社役員、部課長が一同に列席し  
た。他方、工藤課長は注目されればされる程  
燃える質のようで、正に水を得た魚のよう  
に生き生きしていた。課長の自信溢れる話  
りに感化され、典孝も徐々に落ち着きを取

戻した。  
プレゼンは順調に進み、いよいよハイライ  
トである検索・集計機能の説明に入った。  
「我社の場合、勤怠情報をエグザイルの表に  
各社員が入力し、部署単位で勤怠情報を集計  
するため、別表に各社員の入力結果を移し替  
える、という極めて非効率的な運用を行って  
おります。本パッケージを導入すれば、人  
事・勤怠・作業管理が全てデータベース化さ  
れますから、指定月・指定部署の情報を自在  
にエグザイルに出力させる事が出来ます。本  
パッケージは正に我社にうってつけであり、  
顧客の第一号は他ならぬ我社でございませ  
う。部署を指定しなければ、全社員が対象にな  
ります。サンプルデータとして、千社員のデー  
タが入っています。今日は全社員の六月分  
の勤怠情報をエグザイルに出力してご覧いれ  
ましよう。」  
ここで課長は感極まったのか良く分からない  
が、一本足打法のポーズを取った。

「佐藤、頼む」

「了解しました」

受賞式に付き物の、小刻みに太鼓を叩く音が  
典孝の胸に響き渡った。課長も同じだったに  
違いない。

「実行ボタン押下！」

典孝がそう叫んでボタンを押した次の瞬間だ  
った。『インテックスが有効範囲にありませ  
ん』というメッセージが表示された。

「ん？」

と典孝が思ってメッセージを閉じると、パッ  
ケージの画面が跡形も無く消え去ってしまっ  
た。引っ張るだけ引っ張った割には、余りに  
呆気ない幕切れだった。

「あんれえーッ！」

課長の絶叫が部屋中に響き渡った。課長の一  
本足が崩れ、あたかもシェーのポーズを取っ  
ているかのように見えた。課長がつぶやくよ  
うに言った。  
「消える魔球ざんす」

そう見えただけではなかったのだ。なぜだか  
良く分からないが、課長はおそ松くに登場  
するイヤミが、星飛由馬の消える魔球を目の  
当たりにした光景を思い描いているようだっ  
た。課長は根っからの昭和男児なのだ。プレ  
ゼンが非常に順調に進んでいただけに、会社  
の役員達にはわかにごよめき立った。戸田部  
長の口からも、余裕の微笑が消えた。工藤課  
長の顔からは見る見る血の気が引いて行っ  
た。しかし動揺している猶予は全く無かつ  
た。事態は急を要するのだ。典孝は頭脳をフ  
ル回転させてエラーの原因を考えた。昨日は  
何度実行してもエラーは発生しなかった。デ  
ータの内容は昨日から変更していない。エラ  
ーは境界条件で発生するものである。これら  
を総合すると、末日の六月三十日に実行して  
いる事が原因としか考えられなかった。典孝  
は素早くプロジェクトへ表示を一旦中断  
し、ノートパソコンのシステム日付を六月二  
十九日に戻した。そしてパッケージを再起動

し、検索・集計機能の画面を表示した状態でプロジェクトに再表示した。その間僅か三十秒足らずだった。典孝はすっと立ち上がった。言った。

「課長、申し訳ありません。パソコンの環境設定が一箇所間違っていたので、只今修正しました。課長、私にもう一度チャンスを下さい」

典孝は深々と頭を下げた。課長はしばし押し黙っていたが、襟を正してこう言った。

「ようし、分かった。お前に特別にラスト・チャンスをやろう。だが今度は手加減はしない。さあ来たまえ」

課長はもう一度一本足打法のポーズを取った。

「か八かの賭けであったが、典孝には確信があつたので、自信を持って言った。

「実行ボタン押下！」

果たせるかな、実行状況を示すプログレスバーが表示された。これは正常動作している証

なのだ。

「課長、行きました」

それを聞いて、課長は力一杯素振りです。フルスイングしたかと思うと、手応え十分文句無し、という表情をした。そしてバットを空高く放り投げる仕草をすると、胸ポケットからタバコを出しながら、

「じゃ俺は隣の喫煙所で一服して来るよ」

と言って部屋を出て行こうとした。

「ちよっ、ちよつと待って下さい。課長、もう結果が表示されてますけど」

「何い？ お前冗談を言っちゃいけないよ。千データあるんだぜ。こんな瞬時に結果が出れば誰も苦労しねーよ」

「え、でもちゃんとエグザイルに千行出てますけど」

典孝は素早くエグザイルをスクロールして見せた。

「んー。あんまり速過ぎて良く分からなかった。佐藤、今度は俺にラスト・チャンスをつく

れ。もう一度実行して見てくれないか？」

「別に何度でもいいですよ。僕はボタンを押すだけですから」

ここで課長は役員達に向き直って高らかに言い放った。

「さあ皆さん、スクリーンに今一度ご注目下さい。千社員の六月分の勤怠情報をエグザイルに出力してご覧いただけます。一瞬の出来事ですから、決して瞬きしないで下さい。じや佐藤、頼む」

「了解しました。実行ボタン押下」

僅か二秒足らずで、エグザイルに結果が表示された。パソコンは同じ操作を行うと、二回目には速くなる。もちろん課長はそれを計算に入れていた。

「これまで我社は、この表を作るのにかなり工数をかけて来ました。本パッケージを導入すれば、大幅な経費節減に繋がります」

意気揚々と宣言した後、課長はちらりと典孝を見ると、これみよがしに大きなため息をつ

いた。  
「あーあ・・・」  
「あれ、どうしたんですか、課長？」  
典孝が尋ねると、課長は寂しそうに笑って言った。  
「いや、何。これで給与計算と連携出来たらな、なんて夢みたいなこと考えちゃつて・・・。なあに、はかない夢を見ただけサ。どうか気にしないでくれ、ハハハハ」  
「え？出来ますよ。ここに給与連携というボタンがあるじゃないですか」  
「で、できるって、お前事もなげに言うけど、そんな簡単な話なのか？何か裏があるような気がするな」  
「押して見ましょうか？」  
「ちよっ、ちよつと待ってくれ。まだ心の整理がつかないんだ。それはまた今度にしてくれないか。今日はここまでにしよう。お前が自信を持って見せられる、というのであれば押してもいいけど」

「じゃ、押しましょ」

典孝は事も無げに言うと、ボタンを押した。

すると、縄文給与が起動し、千社員分の給与計算結果が見事に表示されたのであった。これには一部役員から感嘆の声が挙がった。典孝が事務的な口調で説明した。

「これはオプション機能になります。給与計算ソフト市場シェアNo.1の『縄文給与』との連携機能を持っていますから、それを使えば給与計算まで全自動で行う事が出来ます」

「あいーや。こつれ一度使ったら止めらんねーだろうな。参ったな。ッ、もおーッ！」

そんなこんなでプレゼンは無事終了した。典孝は真っ先にプレゼン中に発生したエラーについて調べた。その結果、典孝の予想通り、最近作り込んだ部分で、月末日に実行するとエラーになる箇所がある事が分かった。

課長にその事を告げ、プレゼンの際はシステム日付を前日に戻す事に対応したと説明し

た。  
「そーかー。あれにはさすがに俺も焦ったよ。そんな初歩的なミスがあること自体が問題だが、あの場合はお前の対応がベストだったと思う。佐藤、良くやった。ファインプレーだ！」  
典孝は褒められて悪い気はしなかったが、システム日付を修正した点については、それ程たいした事はないと考えていた。冷静に、論理的に考え、暫定処置を行ったただけだ。それよりも、プレゼンの途中で課長に対して、「何空々しい事言ってるんですか。課長、そんな事は百も承知でしょうに」と何度か喉元まで出かかって、済んでのところで踏み止まった事の方が、ファインプレーに値すると考えていた。エラー発生以前もややシナリオを脱線気味ではあったが、エラーが発生した事で完全に脱線し、迷走し始めてしまった。タバコ休憩を取ろうとしたり、給与連携ボタンの存在に初めて気付いたような素振りをしたり

した事は、今にして思えば下手な三文芝居であつた。しかし、典孝がシステム日付を前日に戻すような危ない橋を渡つたのと同様に、課長としても一か八かの賭けだつたに違いない。

戸田部長によれば、課長のプレゼンに対する評価は真つ二つに分かれたらしい。幾ら社内用のプレゼンといつてもふぎけすぎという声もあつたが、既製概念に囚われない、全く新しいプレゼンスタイルだと高く評価する声もあり、中には名手工藤が名人の域に達したと評価する役員すら居たらしい。当の部長は非常にご満悦で、課長を呼び寄せて、何やら話し合つていたが、時々笑い声が聞こえた。暫くすると、課長が課員の前に出て来て、にこやかに言つた。

「よし、今日は定時に揚がつて皆で飲みに行くぞ。ここん所ずっと残業続きだったから、たまには羽目を外そう。飲み代は会社の経費から落とす」

課員から歓声が挙がった。

「佐藤、ちよつと」

課長が小声で典孝を手招きした。

「飲み会の後、部長と俺とお前とでブルーツ  
リーに行くぞ。部長直々のご達しだ。人生勉  
強と書いてついて来い！」

それだけ言うと、課長は踵を反して、さっさと  
行ってしまった。典孝としては全く乗り気  
では無かったが、課長の態度は有無を言わさ  
ぬものだったし、部長命令という事なので、  
腹を括る事にした。

20・ブルーツリー  
典孝は基本的に酒は飲まなかった。進められればビール位は飲むが、それ以外は飲んで全く美味しと思わなかった。タバコの煙りが苦手だったので、飲み会の席自体が好きではなかった。それでも、その日は典孝がヒーロー扱いだったので、非常に気分が良かった。課員達はプレゼンに出ていなかった。当然、部長がその様子を説明して聞かせた。当然課員の向けのリハースアル時には出なかった、課長のパフォーマンスに話が及んだ。  
「工藤君、あの一本足打法には何か意味があるの？微妙に花形満が混じっていたような気もするけど」  
「特に意味は無いんですよ。自然とあのポーズが出ちゃって。もちろん小さい頃王選手の真似を良くやっていた事が影響しているんでしょうけど」  
「どさくさ紛れにおそ松くんのイヤミも登場したよな」

「えー、そうですか？覚えてないザマス」  
課長がとぼけた受け答えをした。部長が続け  
て、典孝がエライ発生時も全く動じず、迅速  
に対処した事を言うのと、皆口々に典孝を褒め  
ちぎった。課長と佐藤は黄金コンビだ、とい  
う声も挙がった。課長も終始ご機嫌であつた  
が、珍しく酒は飲まずにずっとウーロン茶  
で、携帯電話を片手に時々席を外した。飲み  
会が掃けて、皆散り散りになつた際、典孝は  
課長から手招きされた。通りに一台タクシー  
が止まっていた、後部座席の奥には既に部長  
が鎮座していた。課長が部長の隣に乗り込み  
際、前部座席を指しながら典孝に言った。  
「お前、前に座れ。車で十分位で着くから」  
かくして典孝は夜の華やかな花街に記念すべ  
き第一歩を踏み出す事になつた。  
ブルーツリは繁華街をやや外れた雑居ビ  
ルの二階にあつた。課長に連れられて店に入  
ると、女主人と思われる五十台半ばの女が満  
面の笑顔で出迎えた。

「工藤さん、お待ちしておりました。随分お久しぶりじゃない？」

「三ヶ月位だろ。ママ、また少し老けたんじやないか？」

「しっつれいな！」

ママが課長の尻をパシッと叩いた。

「さっ、部長さん、奥に席をご用意してますから。お兄さんもどうぞ。レイちゃん、ミカちゃん、部長さんと工藤さんいらしたわよー」

間を置かず、派手な恰好をした二人の若い女性が登場し、部長を挟むように座った。課長が周到に根回しを行い、No.1、No.2のホステスをアサインしていたのだった。部長の左隣りにNo.2ホステスのミカちゃん、右隣りにNo.1ホステスのレイちゃん、その隣に課長、その隣に課長ご昵懇のマリちゃんは、その隣に典孝が座った。ブルーツリーはその名前の通り、ドア、内装が全て淡いブルーで統一されていた。ママ同様、建物

自体にもかなり年期が入っており、淡いブル  
丨というよりは、色褪せたブル丨という表現  
がより適切であった。キャバラというより  
は、何処か昭和のキャバレーといった風情が  
あつた。ただ部長の両サイドに座つたのは、  
いかにも今時の若い女性、といった感じだっ  
た。二人共部長の隣に座るや否や部長の服装  
を誉めそやした。ネクタイピン、カプスポタ  
ン、どれ一つとっても手抜きが無かつたか  
ら、事実を単純に羅列すればそれがそのまま  
誉め言葉となつたのだ。そろそろ誉めるネタ  
が尽きかけたかな、と思われる頃、左隣りに  
座つていたミカちゃんが口を開いた。  
「部長さん、その腕時計、ロメックスの最新  
モデルじゃないですか？」  
「お、分かるかい？」  
「伊達にこの商売やつておりませんのよ。部  
長さん、EXっていうロゴが入っていますけ  
ど、もしかしてそれってEX—Jモデル？」  
「ハハハハ、良く知ってるねー」

「部長さん、何気なくおっしゃるけど、それって、それって日本に限定百本しか入荷されていない、幻のモデルって言われている物じゃないですか！」

それを聞いて右隣りに座っていたレイちゃんも、すっくと立ち上がって絶叫した。

「ギャーッ！ママ、ちよつと、ママ！たいへん！」

それからママも巻き込んで、てんやわんやの大騒ぎだった。典孝はと言うと、たかが時計一つで何をそんな、と非常にクールに傍観していた。後から聞いた所では、部長がロメックスの最新型の時計をしている、という事も課長が事前に横流ししていたらしかった。

「ほんにもう、こんな有り難い物をこんな間近に見れるなんてねえ。この世に生を受けて二十九年、生まれて来て本当に良かったです」

ママが感慨深げに言った。課長がすかさず突っ込んだ。

「ママ、それを言うなら、昭和二十九年にこの世に生を受けて、じゃないかい？」

「そう言っても間違いではありません。工藤さん、そういう細かい所にこだわるから、女性の受けがイマイチなのよ。それに比べて、部長さんはドーンと構えてらして。工藤さん、部長さんてさぞかしおモテになるんですよ。ね？」

「部長、本当の事を言っていていいですか？」

課長が真剣な表情でお伺いを立てるように言った。

「ええ？ そうだ、ママ。そこに居る若い佐藤に聞いてみよう。こいつはバカ正直な男だから。佐藤、俺がモテるなんて話聞いたこと無いだろ？」

その場に居る全員の視線が典孝に集中した。典孝はしばし押し黙って、首をひねりながら両手を広げて言った。

「いやー。否定せざるを得ませんね。かなりモテモテでいらっしやいます。」

哄笑が沸き起こった。

「おいっ、佐藤！お前いつつの間にそんなリアクション覚えてんだ！」

部長が相好を崩して言った。課長も笑いながら小さく親指を立てた。

といても、典孝はその一言を言うがために呼ばれたようなものだった。部長は両手に花状態で、終始ご満悦だった。課長も部長のお供、という緊張から漸く解放されたのか、いきなりマイちゃんの肩に手を回して、何やら親しげに話し込んでいた。典孝はと言うと、ホステスとの話は全く合わないし、酒は全然美味しくないし、タバコの煙りは目に染みて来るし、次第に手持ち無沙汰になって来た。

「佐藤くん、随分大人しいのね」

おそらく気を使ったのだろう、ママが典孝の隣に座った。

「さっきの部長さんへの受け答えは中々見事だったね」

「この前『部長が人気あるなんて話聞いたこと無い』ってきっぱり言ったら、課長に凄く怒られちゃって」

「アハハハ、当たたり前じゃない。今日工藤さんから電話が掛かって来た時、佐藤の奴は真面目一本槍で遊びを全く知らないから、ママの方からまず女つてものを教えてやってくれ、なあんて言ってたけど、こんなお婆ちゃん相手がじゃねえ。でもあたしも、三十数年この世界に身を置いているから、かなり顔は広いわよ。沢山の子の面倒を見て来たわ。あなたみたい人から見れば、ホステスなんて派手で尻軽な女ばかりと思うかもしれないけど、決してそうじゃないんだから。確かに遊ぶお金欲しさにやってる子も多いけどね。あなた、今何歳？」

「もうすぐ二十三です」

「出身は？」

「山形です」

「ふうん、頑固で不器用で朴訥で、そんな感

じよねえ。そう言えば半年位前だったかな  
し。丁度あなたと同じ年位で山形出身の子を  
世話した事が有ったわ。なんて子だったかな  
し。結局その子は別の店に行ったけど。地方  
から出て来てこの世界に入ってくる子はなん  
かしら事情を抱えているケースが多いわね。  
あなたがこの次来る時まで調べといてあげる  
わ」  
「もう二度と来ないんで、調べなくていいで  
す」  
ママがぴしゃりと典孝の膝を打った。  
「ちよっと何よ、その言い方！あんた工藤さ  
んが言っていた通りね。東大出のエリートか  
なんか知らないけど、三十以上も目上の人に  
向かってそんな口の利き方しか出来ないなん  
て社会人として失格でしょ！わざわざ気を使  
って頂いて有り難うございます、この位のセ  
リフが言えなきや。例え社交辞令であっても  
ね。あんた、女と付き合った事あんの？」  
「いえ、全くないです」

「でしようねー。だから駄目なのよ。若いんだから恋をしなさい。恋をして、泣いたり笑ったり怒ったり。悪気は無いのに傷付けたり、逆に傷付けられたり。そんな事を繰り返しながら誰だって大人になって行くんでしょ？　そういう意味では、あんな赤子も同然よ」

「課長も同じ事を言っていました」

「でしよー。じゃ頑張って彼女作りなさい」

「僕、頑張ります」

## 2 1 ・ 再会

それから十日程経った頃の事だ。典孝が仕事をしているところ、課長が胸ポケットからタバコを出しながら典孝を喫煙所へ誘った。課長は仕事とは関係ない話をする時、課員をよく喫煙所へ誘った。それが課長流のコミュニケーションであつた。典孝に取つて喫煙所というのは無縁な所で、タバコの煙り漂う不快な場所であつたので、最初のうちはきつぱり断つていた。しかし、誘われるがまま行つた方が不要な確執が起きないし、貴重なアドバイスを受ける事もあるので、素直に従うようになつていた。喫煙所でタバコを取り出して、それに火をつける前に課長がいきなりこう切り出した。

「お前、高橋清子って知ってるだろう？」

「あ、はい。高校の時の同級生です」

「居たよ、キーコが。俺が昨日行つた店に！」

『北斗』つて言う名前のパブなんだ」

「えっ！」

典孝は思わず大声を出してしまった。まさかこのようなシチュエーションで、キーコの名を聞く事になろうとは夢にも思わなかったのだ。この前行ったブルーツリーに昨日また行ったんだよ。マイの奴がうるさくてな。あいつに名刺を渡しちまったのが運の尽きだったよ。ママが暇そうだったから、色々雑談しているうちにお前の話題になった訳だ」

それからの話をまとめると次のようになる。ママは自他共に認めている通り、この界限の夜の世界ではかなりの顔で、ママの元で働いてから独立したホステスも結構居るらしい。元来世話好きな事と相俟って、ママには金の問題、男の問題、雇用問題等様々な相談事が持ち込まれる。半年位前、二十二、三歳の女の子だが、何処か働き口はないかという相談が寄せられた。それがキーコだったのだ。ママは実際にキーコに会い、本人の希望金



だ。な。ー。勉強だけで、女には見向きもしなかつた。つて。その硬派さが受けて、女子の間では結構人気あったらしいぞ。キーコもお前に気があったらしいじゃないか。キーコつて見た目は垢抜けない田舎娘って感じがするけど、話して見ると気立てのいい子だよ。まだ一人の男としか付き合った事が無いって言ったぞ。今時珍しいだろ？その男とも半年前に別れて今はフリーだつて。お前チャンスじゃねーか。お前みたいな超ビッグナー、これ程いい練習台はねーだろ。鴨がネギしよつてやつて来たようなもんだ。今日行くからな」

「え！今日ですか？」

「都合悪いか？」

「悪くはないですけど・・・でも課長、キーコつていうニックネームをなんで知ってるんですか？」

「だって源氏名がキーコつていうんだよ。ずっとキーコで通つて来たから、他の名前では呼ばれても、ピンと来ないだとき」

「僕もあのキーコがホステスになっ  
て全然ピンと来ないですよ」  
「ホステスなんてもんじゃないんだよ。フロ  
アレディーという名目で酔っ払いの話し相手  
になっっているだけなんだから。あのママはか  
なりの目利きだからな。この子は伸びると直  
感した子は、決して横流ししたりはしないん  
だよ。キーコのルックスを見て外れのパブの  
フロアレディーが関の山と踏んだら。じ  
ゃ、今晚空けとけよ」  
「んー。余り気が進まないな」  
「お前ら実は似た者同志なんじゃないか？ 今  
度お前を連れて来るよって言ったら、キーコ  
も『こういうお店で働いている事、ノリ君に  
知られたくないな』、なんて言ってたぞ。あ  
ーあ。恋に不器用な二人。この俺が恋のキュ  
ーピッドを演じざるをえないっていうシナリ  
オカあ。面倒で厄介な事に顔を突っ込んじま  
ったな。参ったな。もおーッ！ じゃ今  
晩ヨロシク」

課長は取り出したタバコを吸わずにしまつて、そそくさと立ち去ってしまった。典孝は茫然と、しばしその場に立ち尽くした。キーコが働くパブ『北斗』までは、途中電車を一つ乗り継いで、凡そ一時間程度掛かるという話だった。キーコは夜七時から深夜零時までパートで働いているという事だったので、七時頃店に着くように定時で退勤して、課長と二人で電車に乗った。急転直下の展開で、キーコに会いに行く事になってしまったが、典孝には全く実感が沸かなかつた。それでも電車に揺られているうちに、俄かに緊張が高まって来た。課長が色々話しかけて来て、も、殆ど上の空だった。一体彼女に会って何を話せばいいのか。高校時代、キーコが自分に思いを寄せていた事は、薄々感づいていた。しかし、典孝はそれを他人事のように思っていた。キーコとは用事が有れば話すが、無ければ話さない、それだけの関係で、キー

コに女を感じた事は一度も無かったのだ。それなのに、今の胸の高鳴りは、積年の恋人に漸く会える、そんな感じだった。課長に連れられながら、典孝は雲の上を歩いている感じがした。キーコが働く店は駅から歩いて十分程度の所であり、繁華街からは多少外れていた。その分店内は広く、オシヤレで小綺麗で、女性でも気軽に入れそうな雰囲気だった。水商売というと猥雑だ、という先入観が典孝には有り、あのキーコがそこまで身を落とすのか、との思いもあつたが、それは思い違いのようだった。

「よお、キーコ居るかい？」

工藤課長が昔馴染みの客のように中に入っていった。

「あれ、工藤さん、今日も来て下さったんですか？」

白いチャイナドレスを着たキーコが小走りに近寄って来て、嬉しそうに言った。

「約束通り連れて来たよ、昔の恋人を」

課長が親指で後ろを指しながら言った。典孝は無表情のまま、棒立ちの状態だった。キーコに会うのは高校卒業以来四年ぶりであった。が、横目でちらりと見てまず最初に思ったのは、眉毛の太さが半分になったという事だった。高校生の頃は、もっとはつきりした眉毛であったが、人為に手が加えられたような眉毛になった。それ以外は、四年分成長して女らしさが増したという点は勿論あるが、全体的な印象としてはそれ程変わっていないように見えた。ヘアスタイルは昔と全く同じ黒々したストレートで、肩の所まで伸ばしていた。口紅を軽く塗った程度で、最低限の化粧しかしていなかったが、元々肌が綺麗な質なので違和感は無かった。百七十センチある長身にチャイナドレスが良く似合った。「あ！」

キーコが店中に響き渡るような大声を出し、口を覆った。そして表情を硬くして俯いてしまった。もし課長が居なかったら、二人とも

黙って突っ立ったままだったに違いない。そんな二人を尻目に、課長はソファにどっかり座ると両サイドに二人を座らせて喋りに喋った。元々人当たりが良く、雰囲気呑まれ易いキーコは直ぐに打ち解けて、良く笑った。「それであ、こいつ大声で『課長、ブルーツリーのマイちゃんから電話です』って言いやがって」

「アハハハハ。ホントですか？」

「本当だとも。揚げ句の果てには『今日はブルーツリーに行つてマイちゃんを指名してやつて下さい』とか抜かしやがって」

「信じらんない。ノリ君も随分変わったね」。高校時代はそんなふざけたこと絶対言わない人だったけど」

「へー。こいつもこれで変わったのか。昨日聞いた限りでは、高校時代から堅物のまま全然変わっていないと思つたけどな」

ここで課長はちらりと典孝を見た後、キーコに耳打ちするように言った。

「これはここだけの話だけどな、こいつ高校時代キーコに気があったらしいんだよ」

「え、ちよっ、ちよつと待って下さい。課長、僕そんなこと一言も言っていないじゃないですか」

典孝は自分でも顔がみるみる紅潮していくのが分かった。

「いいから、いいから。無理すんなって。好きだとお互いに言い出せないまま、別れてもう四年か。お互い今フリーだし、しかも恋人募集中だし。曲がりくねったお前らの恋も、漸く成就する事になる訳だな。じゃ、俺トイレ行って来るから」

そう言い残すと、颯爽と席を立って行った。すっかりリラックスしたキーコはその調子で話しかけてきた。

「工藤さんて面白い人ねえ。いつもあんな調子？」

「部下に対してはね。上司や顧客に対しては懇懃丁寧でまるで違うよ。ちなみに俺がキー

コに気があったというのは、全くの作り話な  
んで。念のため」  
「分かってる。だってノリ君で勉強一筋って  
感じで、女の子に興味持ってるように見えな  
かったもの」  
典孝に言わせれば、それは誤解であつた。典  
孝にも何度か恋に落ちた、というよりは落ち  
かけた経験はあつた。時には両想いと感じる  
事もあつた。しかし、自分には他にやるべき  
事があると頑なに信じていたから、そんな時  
は見ざる聞かざる言わざるを貫き通した。一  
ヶ月もすれば恋の炎は否応無しに揉み消され  
たのだつた。  
「ちなみにあたしがノリ君に気があつたのは  
ホントよ。知ってた？」  
「ん？ まあ薄々ね」  
「気があつたというよりは憧れかな。ノリ君  
で昼休みの時もありふり構わず勉強してたか  
ら、近寄り難いところがあつたけど、勉強でも  
なんでも一生懸命取り組んでいる姿って素敵

よねえ。あーあ。あの頃は私も純情だったな  
あ。今じゃこんな夜の女に成り下がっちゃっ  
たけどね」  
「なしてフロアレディーなてしてんの？」  
「え？ 話せば長くなるけどね。・・。そう言  
えば工藤さん戻って来ないね。大きい方だと  
しても、長くない？ ひよつとして気分悪くし  
てたりして。ノリ君悪いけど見て来てくんない？  
カウンターの向こうにトイレがあつて、  
男子トイレと女子トイレに分かれていますか  
ら」  
「分かった」  
典孝は言われた通りに男子トイレの中を覗い  
て見たが、もぬけの殻だった。カウンター越  
しに店のマスターに確認すると、  
「工藤さんなら帰ったよ」  
とあっさり答えた。  
「帰った！？」  
「一万円出してさ、これで足りなかつたらツ  
ケといてくれ、それからキーコは今日終日指

名にしてくれて。うちはツケも終日指名もやっつてないんだけどね。二回目であんな馴れ馴れしい人も珍しいよ」

マスターが苦笑しながら言った。

「でも今日は特別認めるよ。お宅、キーコの高校時代の同級生だって？ 思い出話に花でも咲かせたら」

典孝が席に戻ってその事を告げると、

「なんで突然帰っちゃったのかしら」

とキーコは怪訝そうだった。

「どうも、課長は俺とキーコをくつつけたがっているみたいなんだ。『お前みたいな超ビギナー、これ程いい練習台はねーだろ』って」

「ちよつと！ 幾らなんでもそんな言い方ひどいんじゃない！」

「い、いや、俺が言ったんじゃないんだよ。課長がそう言ってたんだ」

「だからといって本人の前でそのまんま言う事ないでしょ！」

「それもそうだけど」

「まあそういう不器用な所は昔ながらだけどね」

キークは典孝を見ると、少し笑った。

「あたしが東京の短大に進んだのは知ってるでしょ？たいして頭なんか良くないのに、わざわざ東京の大学へ進んだのは、ノリ君が東京へ行くならあたしも、という気持ちが無処かにあったのかもしれない。お兄ちゃんも慶應だったしね」

「兄貴は今何してんのや？」

「あたしん家、高橋病院という開業医やってんのよ。そこで父と一緒に働いている。名義上は副院長」

「キークがこういう所で働いているの、親は知ってるの？」

「全然知らない。あたしが就職活動してる時は、もの凄く就職不況だったの。中々就職が決まらなくて、漸く中小企業の事務に決まっ  
たと思ったら、一年でリストラされちゃっ

て。親に余計な心配掛けたくなかったから、リストラされたってこと自体言っていないの。キーコはポツリポツリとこれまでの経緯を語り始めた。キーコは遊んでる訳にもいかず、近くのレストランバーガーショップでアルバイトを始めた。元々人当たりのいいキーコは直ぐに仕事に馴染んで、客からも慕われた。その店に良く顔をを出す二十代半ばの若い男がいた。福山雅治に少し似た二枚目で、徐々に親しくなり、自然に付き合い始めるようになった。自分は某私立大学の大学院生だが、週に二、三回程度しか大学に行かないと語っていた。裕福な家庭らしく、親からの仕送りのみで悠々自適の生活を送っているようだった。しかも今友達と一緒に暮らしており、家賃が半額で済むため余裕があると語っていた。その影響か、非常に切符良くキーコに奢ってくれた。そのお礼という事で、キーコのマンションに招いて手作りの料理をご馳走する事が度々あった。

そのうち彼は我が物顔でキーコのマンション  
に出入りするようになった。しかし決して泊  
まるような事はせず、彼の住所も曖昧にしか  
教えてくれなかった。  
ある時、彼がシャワーを浴びている間に彼  
の携帯が鳴った。一分程度鳴り続けて止まっ  
た。直ぐ携帯が再び鳴り出した。携帯表面の  
小さい液晶を覗いて見ると見知らぬ女性から  
であった。また一分程度鳴り続けて止まっ  
た。二、三分後に再度鳴り始めた。余程急用  
なのだろうとキーコは思った。彼がシャワー  
を浴びる時間はいつも十分足らずなので、も  
う終わる頃と思われた。その旨伝えて、用件  
があれば聞いておいた方が親切かな、と感じ  
た。キーコは彼の携帯に出てしまった。それが  
運の尽きだった。それは同棲中の彼女からの  
電話だったのだ。  
「彼はシャワー中」  
という一言で全てを悟った彼女は電話口で大  
声で喚き散らした。最近おかしいおかしいと

感じていたらやはりそうだったと繰り返した。キーコがあたふた対応していると、彼がシャワーから上がって来た。キーコが自分の携帯で話しているのを見て、彼は血相を変えて叫んだ。

「なに人の携帯いじってんだよ！」

キーコから携帯をもぎ取ると、少し耳に当たった。直ぐ相手が分かったようで、黙ったまま携帯を切った。携帯を持ったまましばし宙を仰いでいたが、突然烈火の如く怒り出した。

「てめえ、俺の目を盗んでいつも俺の携帯いじってやがったのか！」

と罵詈雑言を浴びせ掛けた。キーコにも言い分は山程あったが、勝手に人の携帯をいじつてしまったのは事実だし、なにより相手の剣幕に追いやられて防戦一方だった。彼は何を言っても怒りが鎮まらなかったのだろう。

「てめえ、今まで奢った金全部返せ！」

そう言って手を差し出した。その時のキーコはもう魂の抜けた人形のような状態だったの

で、言われるがまま財布に入っていた二万円を差し出した。それをわしづかみに奪い取る  
と  
「くそ女めっ！」  
と捨て台詞を残しそのまま出て行ってしまった。  
た。僅か五分足らずの出来事であった。その  
間にキークは、素敵な彼氏と、彼との楽しい  
思い出と、手持ちのお金、その全てを失っ  
た。  
心の痛手を受けた直後はその深さに気付か  
ないものだ。時間が経つにつれ、怒り、悲し  
み、悔しさがふつふつと沸き上がって来た。  
自分は捨てられたのだ。二股をかけられ、逆  
切れをされ、ボロ雑巾のように捨てられたの  
だ。二股をかける、というのは雑誌やテレビ  
で良く聞く話だ。しかしそれは完全に他人事  
と考えていた。よもや自分がその目に遭うと  
は予想だにしなかった。しかも初めて付き合  
った人に。その後三日間は何をやる気にもな  
れず、泣き暮らした。外出は殆どせず、部屋

の中に閉じこもったままだった。彼との思い出が残るハンバーガーショップに通う気になれず、バイトも辞めてしまった。しかし、一日中塞いで無為に過ごしても、何の慰みにもならなかった。こんな事をしていていいのか、という罪悪感だけが残った。更に厳しい現実が否応無しに重く押し掛かって来た。今月の家賃を払えば、所持金が殆どなくなる状態だったのだ。つい一週間前、彼と費用を折半して大型液晶テレビを購入したばかりで、貯金は大分減っていた。そもそもバイトの収入だけでは生活費を賄い切れず、正直彼の奢りに依存している面もあった。このままではいけないと考えていたから、バイトをしながらも就職活動は継続していたが、これといった特技は無く、無名の短大にすぎない女子を採用してくれる企業は皆無だった。再度バイトを始めた所で、収入はたかが知れてい。そうなるか。と選択肢はかなり限られ、手っ取り早く金を稼ぐには夜の仕事しか無かつ

た。  
「夜の仕事なんてやったこと無かったし、お酒は飲めないし、かなり抵抗があったから色んな人に相談して見たの。そして、それならその道三十年以上の大ベテランがいるって紹介されたのが青木さんってわけ」  
「青木さんて誰や？」  
「え？ブルーツリーのママよ。あの人青木さんって言うの。ノリ君も知ってるでしょ？青木さんにここを紹介してもらったの」  
「ここでキーコは含み笑いをした。  
「ふふふ。この前青木さんと電話で話した時はビツクリしたな」。佐藤という山形県出身の東大出の男で、年は大体あたしと同じ位だけれど知ってるかって聞くんだもん。真っ先にノリ君の事が頭が上がったけど、まさかノリ君がそういうお店出入りすると思えなかったの。佐藤という苗字の人は沢山いるしね。だけれど、小柄で、痩せてて、眼鏡掛けてて、青白くてって、聞けば聞く程ノリ君に似てるわ

け。だからあたしの同級生に良く似てるとだ  
け。伝えといた。そして昨日突然工藤さんが  
やって来て、店に入るや否や高橋清子さんつ  
て人いますかって聞くの。あたしですと答え  
たら、あなたは佐藤典孝って知ってますかっ  
て聞くの。あたしの同級生ですと答えたら、  
やはりそうか、みたいな表情になって出身高  
校とか細かい特徴とか言うわけ。それはあた  
しの同級生に間違いないって言ったなら、なん  
か知んないけどバット持つ恰好して力一杯素  
振りして、今夜は飲もう、だって。そしてノ  
リ君の高校時代のこと色々聞くから、有りの  
まま話してやったら大受けしてね。今度あい  
つを連れてくるよ、とか言ってたけどまさか  
昨日の今日連れてくるとは思わなかったな  
。ホントはこんな店でこんな恰好してこん  
な商売やってるとこ、ノリ君に見られたくな  
かったんだ」  
「たいした事ねえべ。せいぜい酒飲みの話し  
相手になっっている程度なんだから」

「この仕事始める前、このマスターからも同じこと言われた。最初凄く抵抗があったけど、じゃ出来るかなと思ったの。でもそんなに甘くは無かったな。酔ったふりして体触られるなんてしよっちゆうだし、しつこく誘ってくる人もいる。中にはカツコイ人もいたりするけど、もう当分の間男は懲り懲り。サカリのついたオスにしか見えない。思わせぶりな態度を見せつつ、うまく断っちゃう」

「おおっ、そんなテクニックを覚えたのか」

「しようがないのよ。お客なんて入れ代わり立ち代わり沢山来るんだもん。いちいちまともにつき合ってたら切りがないわ」

「キーコも大分変わったな」

典孝がため息まじりに言っ、ふと時計を見るともう九時を回っていた。店も大分混んできて、自分一人だけがキーコを独占する訳にはいかないように思えた。それに典孝はいつも十一時には就寝する質だったので、立ち上がって

「俺、そろそろ帰るわ」

と言った。キーコも横目でちらちら他の客を気にし始めた頃だったので、特にとめだてせず、一緒に立ち上がった。入口の所まで見送りつつ、キーコが言った。

「今日はノリ君と久々に会えて嬉しかったな。よくよく考えると、ノリ君とまともに話したのは今日が初めてよね。あたしをキーコって呼んだのも今日が初めてね。高校時代はずっと高橋さんって呼んでた」

「うん。最初なんて呼ぼうか迷ったんだ。だけど課長がごく親しげにキーコ、キーコって呼んでいるのに同級生の俺が高橋さんじゃおかしいような気がしてな」

「ノリ君も大分変わったな。高校時代は寸時を惜しん勉強していたから、余り話したこと無かったけど、凄く親しみ易くなった」

「な」

「いい上司を持ったよね」

「んだ。俺もそう思う」

典孝が大きく頷くと、キークが典孝の顔を覗きこむようにして言った。

「ねえ、また来てくれる？」

キークにそう聞かれて典孝は少し考えた。確かに典孝もキークと会えて嬉しかった。二歳の時に母親と死に別れているので、女性とまともに話したのは生まれて初めてと言ってよかった。しかし女性と話しながら一、二時間飲むだけで数千円、場合によってはそれ以上の金額を請求されるのは全く納得出来なかった。店内の喧騒とした雰囲気も好きではなかった。今日は課長に誘われて仕方なしに来たが、自らの意志で来る気には到底なれなかった。しかしキークに面と向かって「もう二度と来ない」とはさすがに言えなかった。この前ブルーツリーのママから怒られた事も頭に残っていた。

「うん、仕事に余裕が出来たらね。取り敢えず、俺の名刺だけ渡しておくよ」

名刺を渡しながら、曖昧にお茶を濁してその  
場を立ち去った。

2  
2  
・  
恋

四年ぶりにキーコに再会した翌日から典孝に異変が起こった。キーコの事が頭から離れなくなつてしまつたのだ。それはヒナが最初に見たものを母親と思うが如く必然的な出来事だつたし、課長の術中にはまつたと言われればそれまでの話だ。キーコにまた会いたい、会つて話したい。そればかり考えるようになつた。これまでも恋愛もどきの経験は有るには有つたが、今回は桁が違つていた。夜寝る前、必ずキーコの事を考えた。今頃キーコは他の男と談笑しているのかと思うと、悶々として寝付けない事も有つた。キーコ会いたさに涙を流す事も有つた。典孝は二十三にして初めて恋煩いの辛さを味つたのだつた。何度か店に会いに行こうかと思つた。しかし一人で行くのは気が引けた。何より典孝はプライドが高かつた。曲がりなりにも自分には東大卒である。無名の短大卒の遊女のもとに何故通わねばならぬのか。そんな気持ちだが

皆無とは言えなかった。しかし、もし課長にまた誘われたら？あの強引な課長の事だ。こちらが何を言っても有無を言わさぬだろう。その場合は致し方ない。嫌々ながらもお供する事にしよう。そのような結論に到っていない。た。当の課長は課レクの準備におおわらわだった。課レクというのは課のレクリエーションの事で、課員同志の友好を深める目的の下、半期に一度行われた。会社から一人当たり五千円の補助金が支給された。今回は課を挙げた。製品化のめどが立ったご祝儀として、部長のポケットマネーから一人当たり更に五千円支給される仕儀になったらしく、課長は俄然張り切っていた。通常は課レクの準備等の雑務は新入社員の仕事なのだが、典孝の課の場合には課長自ら率先して音頭を取っていた。課員は課長は、会社の盆休みを利用して二泊三日の沖繩旅行を画策しているらしかった。出来

る限りコストを低く抑えようと、広い人脈を駆使して大奮闘していた。その道に詳しそうな課員を呼んであれこれ議論する事は有ったが、典孝に声が掛かる事は無かった。ある時、典孝が喫煙室の前を通りかかった際に、喫煙室に入ろうとした課長にばったり会った。課長はふと思ひ出したように「そう言えばお前、キーコとその後どうなったんだ？」と聞いて来た。典孝はとうとう来たか、と思った。喫煙室に連れ込まれて、説教じみた話になるに違いない、と覚悟した。「いや、あれ以来何の連絡も取っていませんん」典孝は努めて冷静に、素っ気なく答えた。「あ、そ」課長は一瞬空振りしたかな、という表情をして、そのまま喫煙室に入ってしまった。この時はさすがに拍子抜けした。「課長、ちよつと待って下さい。もう少しじつて下さい

よ！』と喉元まで出かかったが、済んでの所で踏み留まった。少し前の課長なら、いじりたいただけいじっていたに違いない。しかし、今の課長の興味を中心は課レクに移っており、凡そレクリエーションと名の付くものも無縁の人生を送ってきた典孝は、課長に取って不要な存在のようだった。

## 23・課レク

結局課レクは二泊三日の沖縄旅行に決定した。当初は会社の盆休みを利用するという案もあったが、盆の時期は何かにつけて混むし、帰省する者が多いという事で、八月頭の土日を利用する事になった。月曜日は平日であつたが、課長が部長に掛け合い、課員が一齐に有休を取る事が許可された。経費を極力削つた結果、大部屋に皆雑魚寝するという話だつた。それが影響したかどうか分らないが、二人居る女性社員は双方とも不参加だつた。典孝にしてみれば、有休を取るのは初だし、飛行機に乗るのは初だし、本州を離れるのは初だし、初めて尽くしの旅行だつた。那覇空港に着いたのは昼過ぎだつた。課長は何度も来た事があるらしく、もう手慣れたもので、近場のレンタカー屋に参加者全員が乗れるような車を借りに行った。準備が整うまで少し時間があつたので、空港のお土産を色々

見て回った。泡盛、ちんすこう、ハイビスカス等、色々な沖縄名物が所狭しと置いてあった。折角だから山形の実家に何か送ってやるうかと思いついた。丁度今頃親父は、昼飯食べて一服している頃のはずだ。沖縄に来ている事を誰かにひけらかしたくてしようがなかった。携帯で実家に電話する事にした。電話は直ぐに繋がった。

「もしもし、親父。俺だす」

「おお、ノリか。昼間に電話寄越すなて珍しいな」

「親父、ビックリすんなよ。俺な、俺な、課レクで沖縄さ来てんだ」

「カレー食って沖縄さ来てる？」

「んねんだ。課・レ・ク」

「かれくって何や？」

「課のレクリエーション」

「んだからレク何とかって何？」

「んー、課の皆と一緒に楽しい事をするといつか・・・」

「要するに社員旅行の事か？」

「今回の場合は、なんだっす」

「だったら最初からそう言えや。ややこしいこと言うなずー」

「われ、われ。んでよ、何か沖縄名物送ってやろうかと思うんだけど、何がいい？」

「しっかし社員旅行で沖縄さ行くなて、たあいた会社だな。沖縄かあ。行った事ねえがらなあ。全く見当つかねな。沖縄って、どだなのがあんのや？」

「例えば泡盛とか」

「泡盛は家さ既に有るよ」

「他にはちんすこうとか」

「チンカスコ？チンカスの粉か？」

「んねんだ。ちん・ん・す・こ・う」

「要するにチンポコのことだべ？ややこしいこと言うなずー。俺もむっかし、くじらのチンポコって食ったこと有ったっけな。上手いんだが、上手くねえんだが、よく分がらな

「がったよ」

典孝は親父が少し勘違いしている事は分かったが、典孝自身『ちんすこう』なるものが沖縄の名産お菓子であること以外は何も知識が無かったし、下手に反論して『ややこしい』攻撃を受けるのは嫌だったので、取り敢えずそつとして置く事にした。

「他にはハイビスカスの花とかもあるけど」

「うちは男所帯だから花なていらねずー」

「分かった、親父。じゃ仮にだよ、何でも欲しいもの買ってやるって言ったら何が欲しい？」

「んー、やっぱり孫かな」

「そういうんじゃないよー、買うものだぞー。孫はまず兄貴に頼んでけろ」

「コウは中々頑張ってるよ。んでもよ、もう少し結婚か、という段階になつと駄目になんだけず。俺も不思議で不思議でな。この前聞いてみたんだぞ。そしたらよ、この家で親父と一緒に住む事が結婚の条件だつて言ってたんだぞ！こだなぼろ家でこだな親父と一緒に住む

なて言ったら、うまく行く話も駄目になるに  
なて言ったら、うまく行く話も駄目になるに  
決まってるっぺ？頼むがらそだな条件付けねで  
けろって言ったんだぞ。んでも、あいつ背は  
高いし、二枚目だし、もてっからそのうち何  
とかなっぺ。ノリ、お前は頭はピカイチだ  
が、顔と背はイマイチなんだから、頑張んね  
ど駄目だぞ」  
「分がった、分がった。んじゃ、沖縄名物ば  
適当に見繕って送ってやっから」  
話が違う方向に移って来たため、典孝はそそ  
くさと電話を切った。  
殆どの参加者が沖縄は初だったので、課長  
が車で色々な名所に案内してくれた。初めて  
見る沖縄に典孝はすっかり魅了されてしまっ  
た。何処までも高く青い空。エメラルドグ  
リーンに輝く海。ああ、この素晴らしい景色を  
キーコに見せてやりたい。傍にキーコがいた  
らどんなに幸せだろう。典孝はしみじみと思  
った。街行くカップルを見ると羨ましくてし

ようがなかった。自分もキーコと連れ立って街を歩いてみたい。よくよく考えれば、その程度の事はやろうと思えばいつでも出来る事だった。会いに行くのが気が引けるのなら、電話で場所を指定して会う約束をすればいい。店の電話番号は知っていたので、何度か電話しようと思った事は有った。しかし、どうしても最初の一步が踏み出せ無かった。会社の名刺は渡してあったが、キーコからも連絡は無かった。もう俺と会った事なんか忘れてるのかな、と自虐的な気分になる事も一度や二度ではなかった。一日目の夜は大衆レストランで夕食を取り、その後旅館にチェックインした。部長、課長の二人は、これから本番と大張り切りで夜の街へと繰り出して行った。課員達は思い通りに自分の時間を過ごしていたが、典孝は初めて尽くしでさすがに疲れたので、直ぐに就寝した。二日目は自由行動だった。課長を含む一部

の課員はスキューバダイビングに出掛けた。残りの課員は水中観光船に乗ったり、観光スポットに遊びに行ったりして各々存分に沖縄を満喫した。その夜は旅館で夕食が出された。部長だけは、特別に個室があてがわれていたが、夕食は皆と一緒に取りたいという部長の希望で、わざわざ食膳を移動させた。課長は部長の隣りにピタリと寄り添って甲斐甲斐しく給仕した。夕食が終ってしばし談笑した後、部長は自室へと戻って行った。すると課長は、後はもう俺の天下だと言わんばかりに急に生き生きして、一人持ち時間五分で、かくし芸大会をやらうと言い出した。典孝には初めての経験であったが、後で聞いた話では課長と泊まりに行った際には恒例行事になっていたという事だった。人によってはオゲレツな方向に走る場合があり、それが女性の参加を遠ざける一因になっていたらしいかった。一番手に指名されたのは、新入社員の典孝

だった。余りに急な事だったし、かくし芸とは縁もゆかりもない人生を送ってきた典孝は狼狽して立ち尽くす事しか出来なかった。

「おい、佐藤。お前に急にかくし芸やれって言ってもおそらく無理だろうから、俺からリクエストを出してやる。お前、今この場でキークに電話しろ」

「えっ、今ですか？」

「今だよ。携帯持って来て今掛けろ」

「でも僕キークの携帯の番号知らないですよ」

「店に掛ければいいだろう。店の番号知らないかったら俺が教えてやる」

「でももう夜の九時ですよ」

「あの店は午後五時オープンなんだぞ。全然問題ないよ」

「でもキークも勤務中だろうし」

「でもでもも言ってるじゃねえよ！皆、聞いてくれ。前雑談中に話したこと有るけど、キークってのはこいつの高校時代の同級生なんだ

よ。『北斗』っていうパブで、フロアレディ  
ーとして働いてるんだ。キーコに会ってピン  
と来たんだ。佐藤にはこの女しかないっ  
て。はつきり言って容姿は平凡だけど、素直  
で気立てのいい子なんだよ。それで早速こい  
つを連れてって引き合わせたんだ。ただ、当  
然強制する事ではないし、後は当人同士の間  
題と見たからそのまま放置しておいた。  
で、ついこの前キーコとその後どうなったか  
確認したら、全く連絡取ってないと言うか  
ら、正直空振りしたと思ったよ。ところが、  
だ。昨日部長と飲みに行つて、深夜戻った時  
の事だ。皆が雑魚寝している間を慎重に行つ  
たつもりだったんだけど、間違つてこいつの  
足踏んじゃったんだよ。そしたらこいつが寝  
返り打つて、少し唸つたから、悪い、悪いっ  
て声を掛けたら、『うくん、キーコ、キー  
コ』だってさ。その言葉で俺は全てを悟つた  
よ。そして心底哀れな奴だと思つた。おい  
っ、佐藤！お前済ました顔して、キーコの事

なんか眼中にないふりしてるけど、本当は頭  
ん中キーコの事で一杯なんじゃないのか？会  
いたくてしようがないんじゃないのか？キー  
コを思ってた眠れない夜もあつたんじゃないの  
か？さあ、携帯持って来て今掛ける！」  
「でも皆の前だと・・・」  
「お前今までいつもそうやって、何かにつけ  
て屁理屈つけて、自分の気持ちに背を向けて  
来たんだろが！今出来る事を今やらなかった  
ら何時やるんだよ！時間が経てば経つ程、最  
初の一步は踏み出し難くなるんだ」  
「でも一体を話せばいいんですか？」  
「何かッコ付けてんだよ！好きなら好きって  
言え！会いたいなら会いたいって言え！不様  
でいい！みつとも無くていい！自分の正直な  
気持ちぶつけてみるよ！それが出来なかつ  
たら男じゃねえっ！金玉この場で切り捨て  
ろ！！」  
課長は常日頃から熱い男だったが、その時は  
更に輪を掛けて熱かった。課長の気迫に気圧

される形で、典孝は携帯を取り出した。場のムードからいって電話を掛けざるを得なかった。課長の言葉に共鳴する点は少なからずあったが、何しろ典孝は気が動転していた。自分の持ち時間、残り数分を何とか乗り切る事しか頭に無かった。情けない話だが、典孝は電話を掛けながら、キーコが不在である事を祈った。

「はい、北斗でございます」

電話は直ぐに繋がり、若い女性の声が聞こえた。

「日本情報サービスの佐藤と申します。夜分大変恐れ入りますが、高橋清子さんお願い出来ますでしょうか？」

「あれっ、ノリ君？あたしキーコですけど。なに畏まってるの。夜分恐れ入るも何も、この店夜しかやってないんですけど」

「あれっ、キーコ？居たの？」

「居たも何もあたしに用があって電話したんじゃないの？」

「いや、違うんだよ。まさか居ると思わなかったし」

キーコは三週間前と同じように接しているようだった。が、わずか三週間の間に典孝に取ってキーコは全く異質な存在になっていた。何度か電話を掛けようとした相手とあっさり電話が通じてしまい、拍子抜けしてしまったのと、愛しい人の声を漸く聞けた喜びと、皆の注目を一身に集めている緊張とで、典孝は完全に舞い上がっていた。

「実は今部長、課長達と一緒に沖縄さ来てんだ」

「沖縄？仕事で？」

「んー、社員旅行みたいなものかな」

「えーッ、社員旅行で沖縄なんて凄いな。さ

すが一流企業ね」

「まあね。誰かに自慢すつたくて、取り敢えずキーコさ電話したんだ」

「ちよーつと、ひどいんじゃない！でも沖縄かー。羨ましいなー」

「沖縄はいーよ。空は青く、海はエメラルドグリーンで」

「写真とかで見たこと有るけど、ホントにみんな感じなの？」

「あのまんまだずー。すんごいよ」

それから典孝は沖縄で見て回った事について、二、三掻い摘まんで話した。そのうちに気分も大分落ち着いて来た。ふと気付くと、課長が典孝を鬼の形相で睨みつけ、両手で前を押し動作を繰り返していた。典孝はそれを時間が押しているかと抗議しているものと解釈した。なるほど、持ち時間五分を裕に超過しているに違いない。

「キーコ、電話掛けといてごめん。課長が俺に急用があるみたいなんだよ。悪いけど切るから」

「えっ！旅行中に電話している部下に急用を申し付けるの？随分酷い上司よね」

「全くだず。困ったもんだ。俺からきつく言っとくよ。じゃ沖縄名物適当に見繕って送っ

てやっから」

「えっ、ホント？うれしいー！」

「店の方に送ればいいべ？キーコの住所知やねがらよ」

「うん、それで大丈夫。ホントに有難う。また店にも遊びに来てね」

「分がったっす。じゃあな」

典孝はそう言って電話を切った。僅か三分足らずの電話ではあったが、非常に爽やかな気分になった。あれほど躊躇していた事が、これほど簡単な事だったのだ。悩んでいた自分が馬鹿みたいだ。

「課長、時間をオーバーしちゃって申し訳ありませんでした。それから、なんか知らないけどキーコが課長のこと酷い上司だと憤慨してましたよ」

典孝が満面の微笑みで言うと、その場にいる全員がずっこけそうになった。課長は力尽きたようにしばしうなだれていたが、吹っ切れたように言った。

「まあいい。これが現時点のお前に出来る精一杯の事なのだろ。よし、次の奴いくぞ。」  
あつ、先に言っとくけどな、トリはこの俺が勤める。誰にも譲らねえ！時間も特別の十分  
粹だ。文句言う奴居たら張り倒すぞ、この野郎！  
「  
そんな感じで沖縄の熱い夜が更けていった。」

24・キーコの帰郷

課レクが終わって間もない頃、課長がいつになく真剣な口調で話し掛けて来た。

「佐藤、ちよつと喫煙室へ来てくれ」

いつもなら、もっと親しげに話し掛けて来るので、何かあったのかなと思いつつ、課長の後について喫煙室へ向かった。課長はタバコを取り出そうともせず、直ぐに話を切り出した。

「さっきブルーツリーのママから電話があつてさ、北斗のキーコが四日前から急に来なくなつたって言うんだよ。お前何か心当たりないか？」

「えーッ！キーコが四日前から？でも、キーコだったら、おとといメールを貰いましたけどね」

「何、おとといだと？そうすると、それはキーコが店に来なくなつたという日以降の話だな。佐藤、もう少し詳しく話を聞かせてくれ」

「この前課レクで沖縄行った時、沖縄名産品を適当に見繕って、キーコの店宛てに送ってやったんですよ。そしたら、おとといキーコからメールがあって、『沖縄土産どうもありがとう。事情があつて、お礼を言うのが遅れてごめんね。すごく美味しく頂いてます』つて書いてました」

「それだけか？」

「それだけです」

「そもそもお前、キーコとメールやり取りするような間柄なのか？」

「いや、メール貰ったのはそれが初めてです。会社の名刺は渡してあつたんで、それを見て寄越したんだと思います」

「店宛てに送ったものが、どうやってキーコに渡ったんだろう？ブルーツリーのママを紹介して話を聞いてるから、俺も良く事情を呑み込めてないんだ。北斗のマスターに直接聞いてみるか」

そしてその場で携帯を取り出し電話を掛けて

た。事実関係を確認して分かったのは、下記の通りである。

八月上旬のある日、何の前触れも無くキーコが無断欠席した。これまでそんな事は一度も無かったので、心配したマスターが電話やメールでなんとか連絡を付けようとしたが、全く付かなかった。翌日の午後、マスターはキーコのマンションを直接訪問した。その際、キーコ宛てに沖縄から荷物が届いていたので、それも持参した。しかし、幾らドアの呼び鈴を鳴らしても反応は無かった。郵便受に郵便が貯まっている様子は無く、電気メーターは通常に戻っているようだったので、マスターはキーコが在宅である可能性が高いと踏んだ。案の定、マンションの管理人に確認すると、昼少し前にジャージ姿でマンションの集合ポストを確認している姿を見掛けたという。おそらく、身体上の問題で店に来れなくなっただけではなく、精神上の問題と思われる

た。このような場合、心のドアを無理にこじ  
開けようとするのは返って逆効果で、むしろ  
意地になって心の殻の中に閉じこもってしま  
うだろう。それがマスターの予想だった。と  
にかく無事で居ることは分かったので、もう  
二、三日様子を見ようと考え、沖繩からの荷  
物だけドアのノブにぶら下げて帰って来た。  
しかし、それ以降もキーコは出店せず、四日  
間無断欠席が続いたため、ブルーツリーのマ  
マに相談したという事だった。  
事の次第を理解すると、課長が少し安心し  
たように言った。  
「いやー、俺も詳しい事情を今知ったよ。要  
するにキーコの心は鎖国状態にあって、唯一  
の長崎の出島的な存在が、佐藤、お前なんだ  
よ。佐藤、今直ぐキーコのマンションに行  
け！」  
「えっ、今ですか？」  
「今行かなかったら、何時行くんだよ！早退

していいから、早く行け！」

「でも、住所分かんないし」

「マンション名と部屋番号は教えてやる。後はインターネットで調べろ」

「でも、今居るか分かんないし、突然行けば迷惑だろうし・・・」

「つべこべ言わんと、早く行きやがれ！」

こうして、典孝はキーコのマンションに向かう事になった。インターネットでマンションの住所と最寄り駅を調査した。突然行っても迷惑だろうから、事の経緯を簡単に説明するメールも出しておいた。果たしてそのメールをキーコが見るか、そもそもマンション内に居るのか分からないような状態だった。

が、いかなる理由であれキーコに会いに行くと思うと胸が弾んだ。マンションの最寄り駅は、北斗のある駅から三駅先に行った所で、取り敢えずそこで降りた。後は場所がはっきりり分からなかったのでタクシーを使った。凡そ十分程度でマンションに到着した。それは

築二十年程度のやや古めのマンションで、キ  
ーコは三階建ての二階に住んでいた。玄関は  
オートロックではなく、誰でも自由に出入り  
出来た。玄関に入って直ぐ左手にある階段で  
二階へと上がった。いった。キーコの部屋の前  
に立つまでは、キーコのマンションに行けと  
いう上長命令を遂行する事に気が行っていた  
し、ちよいとした宝探しゲームのような感覚  
があった。しかし、いざドアの前に立って見  
ると、急に怖じ気づいてしまった。ドアも見  
た事だし、このまま引き返そうかと思つた。  
しかし、課長にどう報告すればいいのか？ド  
アだけ見て引き返しました、などと云おうが  
ものなら、百メートル位ぶっ飛ばされるかも  
しれない。取り敢えず一回だけ呼び鈴を鳴ら  
そう。そして、直ぐに退散しよう。情けない  
話だが、どうかキーコが居ませんようにと願  
いつつ呼び鈴を鳴らした。そして直ぐに踵を  
返して引き返そうとした。その時、部屋の中  
から

「はい」

と言う声が聞こえた。やばい、キーコの奴居やがるんだ。ピンポンダッシュで逃げようか？しかし、何故？理由は無かった。ドアが少し空いて、キーコが顔を覗かせた。

「なんだ、キーコ居たのか？」

「居るもなにも、ここあたしの部屋なんだけど」

「いや、まさか居ると思わなかったんだよ」

「あたしに会いに来てくれたんじゃない」

「あ、メール見た？メールなんか見ないと思つたんだよ」

「ノリ君ってホントに変わったね。昔はそんな天然キャラじゃ無かったけどね。あが

る？」

「お邪魔します！」

典孝は、予想以上に上手く事が進んだので、すっかり気を良くして言った。実は典孝は女性の部屋に入るのは初めてだった。キーコは

必要最低限のものしか置かない主義なのか、  
極めてシンプルな部屋だった。リビングにあ  
るのはソファ、小型テーブル、テレビ台程  
度で、肝心のテレビは無かった。それを不審  
に感じたので、まず最初に  
「キーコってテレビ持ってないんだね」  
と話し掛けた。振り返ったキーコを見て、典  
孝はビックリした。明るい日差しの下、間近  
にキーコを見ると、髪はボサボサ、非常に顔  
色が悪く、憔悴しきった表情だったのだ。キ  
ーコはジャージ姿だったが、着ているジャ  
ージもよれよれだった。  
「キーコ何したの？具合悪いのが？」  
「うん・・・。凄く辛い事が有ってね。昨日  
から水しか飲んでないし。ノリ君、取り敢え  
ずソファに座って。何か出したいけど、今  
何にも無くてね」  
「かまねでける。そんな長居もすねがら」  
そう言いつつソファに座ると、やはりテレ  
ビ台の上にテレビが無い事が非常に奇妙に写

った。

「テレビは修理中か？」

「うん・・・。実はね、盗られちゃったの。」

「盗られた！？盗まったという事か？」

「早い話がね。」

そして、典孝の隣に座ると、キーコは何が起こったかをポツリポツリ話し始めた。キーコの話はこうだ。

典孝から沖縄土産を送るといふ電話を貰った二日後の事だ。店の仕事が終わってマンションに戻る時、キーコの部屋のドアの前で床にうずくまっている男がいた。一目見て、それが以前付き合っていた男と分かった。声を掛けると直ぐに気付いてキーコを認めると、即座にその場で土下座した。男が涙ながらに語って曰く、

「同棲していた女とは別れた。一人になって考えると、自分に取って高橋さんが如何に大切な存在であったか身に染みて分かるように

なつた。自分は本当に高橋さんに失礼な事をした。今更どのツラ下げて会いに行けばいいか分からなかつたが、せめて別れ際に奪い取つてしまつた二万円と、ずっと借りたままだつた合鍵を返そうと思つて、恥を忍んで会いに来た」

男の遜つた話しぶりを聞いて、キークは余りの豹変ぶりに驚愕した。彼と会うのは八ヶ月ぶりだつたが、こんな短期間で人間の人格が変わるのかと半信半疑だつた。しかし、合鍵を持つてゐるにも関わらず部屋に入らず待つていた事、二万円を返却しに来たという事に関して、男の誠意を感じた。男は、大變申し訳ないが、始発の時間まで玄関口の所でいいから横になつて仮眠を取らせてくれないか、と言つた。キークは玄関口なんて仮眠も何も出来ないから、ソファ―で横になつていいと答えた。男はやたら恐縮して、始発で必ず帰る、施錠した後、これまで借りていた合鍵はポストの中に入れて置くと言つた。そして

てキーコに二万円を渡し、ソファーに横にな  
ると直ぐに寝てしまった。余程疲れてたんだ  
な、と思つてそのままにして置いた。既に男  
その翌朝だ。キーコが目覚めると、既に男  
の姿は無かつた。それについては男が言つて  
いた通りだったので何とも思わなかつたが、  
ソファーの前のテレビが無くなつていた。最  
初は何かの見間違いかと思つたが、それは厳  
然たる事実だつた。あつと思つて部屋の内部  
を急いで確認した。いつも使つているハンド  
バッグが無かつた。財布が無かつた。預金通  
帳が無かつた。貴重品という貴重品がことご  
とく無くなつていたので。携帯はいつも枕元  
に置いて寝ていたので、それだけは無事だつ  
た。キーコは茫然と立ち尽くすしかなかつ  
た。元々その男について知っているのは名前と  
携帯番号程度だつた。その名前は本名かどう  
か分からなかつし、携帯番号は既に変更され  
ていた。住所も曖昧にしか聞いてなかつた。

要するに、キーコは素性不詳の男を自宅に招き入れて、全財産をもぎ取られたのだった。

典孝は話を聞いて、余りの馬鹿馬鹿しさに呆れ果ててしまった。自分が恋い焦がれていた女はこれ程愚かな女だったのか。そう言えば、高校時代に国語の両面印刷のテストを片面と信じ切つて解答したというエピソードがあつた。今回も男の表の顔を信じ切つて、裏の顔を見抜けなかつたという事か。

「キーコ、警察さは届けたんだべな？」

キーコは黙つて首を振つた。

「なして！？泣き寝入りするつもりか？」

「元々ここに有つたテレビつて、去年の十二月に彼がお金半分出してやるから、大型液晶テレビ買おうつて言い出して、彼が何処からか買って来たの。領収書も保証書も彼が持つてる。あたしも半分お金は出してるけど、そういう場合つて所有権つてどうなるのかしら？テレビを買つて直ぐ彼と別れちゃつたか

ら、彼も心残りだったんでしょうね。この部屋で一番価値が高かったのがそのテレビ。後は貯金といっても三万円位だしね。彼からは何だかんだ言っていてそれ以上おごって貰ってるから、まあいいか、とか思っています」

「良くないよ。れっきとした窃盗事件だべ？」

「でも不法侵入ではないのよね。あれこれ考えるうちに、もう何もかも面倒になっちゃつて。どうでもよくなっちゃつて。何にもやる気になれなくて」

「おととい北斗のマスターがここさ来たのは気付いた？」

「後から気付いた。誰か来た事は分かったけど、面倒だったから居留守を使ったの。ドアのノブの所、ガサゴソ音がしてたから、何だろうとと思って後から覗いて見たら、ノリ君からあたし宛ての荷物がぶら下がってた。北斗で働くようになってから、いつも外食ばっかりで、家には殆ど食べ物置いてなかったの。

お財布取られちゃうと何にも食べれなくて  
ね。だから、ノリ君からの沖縄土産は涙が出  
る位嬉しかった。一日で無くなっちゃった。  
電話もメールも全部無視してたけど、ノリ君  
にはお礼言わなきゃと思ってメールしたの  
「お礼なんかいいんだよ。キークが突然来な  
くなっただというんで、周りの皆は大騒ぎだ  
よ。これから一体どうするつもりや？」  
「何にも考えてない。もう何もかも嫌になっ  
た。どうにでもなれちゃって感じ」  
キークは自暴自棄になってるようだった。  
「キーク、腹減ってんじゃないのか？」  
「もうペコペコ。昨日から水しか飲んでない  
し」  
典孝は考えた。食欲があるという事は、それ  
程致命的ではないようだ。話をしても、  
自嘲気味ではあるが、それは自分を自嘲出来  
る余裕の表れとも言える。空腹感が癒されれ  
ば、大分落ち着きを取り戻すだろう。また、  
俺を自宅に招き入れて事情を話したのは、俺

なら自分の支えとなってくれと心の何処かで期待しているのだろう。

「ちよっと待っててけろ。コンビニ寄って来る」

典孝はそう言って、近場にあるコンビニに向かった。そして、食料品を適当に見繕って購入した。その後少し迷ったが、コンビニ内のATMで十万円降ろした。お金を降ろしながら、典孝はしみじみと思った。キーコから言われた通り、俺も大分変わった。以前ならこんな事は間違ってもしなかった。やはり、大学院に落ちた時に親父に言われた言葉が、脳裏から離れない。

『もし、お前の友達や知り合いが、どうしても、どうしても困ってお前にすがってきたら、出来る範囲で構わね。支えてやれ！』

俺はこれまで完全に個人主義を貫いて来た。人に迷惑を掛けるのは大嫌いだったが、迷惑を被るのも断固として拒否して来た。従来自分だったなら、このようなケースは一切関わ

り合いを持つまいとしただろう。『愚かな女』という一言の下にキークを切り捨てようとしただろう。しかし、じゃ俺は利口なのか？ よしんばキークが愚かだとしても、その愚かな女に恋い焦がれていた俺はより愚かと言えるのではないか？ 俺にキークを見下す資格はない。キークを支えてやろう。ここ一ヶ月の間、俺が一番大切に想ってきた人の為に、今してあげられる全てをしてあげよう。信じて、信じ切つて騙された女、キーク。そして今、俺は失意のどん底にいるキークに救いの手を差し伸べようとしている。やはり、親父の言う通りなのだ。人間というのは、支え、支えられて生きているのだ。マンションに戻って、食料をキークに手渡すと、キークは泣いて喜んで礼を言い、無心に食べた。空腹が癒されると、予想通りキークは大分落ち着きを取り戻した。それを見て、典孝は自分の考えを述べ始めた。典孝の話の主旨は下記の5点だ。

① 今回の件はれっきとした窃盗事件であるから、警察に届けた方がいい。

② 個人的な意見としては、フロアレイダーとしての仕事はキーコに向いていないような気がする。

③ 色々事情があるかとは思いますが、現在の仕事内容を両親に隠しているのは良くない。キーコの事を一番に考えてくれているのやはり両親のはずだ。今回の件はキーコにとって非常に不幸な出来事ではあったが、一つのきっかけと捉える事も出来る。一度実家に帰ってこれまでの経緯を正直に話し、今後の事を相談したらどうか。

④ 現実問題として、金が無ければ身動き出来ない。当面の費用として、十万円貸すからこれを使ってくれていい。お金は返せるようにになった時点で返してくれればいい。

⑤ 今回キーコが受けた精神的苦痛は計り知れないが、北斗のマスターやブルーツリーのマ

マを始め、周囲の人にどれ程の迷惑と心配を掛けたか分からない。それについては、一社人として、きちんとお詫びしなければならぬ。

キーコは神妙な面持ちで黙って聞いていた。典孝は立ち上がると言った。

「よし、キーコ。今から北斗さ行ってマスタ―に謝罪するぞ」

「えっ？今から？」

「都合悪いか？」

「悪くはないけど、あんまり急だから」

「キーコ、今出来る事を今やらなかったら何時やるんだよ！時間が経てば経つ程、最初の

一歩は踏み出し難くなるんだ」

「でも今回の件はあんまり話したくないな」

「当然キーコにもプライバシーは有るから、都合の悪い事ば話す必要はないべ。ただ、嘘

をつくのは良くないし、いつかばれてしま

う。嘘のない範囲内で、差し障りのない事を

言えればいいんだ。心配掛けてしまった事を謝罪する事が目的なんだから。その格好でいい。直ぐ行くぞ」

「ちよっ、ちよっと待って。せめて最低限の身繕いはさせて。三十分位待ってくれる？」

「分かった。その間に俺は外で、北斗のマスターとブルーツリーのママに電話連絡しとくよ」

その後、典孝、キーコ、マスター、ママの四者で話し合いが持たれた。典孝から事の経緯を説明した。ただ、キーコのプライバシーを考え、男に振られたショックで寝込んだ、という表現を取った。キーコは、生活の為、やむなくこの仕事を始めたが、お酒は飲めないし、酒の席で不快な思いをする事が多く、仕事辛いと言った。結局、一度実家に帰って今後の事を両親に相談したらどうか、という典孝の意見にマスター、ママとも賛成してくれた。二人ともキーコが両親に内緒でこの

仕事をしていている事を知らなかったが、別にそれは珍しくないという話だった。ママの世話した人の中には、既婚者であるにも関わらず、夫には内緒で、かつ独身と偽って働いていた人が数名居たという。ママはこれまで何人も世話しているが、皆それぞれ事情を抱えているので、本人が自ら言わない限りは、プライベートな問題に極力口を挟まないようにしているという話だった。

いざ帰ると決まるとキーコは矢も盾も堪らなくなつたのだらう。その翌日に山形へと帰って行った。その後、直ぐにキーコから現金書留が届いた。中には貸した十万円と手紙が入っていた。その手紙には、両親にこれまで経緯を包み隠さず話した事、こつぴどく怒られた事、警察沙汰になれば恥の上塗りになるだけなので、警察には届けるなど言われた事、直ぐに東京のマンションを解約して実家に戻るように言われた事、当面家に居候させて貰う替わりに、家の仕事を手伝うようにな

った事が書かれていた。その現金書留とは別に、ご両親の連盟で書かれた手紙と、見るからに高級そうな万年筆が送られて来た。それだけで十万以上の価値があるように思われた。手紙には娘の窮地を助けて頂いた事の御礼と、娘が病院の事務を手伝うようになった事、娘はこれからの身なので、出来れば夜の仕事をしていた事は内密に願えないかという意味の事が書かれていた。こうして、典孝は自らの判断でキーコと中々会えない状況を作ってしまったが、現時点で最善の事をしたと自己評価していたので、後悔はしなかった。

子供二人が自立し、親父はもう自分の生活費さえ稼げばいい事になり、人生の一区切りが付いた格好となった。これまでがむしやらに生き抜いて来て、張り詰めていた糸がぷつぷつり切れてしまったような所が多少あるように見えた。

「最近なんか知んねーけど死んだおっ母の夢、良く見るなー」

典孝が就職して五ヶ月経過し、九月を迎えた頃から、親父が孝一に良くこぼすようになった。

「お迎えが近いということか」

と冗談めかして親父が言うと、

「縁起でもねえこと言ってるなぞ！」

孝一が親父に対して珍しく怒った調子で言った。それは孝一には冗談には聞こえなかったのだ。ここ最近、親父が腹を抱えたまま床にしゃがみ込む姿を良く見掛けるようになったのだ。以前から稀に有ったが、一日一度は見

掛けるようになった。黙ってじっとしているが、苦渋に顔を歪める場合も有った。弱音を吐いた事の無い芯の強い人だから、これは余程の事だろうと思われた。堪らず

「親父、腹いったいのが？」

と聞くと、

「大丈夫だ。ほっとけ」

と親父はいつも素っ気なく答えた。同じ事が何度か繰り返された。医者に行く事をしきりに進めても、頑として聞かなかつた。

「医者なて信用できつか！うちのおっ母の時だつて、胃癌なのに慢性胃炎と誤診しやがつたんだ。しかも医療ミスを絶対に認めねんだよ。俺はその時、二度と医者の世話にはななんてりとも医者には行ってね！」

どうも二十年前の妻の死を未だに引きずっているようだった。

次第に親父は食が細くなり、痩せて行つた。元々がたいが良いい方で、本人もメタボ気

味と言っていた位だから暫く様子を見ていたが、顔色が変にドス黒くなり、口臭も徐々にきつくなつて、胃が腐つたような臭いがし出すと、孝一は気が気でなくなつて来た。騙してでも親父を医者に連れて行く手立ては無いのかも、あれこれ考えていると夜もおちおち寝ていられないようになった。ある真夜中、悶々として夜目が覚めて、便所で用を足して部屋に戻る途中、親父の部屋から何やらうめき声のような声が聞こえて来た。何だ、親父ひよつとして起きてんのかと、思つて襖を少し開けて中を覗いて見たが、暗くて良く見えなかつた。暫くじつとしていたが、親父の寢息以外特に何も聞こえ無かつたので、気のせいかなと思つて襖を閉めようとした。丁度その時だ。親父がまた唸り始めた。「うう。腹いて、苦しい。苦しいよ。おっ母、助けてしろ。おっ母、助けてしろ。」

孝一は全身に一気に冷水をぶっかけられた気が

分になつた。見てはいけない親父の姿を見てしまつた、と思つた。孝一は襖を開けたまま一目散に寢床に戻ると、布団を頭から被つた。親父が結構前から胃の痛みに苦しみ、それをずっと我慢して来た事は分かつていた。しかし、親父の口から苦しいと聞いたのは今が初めてだつた。それはそれでショックではあつたが、それ以上に衝撃を受けたのは、一心に助けを請い、すがろうとする親父の姿だつた。俺は二十九年間親父と付き合つて来た。弱音を吐くのを聞いた事はこれまで唯の一度も無かつた。おつ母は俺が九歳の時に死んだ。その時の事は幼心の中にも良く覚えているが、親父は淡々としたものだつた。絶対弱音を吐かない芯の強い人。俺はずっと親父をそう評価して来た。しかし、果たして本当にそうなのか？否、そうじゃない。今はつきりと悟つた。俺は一体親父の何を見て来たのか。親父の事を全く理解していなかったのだ。親父として赤い血の通つた生身の人間なん

だ。そんなに強いはずないじゃないか。幼い子供二人残してお母が死んだ時、親父はどんなに落胆しただろう。人生に絶望して何もかも投げ出したかったに違いない。しかし、親父も小さい頃自分の父親を亡くしている。自分が味わったような寂しい想いを子供に味わせて堪っかと思つて、自分の気持ちを押し殺して、平静を装つて来たんじゃないか。歯を食いしばつて、強がつて生きて来たんじゃないか。

『偽強』――――

そんな言葉は無いだろう。しかし、人の為す強がりという意味で敢えてそう呼びたい。人が為すと書いて『偽り』と名付けたのは誰なのだろう？嘘と偽りは同意義に見做される事が多いが、言葉から受ける印象は異なる。

『嘘』という言葉には、口から出任せのような無責任な印象を受けるが、『偽り』という言葉には、人間のやむない業のようなものを感じる。人は皆、偽強を為している。そう言

つてもあながち間違いではないだろう。見栄もある。立場もある。プライドもある。この俺のズルムケなんか偽強の最たるものだ。新聞屋の親父のサングラスだってそうじゃねえか。サングラスが外れた時の弱々しさは今でも忘れられない。偽強せざるを得ない場合だってある。『おっ母はちよつと遠くに旅行に行っている』親父がそんな態度を貫いてくれたからこそ、おっ母が居なくても、それ程寂しさを感じずに済んだのだ。もし、親父が狼狽して右往左往していたら、どれ程心細かったろう。

人が生きて行く上で、自らの弱さをさらけ出すのはなんと難しい事か。弱さをさらけさせる人がなんと貴重な事か。親父にとってそれはおっ母だけだったに違いない。そして俺にとつてそれは親父だけだった。高校を辞める時、俺は泣きながら親父に相談した。それは典孝も知らない事だ。親父はいつになく、厳格にこう言った。

「自分の事は自分で決める。そして、自分が決めた事には自分で責任を取れ！ どうしても、どうしてもしても我慢出来なくなった時だけ、家さ帰って来て泣け！」

その一言にどれだけ救われただろう。そういう親父の精神的な支えが有ったからこそ、今の自分が有るのだ。ああ、俺の大好きな大好きな親父。おっ母、神様、仏様。どうか親父ば助けてやってける。助けてやってける。助けてやってける。せめてあの痛みば消してやってけるお——ッ！

26・それぞれの土下座  
朝七時、寮の自室でテレビニュースを見て  
いると携帯が鳴った。誰だ、こんな朝っぱら  
からと思つて携帯を見てみると、それは兄貴  
からだつた。  
「もしもし、兄貴？ 何したの、こだい早く」  
「ノリ、頼む、助けてしろ」  
「んだがら何したんだぞ」  
「親父の事なんだぞ。俺の力ではもうどうに  
も出来ねんだぞ」  
兄貴が咳切つたようにあれこれ説明し始め  
た。その説明は極めて理路不整然として分か  
りづらかつたが、質問を織り交ぜながら何回  
か聞いて、典孝は漸く事情が飲み込めて来  
た。  
「なしてそだいなるまでほっとくんだぞ。親  
父の首根っこ捕まえて、医者さ連れでげず」  
「・・・出来ねんだぞ。俺よりノリが言っ  
た方が説得力あんのんねが？ お前の方から言  
つてくんねが？」

「何情けねえこと言っただず！そだなごど  
言ってる場合じゃねえべ」  
喋りながら典孝は素早く考えた。こんな早朝  
に兄貴が慌てて電話を寄越した所を見ると、  
事態はかなり深刻なようだ。親父は片意地に  
なる所があるから、例え自分が説得しても無  
駄であろう。親父が医者に行かないのであれ  
ば、医者に来てもらうしかない。しかしただ  
でさえ医者との関係が希薄な中、往診に応じ  
てくれそうな医者は心当たりが無かった。待  
てよ・・・。典孝は突然閃いた。そうだ、キ  
ーコだ。キーコの父親は開業医なのだ。  
「分がった。兄貴、とにかく俺今日会社休ん  
で帰っから」  
「ほんでん？助かつつ。頼む、そうしてけ  
ろ」  
「じゃ、色々下準備があっから一旦電話切っ  
から」  
そう言っつて、典孝は携帯を切った。高橋病院  
の専門が何科なのか知らないし、往診に応じ

てくれるか分からなかった。典孝の薦めでキ  
ーコが山形に帰ったのは一ヶ月前の八月の事  
だ。その時キーコから貰った手紙に携帯番号  
が書いてあったから電話で確認できない事は  
無かったが、あまりに早朝なのでさすがに憚  
れた。会社を休む事について工藤課長には何  
の連絡もしていなかったが、見切り発車的に  
典孝は直ぐに山形に向かう事にした。典孝は  
基本的に仕事を最優先にするタイプだった  
が、こと親父が関わることになれば話は別だ  
った。典孝は親父がこれまでどれだけ自分に  
注力して来てくれたかを身に染む程分かって  
いた。社会人になって漸く少しずつ恩返しが  
出来るようになったのだ。親父には当分の間  
健在でいて貰わなければならなかった。  
山形に着いたのは十一時半頃だった。典孝  
はまず兄貴に今着いた事をメールした。兄貴  
は今頃中華屋が開店した直後で、時間に追わ  
れて作業しているだろう、そう考えて敢えて  
電話はしなかった。次にキーコの携帯に電話

してみた。十数秒待って留守電に切り替ったので、直ぐに電話を切った。念のため二、三分後再度かけてみたが結果は一緒だった。次に、キーコの実家に電話してみた。今度は直ぐに繋がりに、キーコの母親と思しき中年女性が電話に出た。

「はい、高橋でございます」

キーコの母親と話す事になるとは想定していなかったもので、典孝はすっかり舞い上がってしまった。

「あ、あの、すみません。先日は非常に高価な物を送って頂いて、有難うございました」

「えっ？失礼ですがどちら様でしょうか？」

「あ、すみません。あ、あの、僕佐藤と申します。先日は非常に高価な万年筆を有難うございました」

「えっ？佐藤さん？佐藤さんってあの佐藤さんですか？」

「はい、おそらくその可能性は高いと思います」

「まあ！どうしましよっ！先日は娘が一方ならぬお世話になりました。誠に有難うございました。傍に居てくれてホントに良かったです。命の恩人と言つても過言ではありませんわ。でもまあ、世間知らずの田舎娘が都会で一人暮らしだなんて心配でしよすがなかつたんです。主人に何度相談しても、『お前は心配し過ぎだ。あいつももう大人だから、自己責任でちゃんと対応できる』その一点張りなんですもの。あの娘に聞いても『大丈夫。ちゃんとやってるから』としか言わなくて。それがいざ蓋を開けて見ればこの有様ですよ。もう情けなくて情けなくて」

「こんな調子の一方的な会話が暫く続いた。最初のうちは、はあ、はあ聞いていた典孝も、そのうち苛立って来た。気持ちには分かるが、今日電話したのはその件ではないのだ。相手の話には無理に割り込む形で典孝は話し出した。

「申し訳ありません。今日は折り入ってお願いがあつてお電話しました」

「あら！ まあ！ なんてでしょう？ なんとおっしゃつて下さい」

そこで、典孝は事の経緯を手短に説明した。そして、誠に頼み難い事であるが、高橋先生に往診に来て頂く事は出来ないか、と依頼した。

「まあ、それは大変ですわね。なんとかお力添えしたいんですけど、うちは往診はやっていませんから、往診器具が揃ってませんのでねえ。やはりちゃんと検査するんだったら病院に来て頂かないとね。でも長いこと医師をやつていますし、内科が専門ですから、本人の口から自覚症状を聞いて、脈とか呼吸、顔色等を見れば、ある程度見当は付くかもしれません。それと、どういう検査を受けるべきかをアドバイスする事は出来ると思います」

「それでいいんですよ。こちらは皆医学に關してはズブの素人ですから、なんとか父に検

査を受けるように説得して頂けませんか？それ  
れに、素人の兄が見て父の体調の変化に気付  
いた位ですから、専門家が診ればより明確に  
分かると思います。父も医者相手であれば、  
自分の症状を正直に話すのではないかと思い  
ます」

「分かりました。では、午前の診察が終わり  
ましたら、主人に話して見ますから、ちよっ  
とお持ち頂いていいかしら。それと、娘の事  
で直接お会いしてお聞きしたい事も有ります  
ので、これからこちらに来て頂いていいかし  
ら」

「はい、分かりました。高橋病院なら僕場所  
が分かりますので。ご自宅は直ぐ隣ですよ  
ね？」

「そうです。ご足労ですが、宜しく願いま  
す」

高橋病院は山形駅から徒歩で三十分程度の所  
で、歩いていけない事はなかったが、タクシ  
ーで高橋病院に向かった。タクシ―の運転手

に高橋病院と告げると直ぐに通じて、十分程  
度で到着した。高橋病院はここ近辺ではかな  
り名の知れた病院で、隣接する自宅も豪邸と  
言っていて良かった。立派な門のインターフォン  
を押すと家政婦らしき女性が出て来て、応接  
間へと通された。そもそも家政婦のいるよう  
な家に入るのは生まれて初めてであった。高  
校時代はそれ程意識しなかったが、キーコは  
かなり裕福な家庭で育ったのだなとしみじみ  
思った。暫くして、高橋夫婦が揃って応接間  
に現れた。高橋先生はたった今白衣のみ脱い  
で来ました、というようないでたちで、高橋  
夫人の方は普段からそうなのか、着物姿であ  
った。典孝はキーコも一緒に連れ立って来る  
事を内心期待していたが、キーコは姿を現さ  
なかつたので、多少気落ちしてしまった。最  
初に夫人の方から丁寧なお礼があり、その後  
電話と同様に愚痴めいた事を暫く言った。高  
橋夫人は山形弁を一切使わなかった。考えて  
見れば、キーコも一切使わない。医者の家系

という事から、自然にそうなるのかもしれない。最後に

「それからこれは誠に申し上げ憎い事なんですけど・・・」

そう言つて、ちらりと自分の夫を見た。高橋先生は小さく頷いて話を引き継いだ。

「典孝君、清子が夜の店で働いていた事や、素性の知れない男と付き合つたり、窃盗被害に遭つた事は、出来れば口外しないで欲しいんだ。私がここで高橋病院を開院して二十年経つ。手前みそになるが、高橋病院と云えばここら一帯ではかなり名の知れた病院なんだ。若気の至りとはいえ、今回のような件が明るみに出れば恥さらしい所だからね。

清子は未だ嫁入り前の娘だしね」

「その件については、お手紙でも読みました。僕は一切口外するつもりはありません。ただ、清子さんとしてもご両親に出来るだけ心配を掛けまいとして、色々考えた末決断した事だと思ふので、間違つた事をしたとバツ

サリ切り捨てる事は出来ないと思います」

典孝の意見に我が意を得たり、といった面持ちで高橋先生が言った。

「ん。こんな素晴らしい同級生が傍に居ながら、清子はなんでくだらん男に引っ掛かってしまったんだろうな、母さん？」

「本当ですよ、お父さん」

高橋夫婦は互いを見て頷き合った。お世辞もあるだろうが、高橋夫婦の言葉には実感が籠っていた。

「前置きが長くなって申し訳ない。本題に入ろう。典孝君、君の知っている限りで構わないから、お父さんの症状を話してくれないか？」

典孝は本人を直接見た訳ではないが、兄貴から聞いた範囲内で、出来る限り正確に親父の病状を高橋先生に伝えた。話を聞いて、高橋先生は腕を組んで考え込んでしまった。

「んー。芳しくないね。話を聞いていると、君のお父さんは結構前から自覚症状があった

にも関わらず、それを騙し騙しやって来たようだ。症状が外見上顕著に現れ出したという事は、かなり病気が進行していると見なければならぬ。一度うちに来て医学的な精密検査を受けて頂かないと、はつきりした事は言えないな」

「奥様の話では長いこと医師をやっているので、本人の口から自覚症状を聞いて、脈とか呼吸、顔色等を見れば、ある程度見当は付く」という事でしたが

「まあある程度の見当が付かぬ事はないが、医者である以上医学的な裏付け無しに、憶測で物を言う事は出来ないんだよ。トラブルの元だからね」

「先生の方から父に検査を受けるよう説得するのは困難でしょうか？」

「んー。はつきりした事は言えないな。まず会うだけ会って見よう。娘の恩人の父親だからね。だけどその後の事は『神のみぞ知る』だ。余り期待しないでくれ。第一大の医者嫌

いと、という話だろ？ 初対面の私が行って検査を受ける事を薦めた所で、それに応じてくれるとは考えづらいね。もしかすると面会する事すら拒絶されるかもしれない。やはり一番の基盤になるのは医者と患者の信頼関係だからね。ある程度時間をかけて信頼を得てからでない、と、説得するのは難しいだろうな。仮に検査を受けた所で、それで病状が良くなる訳ではないしねー

高橋先生は医師としての習性なのか、極めて慎重な言い回しをした。その後、既に頼んであったという出前の寿司が届けられ、典孝は滅多に口にする事の出来ない特上の寿司をご馳走になった。しかし、典孝はこれからの事で頭が一杯で、殆ど味が分からなかった。高橋病院の診察が終わるのが午後六時で、七時以降であれば体が空くという事だったので、その頃迎えに来ると伝えて、典孝は高橋病院を後にした。携帯で時刻を見ると、一時半を少し回っていた。兄貴が非常に忙しい時間帯

だったの、連絡は付けられなかった。突然家に帰る訳にもいかないので、親父に電話連絡する必要があった。電話でどう伝えるべきか迷った。親父は携帯を持たず、メールも一切しなかった。こんな時にメールを使えたらな、と恨めしく思った。もう長いこと同じ電話機を使用しており、ナンバーディスプレイや留守電の対応すらしていなかった。電話を掛けると直ぐに繋がった。商売柄直ぐ電話に出るようにはしているのだ。

「もしもし、親父。俺だす」

「おお、ノリか。どうした？」

親父の声の調子を聞く限り以前と変わらなかったの、少し安心した。

「親父。実は今、俺山形さ来たんだ」

「山形さ？なして？また社員旅行か？」

「んねんだ。詳しい事は帰ってから話すよ。これから帰っからな」

「んだが。構ねよ」

電話を切って、声の調子と同様に親父が変わ

つていない事を切に願った。しかし、その期待は見事に裏切られた。「親父、何したの？そだい痩せて！」親父を一目見て発した第一声がそれだった。元々がたいが良方だったから、痩せこけたという印象ではないが、半年前と比べて十キロは痩せただろう。単に痩せただけだった。ら、これ程驚きはしなかった。皺が深く刻まれてかなり目立つようになり、顔色も変にドス黒かった。総じてここ半年で五、六歳年を取ったような印象を受けた。仕事振りは従来通りだったが、親父の体に異変が起こったのはまず間違いなかった。わずか半年で人間はここまで変わるものなのか。確かに大学時代に帰省した折、腹を抱えたままうずくまる親父の姿を二、三回見掛けた事が有った。声を掛けると直ぐに立ち上がり、何事も無かったように振る舞うので、特に気にしなかったのだ。こんな事なら、その時点で親父の首根っこを掴んででも医者に連れて行けば良かった。

た。ああ、もしタイムマシンが有るならば。神様。俺は今まで神頼みなんてした事は有りません。独力で全てを解決して来ました。もし、人生に一度だけ望みを叶えてくれるといふのであれば、今叶えて頂けないでしょう。茫然と立ち尽くす典孝に、親父はこう切り返した。最近メタボ気味だったから、今はやりのダイエットしただけさ。そだな所突っ立ってね、二階さ上がって一休みしてろ」

「言われるがまま二階へ向かおうとしたが、内心は今夜の高橋先生の訪問をどう切り出せばいいか思い悩んでいた。嫌な事は後回しにしようかとも思ったが、最初に言っておかないと後々切り出し難くなると分かっていたから、思い切ってこう言った。

「親父、実は今夜親父さ会って欲しい人居るんだ」

「今夜？俺にか・・・」

親父は狐につままれたような不思議そうな顔をしながら、突然声を荒らげた。

「お前、まさか女か？」

典孝は一瞬でも親父を勘違いさせるような言い回しをしてしまった事を悔いた。

「んねんだ。親父、高橋病院って知ってっぺ？あそこの院長先生だ」

親父は更に大声を張り上げた。

「高橋先生！？なして高橋先生が家さ来んのや？」

「親父、高橋先生と面識あんだっけ？」

「あるはずねーべ。んでも高橋病院の高橋先生つつたら有名だもの。お前、高橋先生の娘さんと同級生だっけべ？」

「んだっす」

ここにきて、典孝はどのように親父に説明すべきか素早く思い巡らせた。親父は回りくどい説明を好まない。出来るだけ簡潔に、分かり易く説明する必要があった。もうウダウダ言っている猶予は無い。典孝は腹を括った。

俺は人に頭を下げるのが嫌いだ。人一倍プライドが高いし、自分が出る事は全て自分で対応した。人に何かを依頼する、ということ自体が稀だった。しかし今、親父の為だったから見栄もプライドも全てかなぐり捨てよう。典孝はその場に土下座した。

「頼む、親父。高橋先生さ会ってやってける。診察受けると言っているんじゃないか。だ。医者立場からアドバイスか何か貰えたら、親父の体調も少し良くなるがもすんねべ？兄貴も俺も親父の事ば心配で心配で堪んねんだ。頼む、この通りだ。高橋先生さ会ってやってける」

典孝は深々と頭を下げて言った。

「ノリ、何も土下座なてすつことね。あの高橋先生にわざわざご足労頂いて、門前払いです。はずねえべ？しかし良くまあ、こだな狭苦しい所さ来っこだな・・・」

親父は独り言のように言うと、

「こうしちやおれん。高橋先生に何かご馳走

してやんねどな」  
そう言つて、外へ飛び出して行った。  
兄貴が車で高橋先生を迎えに行き、七時を  
少し過ぎた時刻に家に到着した。既に座卓に  
は先生用のご馳走が所狭しと並べられている  
状態で、親父は食事をしながら話しましよ  
と切り出したが、先生の希望で食事は後回し  
で、最初は話だけをやる事になった。親父は  
自宅に居るにも関わらず、かなり居心地が悪  
そうで、緊張した面持ちだった。しかし先生  
は手慣れたもので、親父の興味がありそうな  
分野を探つて、色々な話をした。二人が同世  
代で、同じ郷土という事も有り、話題に事欠  
くことは無かった。多少打ち解けて来た頃合  
いを見計らつて、先生がさりげなく親父の体  
調の事を聞き出そうとした。しかし、話が  
ざそこに及ぶと、親父は貝のように固く口を  
閉ざしてしまふのだった。そうこうする内に  
話はおつ母の事に及んだ。親父はおつ母のこ

とはすらすら喋った。大きな公立病院で診察を受けたが、担当医がお母の病気を本来は胃癌なのに慢性胃炎と誤診した事、暫く様子を見ましようという言葉を受けない通りにしたら、癌がかなり進行してしまった事、治療ミスを絶対に認めない事、それ以来医者という医者は皆大嫌いになった事を話した。先生は親父の話を興味深く聞いていた。が、やがて自らも口を開いた。「佐藤さん、私も医者をして三十年やっています。常に最善の治療をする事を心掛けていますが、後々考えるとむしろあすべきだったのではないか、と思う事が少なからず有るんです。実は私の治療が適切では無かったと裁判沙汰になりかかった事が数回あります。結局は全て示談が成立しましたが。一般的に効用が認められていている薬でも、患者さんの体調や体質によって毒になる場合もあります。全く異なる病気が、外側から見ると全く同じ症状を見せる場合だってあります。医療という

のは難しいんです。医療ミスを犯しながら、それを絶対に認めないというのは決して許されませんが、私にはその医師の気持ち痛い程良く分かります。特に大きな公立病院の場合、問題はその医師だけに留まりませんか。ねー

「そう言いながら、先生は居ずまいを正した。私にこう言えた義理ではありませんが、出来ればその医師を、彼の弱さを許してやって頂けませんか？『罪を憎んで人を憎まず』と申します。医師を代表して謝罪致します。申し訳ございませんでした」

「そうやって、先生は床に手を付いて深々と頭を下げた。それを見て、親父は大慌てに慌てた。」

「先生やめてくれえーッ！先生にそだな事されつと、俺どうしていいか分がらね」

親父は、天敵の如く見做していた医者から素直に頭を下げられて、かなり動揺したようだった。なんとかその場が収まった後、親父が

晴れやかに言った。

「いやー、先生のお陰で長年心に抱えていた重石が無くなったような気分だ。んでも、  
『罪を憎んで人を憎まず』というセリフは、  
ずっと前、コウが新聞配達ばクビになった時に教え諭してやったのと一緒にだ。まさかそれがそのまま俺に突っ返されて来るとは思わなかったよ。がはははははは！先生、夕食食べっぺっす。折角ご馳走用意したけの、冷めてしまう」  
そして、先生のために緊急購入した越乃寒梅を振る舞い、親父は気持ち良さげに酔って、先生と旧来の友のように色々な話をした。先生を送る約束だった兄貴も、すっかり出来上がって寝転がっていた。時刻を見ると既に九時を回っていた。これ以上遅くなると明日に差し支えるし、親父も少し眠そうな素振りをし出したので、先生にはご帰宅して頂く事にした。

「先生、今日は有難うございました。本当は

兄が送って行く約束だったので、申し訳  
ございませぬ。ご覧の通りで」  
「構わん、構わん。なんとでもなる。歩いて  
帰れない距離でもあるまいし」  
「じゃ親父、俺途中まで先生ば送って行っか  
ら」  
そう言い残して、先生と家を出た。帰る道す  
がら、典孝は先生に改めて礼を言った。  
「家みたいな狭苦しい所に来て頂いて、本当  
に有難うございました。あんなに晴れやか  
で、楽しげな父を見たのは生まれて初めてで  
す」  
「いやいや、私こそ親父さんと色々な話が出  
来て、楽しかったよ」  
「裁判沙汰になりかかった事が何回かあると  
おっしゃるのを聞いて、本当にビックリしま  
した」  
「まあ、高橋病院を開院して二十年経つから  
ね。なんだかんだはあるさ。誰だって事情を  
抱えて生きているからね」

そう言いながら、先生はポケットから何かを取り出した。――典孝君。これは孝一君に返しておいてくれ。――先生が差し出したのは、預金通帳と判子だった。――孝一君の全財産だそうだ。彼、家の病院に迎えに来て、私に会うや否やこれを突き出してその場に土下座したんだよ。『先生、これが僕の全財産です。足りなかったら、生涯かけてでも働いて返します。どうか、親父ば治してやって下さい』そう言っただけ。正直、私は面食らった。そして彼にこう言ったんだ。『医者、患者を治すのではありません。患者を治す力は患者の体の中にあるんだ。医者や薬はその力が出易いように手助けするだけなんだよ』しかし、幾ら説明しても納得しないんだ。『そんなのは言い訳に過ぎないじゃないですか。プロである以上結果が全てでしょ？ 治すか治さないかのどっちかだ』頑とし

てそう言い張ってね。幾らこれを返そうとしても受け取らないんだ。医者としては一番苦手なタイプだよ」

典孝は預金通帳と判子を受け取って言った。「ご迷惑掛けて申し訳ございません。兄に返しておきます。なにせ感情が先んじるタイプなもので」

ここに至って、典孝は一番確認したかった事を口にした。

「先生、折り入ってお聞きしますが、父の容態をどうご覧になりました？」

先生の顔を見ると、さっと表情を曇らせるのが分かった。

「ん・・・。やはり医学的な検査を受けて頂かないと、はっきりした事は言えないな」

そう言っていて、言葉を濁した。

「これまで類似した症状の患者様を見た事は有りませんか？」

「いや、医者だからね。類似した症状の患者は沢山診ている。その経験からある程度の見

当が付かぬ事は無いが、先程も言ったように、医学的な裏付け無しに憶測で物を言う事は出来ない。先生から検査を受けるよう薦めて頂く事は出来ないのでしょうか？」

「んー。基本的に検査を受けるか否かは各個人の判断だからね。医者に検査を強要する権限は無いしね」

ここで言葉を区切って、先生は暫く間を置いた。そして、次のように話した。

「親父さんは奥さんの病気の時に、かなり胃の病気について研究・調査したようだ。もしかすると、ご自身の病状についても自覚しているのかも知れないな・・・。典孝君、ここら辺でいいから。今日は本当に世話になったな。有難う」

最後に非常に気掛かりな事を言い残して、先生は去って行った。典孝は闇に消えていく先生の背中をじっと見つめていた。

27・偽り

親父は目に見えて衰えて行った。孝一に取  
つて、高橋先生が最後の頼みの綱であった  
が、彼が来る前と後とで結局何も変わらな  
った。勿論一日にして完治する訳はないの  
が、治療の道筋すら付けられないのだ。典  
孝の話では、『医者に検査を強要する権限は  
無い』と言って、渡した預金通帳も突っ返  
来たらしい。孝一にすれば、体のいい理屈  
付けて、検査前に匙を投げたと思えなかつ  
た。今にして考えれば、胃の苦しみだけで  
ばまだマシであった。それは親父の腹の中  
押し殺して口外しなければ気が付かない事  
だ。最近になって親父は発作的に激しい咳  
をするようになった。しかもそれは五分以  
上続いた。その間の親父は本当に苦し  
そうであった。親父なりに気を使ったのか、  
そういう場合は便所に駆け込むようになったが、喘ぎ  
声は否が応にも耳を突いた。親父もさぞかし苦

しかろうが、間近で聞いている孝一も、針の筵の上を歩いていような気持ちになった。耳を塞いで、何処か逃げ出してしまいたくなかった。しかし、逃げた所で何の解決にもならない事は良く分かっていた。典孝に相談した所で余計な心配を掛けるだけなので黙ってようと思っただが、典孝は週末ごとに帰省して来るようになったので、直ぐに気付かれてしまった。典孝は新聞配達など直ぐに辞めるべきだと主張した。しかし、それは既に孝一が何度か言っている事だった。―確かに体調が良くない面はあるが、日常生活に支障をきたす程でね。この程度で配達辞めちまったら、じっちゃんに顔向けできね―親父はいつもそう答えて相手にしなかった。典孝は帰省の度に高橋病院に出掛けて行って、親父の事を相談しているようだったが、特に処方箋を貰って来る訳でなし、医療器具を借りて来る訳でも無かった。試しに―高橋先生は何か言ってたか？―

と聞いても、  
「うん・・・。やっぱり正式に検査してみね  
ど、はっきりしたこと言わんねど」  
浮かぬ顔で口を濁すようにそう答えた。しか  
し、そんなはずは無かった。典孝のことだ。  
出来るだけ正確に、客観的に親父の症状を伝  
えている事だろう。熱心に通って来る頭脳明  
晰で誠実な青年に対して、ずっとそんな逃げ  
口上が通用するとは思わないだろう。これま  
での豊富な経験に照らし合わせて、医者とし  
ての見解を述べているに違いないのだ。  
誰もが偽っていた。高橋先生は親父を一目  
見て親父の病状が致命的である事を見抜い  
た。しかし、正式に検査しないと分からない  
とお茶を濁した。典孝は高橋先生の様子を見  
て、親父の病状を見抜いた。しかし、気付か  
ぬふりをしていた。親父は自分の病状に気付  
いていた。しかし、気付かぬふりをしてい  
た。そして、孝一は高橋先生と典孝と親父が  
偽っている事に気付いていた。しかし、気付

かぬふりをしていた。そうせざるを得なかつたのだ。そのうち、親父は壁にもたれ掛かって寝るようになった。理由を聞くと、横になると息苦しくて眠れないと言う。典孝にこの事を話した所、

「肺さ水溜まってんだぞ。その水ば抜けば、一時的に楽になるんだげんと、直ぐにまた溜まるって話だ」

と、にべもなく答えた。

「やっぱり入院させた方が絶対いいよな？」

「俺もこの前薦めてみたんだ。そしたら、親父はこう答えた。『ノリ、人間というのは誰しも生まれながらの死刑囚なんだ。刑が執行されるのが、遅いか早いかだけの違いだべ？天が定めた寿命以上に無理に生き長らえてどうする？俺のおっ母も一年間闘病生活ば続けた。入院を繰り返した姿を間近に見てたから、尚更そう思うんだ』そう言われつと何も反論できなくてな」

典孝は吐き捨てるように言った。その態度は最早覚悟を決めているようにも見えたと。その態度は程なくして、親父は今月一杯で新聞配達を辞めると言い出した。孝一はそれを聞いて、親父が漸く決断してくれたと安堵すると同時に、とうとうここまで来たかとも感じた。恐らくこれ以上続ければ、返って周囲に迷惑が掛かると判断したのだろう。孝一は、中華屋の店長に無理にお願いして、土曜日は午後七時で早退し、親父と典孝と三人で夕食を取る事にした。非常に忙しい時間帯で、かなり気がひけたが、それにも増して三人でいる時間を大事にしたかったのだ。店長が親父の容態を気にかけて色々聞いて来たが、詳しい事は何も分からないと答えた。それは決して嘘では無かった。そうとしか答えられなかったのだ。考えて見れば、孝一が中華屋に勤めるようになったから、三人揃って夕食を取る事は殆ど無くなっていた。佐藤家は、昔からの慣習

で夕食は午後七時からになっていた。孝一は中華屋の勤務が午後九時までで、午後十時頃帰って来て、深夜過ぎに寝て朝七時に起きる。するよな生活をしていたから、生活時間帯が多少ずれていたのだ。中華屋が休みで家にいる事はあっても、食事は孝一だけ別に取った。台所が空いている時に創作料理を作つて、それを夕食代わりにする事が良くあつたので、その方が都合が良かったのだ。親父は最近晩酌を余りしなくなっていたが、土曜日の夜だけは二人の子供が自分の作った夕食を食べるのを見ながら晩酌し、気持ち良さげに酔つた。そして、死んだお母との思い出を良く話すようになった。これまでは、お母との思い出は殆ど話した事が無かつたので、初めて聞くよな話ばかりだった。特に新婚旅行で熱海に行ったのは非常にいい思い出のようだった。一俺が結婚した頃には、新婚旅行で熱海に行くといふのはもう過去の話だった。んだど

も、俺のお袋の一番の思い出が、新婚旅行で親父と熱海さ行った事だったんだと。その話ば繰り返し聞く内に、俺も新婚旅行で熱海さ行きたくなっただず。生まれて初めて新幹線さ乗って、生まれて初めて高級ホテルさ泊ってな。そばに初島って島があんだよ。そこさ船で行ったりしてな。思い出すと懐かしいな。元気になったら、また熱海さ行ってみたいな。

「行くべ、行くべ。親父と俺とノリと、それから民子おばちゃんばも誘って行くべ」

元気良く孝一は言ったが、その実涙が出る程辛かった。

以前は絶対に語らなかつた、おっ母の最晩期についても語った。

「おっ母が最後に入院する時、俺は『大丈夫だ。この入院ば乗り越えれば、絶対良くなる！』って言って励ましたんだぞ。おっ母も黙って頷いてた。ホントは『これが最後の入院になるだろう』って医者からは言われてた

んだっけ。結局その入院中におつ母は死んでしまつた。一連の葬儀の儀式が終わつた後、家でおつ母の遺品ば整理しようと思つたんだ。そしたらよ、何かから何まで綺麗に片付けてあつて、大事な物を入れる引き出しの中さ俺への手紙も置いてあつた。おつ母、これが最後に入院になるって気付いてたんだよ。んだども、こだな駄目亭主の俺の事ば、信じて、信じ切つて騙されて居てくれたんだ。手紙には俺への感謝の言葉と自分が至らない妻であつた事のお詫び、そして子供達の事をくれぐれも宜しくつて書いてあつた。恨みごと一つ書いて無かつたげんと、幼い子供ば残して先立つのはさぞかし無念だつたべな。俺、おつ母には何一つしてやれなかつたよ・・・」

そう言つて、親父はボロボロ涙を流した。孝一も典孝も俯いて、声を押し殺して泣いた。親父は寝ている途中に気分が悪くなる事が有ると言つて、洗面器を傍に置いて寝るよう

になつた。しかし、孝一が朝七時に起きてみると、親父はとつくに起きていて、洗面器は片付けてあつたので、実際洗面器を使つてい  
るのかどうかは分からなかつた。単に保険の  
ため、傍に置いておくだけかも知れなかつ  
た。夜中の事は良く分からなかつたが、日中  
に限つて言うところ、小康を保ちつつあつた。悪  
化の一途を辿つていくかに見えたが、一段落  
着いたのだ。もしかすると、これ以上悪化し  
ないのかも知れない。そんな希望が芽生えて  
来た。仮に今親父が検査を受けると言い出し  
たら、孝一は猛反対しただろう。本当の事な  
んか知らなくていい。偽りであつても構わな  
い。これ以上悪化さえしなければいい。どう  
かこのままの状態ですつと居てくれ。孝一は  
切にそう願つた。  
しかし、現実には情け容赦無かつた。ある  
朝、孝一は洗面器を見て顔面蒼白になつてし  
まつた。真っ赤な血が洗面器に吐かれ、その  
ままの状態になつていたのだ。親父は洗面器

の傍に横たわって、ピクリとも動かなかつた。孝一は膝ががくがく震え、その場で卒倒しそうになったのを、かろうじて耐えた。親父の傍に膝間付いて、親父に呼び掛けて見た。親父！親父！親父！

「親父！親父！親父！」

何度呼びかけても、何の反応も無かった。親父は既に呼吸をしておらず、冷たくなっていた。孝一は親父を何度も揺すった。

「親父、目ば覚ましてける！目ば覚ましてける！目ば覚ましてける！目ば覚ましてける！俺ば一人ぼっちにすねでけるお——ッ！」

28・修一おじさん

朝七時、典孝が寮の自室でテレビニュースを見ていると携帯が鳴った。あっ、兄貴からだ、と直感的に思っただけで携帯を見たら、やはり兄貴からだ。――もしもし、兄貴、なにした？――ノリ、ノリ、ノリ。――親父が、親父が、親父が。――兄貴は電話の向こうで泣き喚き、何を言っているのか全く分からなかった。しかし、典孝には何が起こったのか凡そ検討が付いた。高橋先生から親父さんの体力はかなり弱っている。もしかすると後一ヶ月持たないかもしれないと通知されていたのだ。――兄貴、ちょっと待っててけろ。直ぐに掛ける直すから――電話を切って、典孝は素早く考えた。兄貴はかなり取り乱している。出来るだけ早く、誰か家に行つてあげた方がいい。高橋先生に連絡を取るか？しかし、幾らなんでも早朝過ぎ

るし、医者 の 範 疇 を 超 越 っ て い る 可 能 性 が 高  
い。民子おばちゃんはどうか？否、だめだ。  
民子おばちゃんは女だ。兄貴以上に取り乱す  
可能性がある。もうこうなると修一おじさん  
しか居なかった。実は高橋先生から通知を受  
けた時、修一おじさんにはその結果を正直に  
報告してあった。親父の兄貴であるし、本家  
の長男であるから、そうすべきと考えたの  
だ。おじさんは親父より五、六歳年上で、小  
学生 の 時 に 父 親 を 亡 く し、家 計 を 支 える 為 に  
中 学 校 を 出 て 直 ぐ に 働 き に 出 た 苦 労 人 だ っ  
た。余り感情を外に出さない人で、典孝が報  
告をした折も淡々とした表情で聞いていた。  
早朝迷惑千万なのを百も承知で、典孝はおじ  
さんに連絡を取り、事情を話した。おじさん  
は、  
「分がった、直ぐ行く」  
とだけ答えた。典孝は自分も直ぐ山形に向か  
うとだけ伝えると、取るもの取らず、急いで  
寮を出た。

29・否定の手紙

親父はおっ母と同じく胃癌で、症状が進むにつれ肺へと転移し、それが致命傷となった。という事だった。高橋先生が面会した時には、末期のがん患者特有の症状が出ており、先生は口外しなかったが、後二ヶ月持つまいと踏んだらしい。親父の死後は、修一おじさんが葬儀屋と相談しながら、陣頭指揮を取って諸手続を行った。おじさんは自分がやるべき事を黙々とこなした。典孝も東京から駆け付けて、そのサポートを行った。孝一は魂の抜けた人形のように、おじさんや葬儀屋から言われるがままに動いただけだった。葬儀・告別式を行い、精進落としを済ませて、午後三時に葬儀の一通りの儀式は終了した。納骨は四十九日に行われる事となった。「じや俺は帰っからな。孝一も典孝もいつもまでも気落ちしてちゃだめだぞ。これは何かの時に役立てろ」

おじさんは孝一に茶封筒を渡して去って行った

た。中には二十万円入っていた。孝一は明日から仕事復帰し、典孝も明日の午前中に東京に戻る事になっていた。孝一は最後に一階の作業場の後片付けをする事にした。作業場にある工具等は、元々表具店主の厚意で借り受けたものだった。中には長く使用するうちに自費で買い替えたものがあつたのかもしれないが、その識別は孝一には出来なかつたし、ここに置いていてもしょうが無かつたので、全て表具店に返却した。不用品は全て処分した。工具をどかすと、あちこちに汚れやごみが目立った。その清掃や整理だけれども結構時間が掛かるように見えた。典孝はさすがに疲れた様子だったので、先に休んでもらい、孝一が一人で片付け作業を行った。一通り作業を終えると、既に時計は十一時を回っていた。事務用の机と椅子があり、それはこちらで購入した事は分かつていたので、唯一それだけが残つた。孝一は椅子に座つて暫くじつと

していた。親父はこの机でよく帳簿を付けていた。この机は親父の形見として今後自分が使って行こうと考えた。机の前に大きめのカレンダーがあって、親父が色々とスケジュールを書き込んでいた。明日の日付の欄に『孝一三十歳』と記載してあった。そうだ。明日、正確には後一時間足らずで俺は丁度三十歳を迎える。もしかすると、親父なりにお祝いを考えて居てくれたのかもすんねな、と孝一は思った。しかし、もう誕生日を祝う歳でもないし、祝う気分にもなれないし、単に節目の年齢を迎えるな、という意識がある程度だった。ふと、引き出しの中が全く未整理である事に気付いた。親父が仕事で使用しているものなもので、勝手にいじってはまずいと考え、これまで引き出しの中を覗いた事は無かった。孝一は引き出しを開け、中のものを取り出し始めた。事務用の書類や事務用品が殆どで、親父の遺品として何処かにまとめて置こうと

考えた。二段目の引き出しを開けた時だ。そこには封書が一枚だけ入っていた。あつ、と  
思っ、て引き出しから封書を取り出して見る  
と、表には『孝一へ』と書かれてあった。親  
父の字だ！孝一は封書を持って、急いで二階  
の自分の部屋へ上がって行った。自分の部屋  
の中でじっくり読みたかったのだ。封書の中  
に入っていた便せんは四枚で、一字一字非常  
に丁寧に書かれていた。

『孝一へ』

お前がこの手紙に気付いた時には、もう俺  
はこの世にいねがもすんねな。遺書という訳  
ではないが、簡単に自分の気持ちを伝えてお  
こうと思う。  
典孝が東大に通っていた頃は毎月三万円も  
出してくれて本当にありがとう。お陰様で典  
孝も東大を優秀な成績で卒業することが出来  
た。お前の協力があってこそだ。  
本来なら俺がもうひとふんばりして稼がな

ければならないところだった。しかし、体がだんだん言うことをきかなくなり、これ以上無理をすればかえって逆効果だと思ったので、申し訳ないが甘えさせてもらった。お前には本当のことを言っておこう。典孝が大学院に落ちて就職すると言った時は、もちろん残念な気持ちもあったが、正直ホッとしたよ。この状態がもう何年も続いた場合、体力が続くかどうか自信が持てなかった。典孝が社会人になれば、二人の子供を立派に育て上げるというお母との約束を果たしたことになると考えたんだ。結果として典孝は一流企業に就職したし、孝一は山形でも指折りの中華屋で働いている。これであの世に行ってもお母に顔向けできる、そう考えたら張り詰めていた緊張の糸がプツンと切れちまったのがもすんねな。坂道を転げ落ちるように体調が悪化して行ったのは皮肉な話さ。調がそう言えば、ついこの間中華屋の店主がひよっこりやっつて来たよ。見舞いとは言わなか

ったが俺のこと気になったんだべな。あの頑固店主、お前のことばほめてたよ。あれこれ言わなくても、安心して仕事を任せられるよ。うになつたつて。あの人は、滅多なことでも人をほめたりしないんだぜ。お前が家に帰つてからも、色々な食材買い込んで料理の研究してることも、ちゃんと見抜いてたよ。お前も身に染みているように、あれは非常に厳しい男だ。びしびし鍛える方針だから、見習いで雇つた人の殆どは半年も経たないうちに辞めてしまふらしい。そんな中でお前はよく頑張る。男の下で修業を積み、必ずやお前は一流になれるだろう。

孝一、お前は長男だから、この家はお前が守つてくれ。お前は今の中華屋に落ち着くまで中々職が決まらなかったな。家の中で無為に過ごしていたこともあった。俺は黙って見ていたが、お前が悩み、もがき苦しんでいることを知っていた。その経験があるからこそ

お前は強くなったのだと思う。また、若くして社会に出て働いて、様々な経験を積むことで視野がかなり広くなった。お前なら問題無く世の中を渡って行けるだろう。俺が心配しているのは、むしろ典孝の方だ。あいつはトンビがタカを産んだようなエリートだ。正直、俺も大分自慢して来た。だが、なにせ勉強一本で来た男だ。著しく視野が狭い。ずっと一番で来たから、挫折に弱い。大学院の試験に落ちた際のあの落ち込みぶりはお前も間近に見ていたろう。今後、もしあいつがくじけそうになったら、お前が支えてやってくれないか？まあ、俺が改めてこんなこと言わなくても、お前ならそうしてくれるだろうがな。

俺に金は無い。地位も無い。名誉も無い。だが、どんな金銀財宝にも勝る宝物を持って来た。それが、孝一と典孝だ。俺は二人が健やかに成長してくれることだけをずっと願って来たし、それ以外は望まなかった。そして

今は、自分の責務を果たしたという達成感と、もうすぐこの胃の痛みから開放されると、もう安堵感で一杯だ。なに、俺が居なくなっただって悲観することは無い。迷ったら、目をつぶって冷静に、心を落ち着かせて考えて見ろ。そして出された結論は俺が考えていることと一緒にだと考えていい。俺は天国で、お母と一緒にいつもお前達を見守っているよ。父より』

親父から貰った、最初で最後の手紙だった。非常に丁寧に書かれた、有り難い手紙には違いなかったが、孝一は何度か否定した。まず、俺が典孝に三万円を出したのは、自分の意志で行った事で、誰に依頼された訳でねえ。礼なんか言わなくていい。典孝を支えてやってくれ？典孝はもう立派な大人なんだから、俺なんか支えてやんなくても、ちゃんとやっ行ってけっぺ。それに俺が強くなっただけ？俺を励ますつもりで書いてくれたのが

もすんねけど、俺はそんなに強くねえ！俺も親父を勘違いしてた面が有ったかもすんねけど、親父も俺を勘違いしてる。親父が居てくれたからじゃねえか。どんなに辛くても親父が居てくれたから俺は頑張れたんだ。そうでなければ、今の中華屋も半年で辞めてたよ！冗談じゃない！親父、なんで死んだんだよ！寂しいよー、寂しいよー。孝一は布団を頭から被って枕に顔を埋め、声を殺して泣き続けた。

30・兄貴立つ  
典孝は何かに呼ばれるように目を覚まし  
た。辺りはまだ真っ暗だったが、便所の方か  
ら、ジョボジョボ小便をする音が聞こえて来  
た。なんだ、兄貴起きたっけのが、と思っ  
て枕元に置いてある携帯電話で時刻を見る  
と、まだ午前二時だった。いつも六時に目を  
覚ます典孝にすれば、これは珍しい事だっ  
た。  
実は典孝は悩んでいた。ある考えが典孝の  
中で浮かんでは消え、消えては浮かんでい  
た。まず兄貴に相談しなければ、とは考えて  
いた。葬儀の一通りの儀式は昨日で終わり、  
今日の朝九時の新幹線で東京に戻るつもりで  
いた。本当は今日一杯慶弔休暇の申請を出し  
ていたのだが、納期が決まっている作業があ  
ったので、午後から出社して少しでも遅れを  
取り戻しておこうと考えたのだ。この為、家  
に居られる時間は限られていた。ジャーと水  
を流す音が聞こえ、兄貴が襖の直ぐ向こう側

を通り過ぎる足音が聞こえた。典孝は反射的に兄貴に呼び掛けた。

「兄貴」

「ん？なんだ？ノリ、起きたっけのが？」

襖を開きつつ、兄貴が言った。

「兄貴、誕生日おめでとう。今日で丁度三十歳だな。」

「んだね。もうこの歳になつと、誕生日を祝う気にもなんねな。」

「節目の歳だべよ。兄貴、そこの壁のスイッチで電気ば点けてけろ」

「電気？ああ」

電気が点いて暫くは眩しさに目が眩んだが、目が慣れて改めて兄貴の顔を見て、ハツとした。兄貴は、ずっと泣き続けていたかのようだな、真っ赤で腫れぼったい目をしていたのだ。

「何したの、兄貴？泣いたっけのが？」

兄貴が戸惑ったように答えた。

「んねんだ。寝起きだから顔むくんでんだ

べ  
ー

「んだがした」

そう受け流しはしたものの、兄貴は昨日着ていた服のままだった。髪型も全く乱れていなかったのので、少なくとも寝起きでない事は明らかだった。兄貴の顔を見て典孝は意を決した。

「兄貴、ちよつと話あんだ。座ってける」

「話？こだな夜中に？お前が話あるなて珍しいな」

兄貴はそう言いながら、典孝の側にあぐらをかいた。兄貴の顔をしみじみ見ると、かなりやつれているのが分かった。取り繕ったような笑顔が返って痛々しかった。

「兄貴、突然だけどな、俺会社ば辞めようかと考えてんだ」

「辞める！？なして！？あだないい会社。仕事やんだぐなったのが？」

「んねんだ」

「人間関係が上手くいってねえのが？」

「んねんだ。皆いい人だよ」  
「んじゃ、なして辞めんだぞ」  
「まだ誰にも喋ってねんだげんと、俺東京の会社ば辞めて、家さ戻って来ようかと考えてんだ。家から通えるような会社を探す。親父が死んじまって、兄貴一人ぼっちになったべ？俺が傍に居た方が安心だし、寂しくねえと思っただ。親父もホントは俺が山形で就職する事を望んでたんじゃねえべが？」  
それを聞いて兄貴はがっくりと肩を落としたり。そして、目をつぶってそのまま押し黙ってしまった。  
家から通える会社を探すと言っても、典孝には何の宛も無く、衝動的な思い付きと言っただけだった。しかし、親父が死んだ後の兄貴の落ち込みぶりは尋常ではなかったのだ。『頼む、そんなとか力になりたかったのだ。』頼む、そうしてける『またいつかみたいに一心にすがって来るのかな、と漠然と予想していた。暫く沈黙が続いたが、突然兄貴が立ち上がった。

なんだ、と思つて兄貴の顔を見上げて、典孝は再度ハツとなつた。下から仰ぎ見る兄貴の顔は親父そっくりだったのだ。それから起こつた出来事は、時間にすれば僅か一分足らずだろうが、典孝にとつて一生涯忘れ得ぬ思い出になるに違いない。兄貴は大声で怒鳴り出したのだ。

「お前、そだなごと本気で言つてんのが！」

この家は俺が守る。

お前は勉強で天下を取つた男だ。

仕事でも天下を取れ！

どうしても、どうしても我慢出来なくなつた

時だけ、家さ帰つて来て泣け！

分がつたが！！

余りのド迫力に典孝は完全に腰を抜かした。

「わ、分がつたっす」

そう答えるのが精一杯だった。兄貴は言うだけ言うと、そのまま自分の部屋に戻つて行つ

てしまった。典孝は本当は便所に行きたかった。のだが、暫くの間立ち上がる事が出来なかった。おい、ノリ、もう七時半だぞ」兄貴の声で目を覚ました。一度起きてから目が冴えて中々寝付けなかったが、いつのまにか寝てしまったらしい。「お前が珍しく寝坊してっから、疲れてんだと思っつてわざと起こさなかったんだ。九時の新幹線だべ？早く着替えて飯食え。車で送っつてっつやっから」兄貴はもう普段通りに戻っていた。早朝の件は一切触れなかったし、典孝も敢えて触れなかった。触れるのが怖かったのだ。車で駅に送る道すがら、兄貴が言った。「いやー、きんな店長から電話掛かって来てよ、今日からちゃん店出れるかって確認すんだよ。まだ一部事務処理が残ってっから、それが終わり次第出るって言ったら安心した

よ　　う　　な　　声　　出　　し　　て　　よ　　、　　お　　前　　が　　居　　ね　　ど　　店　　が　　回　　ら　　ね  
だ　　っ　　て　　さ　　。　　頼　　ら　　れ　　る　　男　　は　　つ　　ら　　い　　よ　　」  
実　　は　　典　　孝　　も　　同　　様　　の　　事　　が　　有　　っ　　た　　。　　工　　藤　　課　　長　　に　　今  
日　　の　　午　　後　　か　　ら　　出　　社　　す　　る　　旨　　を　　伝　　え　　る　　と　　、　　ホ　　ッ　　と  
胸　　を　　撫　　で　　下　　ろ　　す　　よ　　う　　に　　、　　『　　ホ　　ン　　ト　　か　　？　　そ　　う　　し  
て　　く　　れ　　る　　と　　助　　か　　る　　よ　　。　　佐　　藤　　が　　居　　な　　い　　と　　、　　作　　業  
が　　そ　　こ　　で　　止　　ま　　っ　　ち　　ま　　う　　ん　　だ　　よ　　』　　と　　言　　っ　　て　　い　　た  
の　　だ　　。　　た　　だ　　、　　兄　　貴　　の　　話　　の　　腰　　を　　折　　る　　と　　ま　　ず　　い　　と  
思　　っ　　た　　の　　で　　そ　　の　　事　　は　　黙　　っ　　て　　い　　た　　。　　兄　　貴　　が　　自　　分  
を　　ひ　　け　　ら　　か　　す　　よ　　う　　な　　自　　慢　　話　　を　　す　　る　　の　　は　　滅　　多　　に  
無　　か　　っ　　た　　の　　で　　、　　多　　少　　違　　和　　感　　が　　残　　っ　　た　　。  
「　　じ　　ゃ　　あ　　、　　気　　い　　っ　　け　　て　　帰　　れ　　よ　　。　　俺　　は　　こ　　れ　　か　　ら  
役　　所　　に　　行　　っ　　て　　、　　残　　っ　　て　　る　　事　　務　　処　　理　　す　　る　　ん　　だ　　」  
兄　　貴　　は　　そ　　う　　言　　い　　残　　し　　て　　車　　で　　颯　　爽　　と　　去　　っ　　て　　行　　っ  
た　　。　　典　　孝　　は　　東　　京　　に　　向　　か　　う　　新　　幹　　線　　の　　中　　で　　考　　え  
た　　。　　兄　　貴　　は　　親　　父　　が　　死　　ぬ　　前　　の　　状　　態　　に　　す　　っ　　か　　り　　戻  
っ　　た　　か　　の　　よ　　う　　に　　見　　え　　る　　。　　で　　は　　、　　早　　朝　　の　　兄　　貴　　は  
幻　　だ　　っ　　た　　の　　か　　？　　否　　、　　あ　　ん　　な　　に　　鮮　　明　　な　　幻　　が　　あ　　る  
も　　の　　か　　。　　兄　　貴　　に　　怒　　鳴　　ら　　れ　　た　　の　　は　　、　　生　　ま　　れ　　て　　初  
め　　で　　だ　　っ　　た　　。　　元　　々　　兄　　貴　　は　　感　　情　　に　　激　　し　　易　　い　　面　　は

あつた。おまけに頑固一徹なため、友達と衝突する事はまま有ったようだ。実際携帯電話で激しく口論しているのを何度か目撃した事があつた。しかし、家庭内で親父に逆らった事は一度も無かつたし、典孝は暇があれば勉強しているような質だったので、争う接点は皆無だつた。よつて、家庭内での兄貴は極めて温厚だつたのだ。兄貴と付き合つて二十三年、あんな強い一面を持つているとは予想だにしなかつた。あんなに弱り切つていた兄貴が、手の裏を返したように急に強くなつたのは何故なのか？親父の死がかなりのダメージを与えた事は間違いないが、地面に強く叩き付けられたゴムボールのよう、その分大きく跳ね返つたのか？大きな疑問が残つたが、幾ら考えてもその疑問を解く事は出来なかつた。何はともあれ、がつくり肩を落として、一人寂しく生きて行く兄貴を見るのは耐え難い事だつた。しかし今日の兄貴を見る限り、あれなら大丈夫だ。全く心配無い。自分は自

分  
で  
仕  
事  
に  
専  
念  
で  
き  
る  
。  
妙  
に  
納  
得  
し  
て  
東  
京  
に  
戻  
っ  
た  
典  
孝  
だ  
っ  
た  
。

## 3 1 ・プロポーズ大作戦

親父が亡くなってから、典孝は大きな胸の空虚感に悩まされるようになった。これまで勉強でも仕事でも親父見ててくれ、親父やったぞ、という気持ちが無かった。知らず知らずのうちに親父を精神的な支柱にしていたのだ。月並みな表現だが、親父が死んで、初めてその存在の大きさに気付いた。実家に帰っていた時は兄貴の落ち込みぶりが尋常では無かったので、そちらの方に目が行っていたが、日常生活に戻って、自分もただならぬ傷を負っている事が分かった。自分が何のため生きているのか分からなくなった。生あるものは、いつか年老いて死ぬ。それを免れ得たものは歴史に存在しない。他ならぬ自分だっただけか。死ぬんだ。俺は今まで脇目もふらず勉強して来た。仕事して来た。しかし、一生それを続けるつもりか？その後、何が残るのだろうか？なるほど、ある程度財は築けるだろう。しかしそれに何の意味が有るの

か？ 幾らお金が有ったとしても、死んでしまえば全く意味を成さない。俺はこれからの長い人生、働くだけ働いて、一人ぼっちで死んで行くのだろうか？ それでは寂し過ぎる。やはり自分の事を理解し、支えてくれるような良き伴侶が欲しい。その時、典孝は突然閃いた。

『そうだ、キーコと結婚しよう！』

実はここ最近キーコとは毎週顔を合わせていた。毎週土曜日、朝七時の新幹線で山形に向かい、真つ先に高橋病院へと出向いた。高橋病院は土曜日の午前中開院していたので、他の患者さんと同様に診察券を提示して順番を待った。勿論典孝が診察を受ける訳ではななく、先週の土日の親父の様子を粒さに報告して、高橋先生の見解を伺っていたのだ。本人を診察している訳ではないので、処方箋は出してもらえなかったが、親父の苦しみを少しでも軽減できる方法はないか、藁をもつかむ気持ちだったのだ。受付にキーコが居たの



たー↓結婚

と行くはずがないのだが、東大理学部数学科を優秀な成績で卒業した典孝の明晰な頭脳を以ってしても、そこまで考えが及ばなかったようだ。なにはともあれ、明確な目標が出来た事で、典孝に生きる指針が出来た。苦しい事があっても、『キーコのため頑張ろう』と思う事が出来た。典孝はキーコにプロポーズする場面を何度も何度も空想した。それには様々なバリエーションがあったが、一例を挙げるなら以下のようなものだ。

深夜零時、山形駅前のバスターミナルの前。典孝、黒いサングラスをかけ、タバコを吸いながらキーコを待つ。三本目のタバコを吸い終わり、足で揉み消した時、キーコが駆け足で登場する。

（息を切らしながら）

「ごめん、ちよっと遅れちゃった。ノリ君た

らこんな深夜に突然呼び出すんだもん。ビツクリしちやった」

典孝、サングラスを外し、キーコを鋭い視線で睨みつける。ゆっくりキーコに歩み寄る。突然キーコを平手打ちする。キーコ、頬を抑えてよろける。驚いて典孝を見る。典孝、しばしの沈黙の後、深夜の山形の街に響き渡るような大声で絶叫する。

「黙って俺について来い！」

「はい、分かりました」

静かに夜が更けていく。

典孝はずっと優等生で通って来た分、『悪』に対する憧憬のようなものがあつたのだらう。また、女性と付き合った経験が全く無かったのも、こと恋愛に関しては考えが極めて短絡的だった。当のキーコとは、月に数回当たり障りの無いメールをやり取りする程度の関係だった。しかし典孝にはそんな経験すら無かったもので、それは立派に付き合っ

いる部類に入る出来事だった。

親父が死んで五ヶ月経ち、四月下旬になった。ゴールデンウィークは前々から山形に帰省するつもりだったので、一ヶ月前に切符を手配してあった。キーコに何の気無しに近々帰省するとメールした所、直ぐに次のようなメールが返って来た。

『山形に来るんだたら、あたしの家にちょっと寄らない？父と母がノリ君のことかなり気にかけていたし、あたしも久々にノリ君と会いたいな♪』

そのメールを読んで、典孝は完全に舞い上がってしまった。いよいよ結婚が間近に迫った事を直感した。しかし、メールを何度も読み返すうちに、今キーコに会うのは時期尚早のような気がして来た。典孝は出来る限り冷静に、客観的にキーコの家にお邪魔している自分を空想してみた。

応接間のソファ―に寄り添うように座る高  
 橋夫妻。少し離れて、キーコが恥じらうよう  
 に座っている。高橋夫妻の向かいに、ス―ツ  
 姿の典孝が緊張の面持ちで座っている。高橋  
 先生が期待に胸を膨らませるように口を開  
 く。  
 「で、典孝君。式の日取りは決まったのか  
 ね？」  
 「えっ？シキ？」  
 高橋夫人が慌て諫めるように言う。  
 「お父さん！清子は未だ正式にプロポーズさ  
 れていませんのよ」  
 「ん？ああ・・・。そうだったな。はっはっ  
 はっはっはっ。私としたことが、気が急いで  
 しまったようだ」  
 キーコ、真っ赤になって俯く。  
 「しかし典孝君。東京から遠路はるばる来た  
 からは、何か言いたい事があるのだろう。  
 私達夫婦は、心の準備は出来ているつもり  
 だ。さあ、思いの丈を語ってくれないか？」

皆の熱い視線が典孝に集中する。

一周忌まで後半程度ある。このシチュエーションで、果たしてそれだけ待ってくれと言えるだろうか？ そんな事を言おうがものなら、高橋夫人は卒倒するかもしれない。一本気なキーコの事だ。頭を丸めて出家すると言い出しかねない。やはり今会うのは得策ではない。一周忌を待つべきだ。しかし、キーコは当然自分の家に寄ってくる事を期待するだろう。山形に帰ったにも関わらず、将来を誓い合っていたいなずけの家に立ち寄ろうともしないのは、不自然かつ不可解と感じるに違いない。キーコを傷付けずに、極々自然に断る方策は無いものか？ 典孝は悩みに悩んだ。一時間の葛藤の後、結局次のようなメール送信した。

『折角のお申し出ではありませんが、現在スケジュールがかなり逼迫し、調整が困難な状況

です。ぎりぎりまで調整を試みようかとも考  
えましたが、話が二転三転しては返って御迷  
惑をお掛けし兼ねない由、今回の会合に限り  
断腸の思いにて順延の請願を致したく候。向  
後万端宜しくお見知り置き候』

我ながら悔しさを滲ませつつ、親しき仲に  
も礼儀を弁えた名文であると思えた。実の  
所、ゴールデンウィークに実家に帰った所で  
特にやる事は無く、会いに行く友達は無く、  
せいぜい無為に過ごして多忙な日常の垢を落  
とすのが関の山だった。それも二、三日経つ  
と暇を弄ぶようになり、かといって仕事以外  
何をしていたいいか分からず、こんな事をしてい  
ていいのか、という罪悪感と相まって、休暇  
がいとましくさえ思えて来るのだった。メー  
ルに記載した内容と天地程の隔たりがあった  
が、キーコを傷付けないためにやむを得ない  
方便と考えた。

メールを送信して一時間経ち、二時間経つ

てもキーコから返信は無かった。三時間経つた時、さすがに典孝は焦り出した。もしかすると、キーコは気分を害したのかもしれない。傷付いたのかもしれない。ルデンウィークに逼迫しているスケジュールがそんなって何なんだ？仕事のスケジュールがそんなに逼迫しているなら、わざわざ帰省したりはしないだろう。プライベートで、帰省中に旧友に会えない位こき使われるというのであれば、余程鬼の家庭であろう。冷静に考えれば、考える程、自分が送信したメールは不自然さが目立つような気がして来た。こんなおかしなメールを送られて、『結局あたしに会いたくないいでしょ！』とへそを曲げてしまったのかもしれない。しかし、今更訂正メールを送る気にもなれなかった。

四時間経った時、典孝はキーコの別れを覚悟した。と同時に、楽しかったキーコの思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。手に手を取り合って眺めたエメラルドグリーン

ンの沖縄の海。土砂降りの雨の中、泣きながら抱き合った夏の夜。そして、二人並んで初めて飲んだ夜明けのコーヒー。尤も、これらは全て空想上の出来事であつたが。キーコ、今は別れる事しか答えが出せないけど、俺はいつまでもキーコの幸せを祈っているぜ。典孝が悲劇のヒーローに成り切っている時に携帯が鳴つた。見ればキーコからのメールだつた。分かつた。じゃ、また今度ね。♪』

余りに短い、余りに淡泊な返事だつた。この文面を見る限り、キーコは傷付いても怒つてもいないようだつた。その呆気なさ、典孝は言葉を失つた。暫く経つて腹が立って来た。引張るだけ引張つて、この返事はないだろ！こつちがこれだけが思い、悩み、苦しんでいるのに、まるでどこ吹く風だ。こんな不自然なメールを額面通り受け取つたのだらうか？大体最後の『♪』は何なんだ！どうやら俺はキーコにとって会うなら会う、会わ

ないなら会わないで済む程度の男のようだ。  
キーコは本当に俺の事を愛しているのだろう  
か？典孝は愛が信じられなくなった。怒りの  
抗議電話をしようかとも考えた。落ち着け、  
落ち着くんだ。典孝は感情より理性が勝る男  
だったから、なんとか自分を宥めすかそうと  
した。冷静に考えれば、キーコは親から俺の  
事を聞かれて、何の他意も無くメールし、忙  
しいというから何の他意もなくまた今度と返  
信したのかもしれなかった。また、キーコは  
病院勤務だから普段は携帯が使えないのだ。  
メールが来て直ぐに返信すれば、まだ携帯を  
手元に置いている可能性が高いから、直ぐに  
返信が来る事が多い。が、今回は返信するの  
に一時間掛かっている。そのためメールに気  
付くのが遅れた、という仮説が成り立たない  
訳では無かった。否、そう考える方が自然だ  
ろう。典孝は、時間が経つにつれ普段の冷静  
さを取り戻して行った。そして、高々メール  
で一喜一憂している自分をつくづく恥ずかし

く、情けなく思った。凡そ物理的に励起状態にある物質は、極めて不安定で持続性が無い。時間が経てば、遅かれ早かれ平衡状態へと遷移していく。それが自然の摂理と言うものだ。恋と言うのは、人間の精神が励起している状態と云っていい。だからこそ極めて不安定で遷移し易く、ちよつとした出来事にも大きく反応してしまうのだ。僅か数時間の間に結婚から別れまで心の振り子が大きく振幅してしまふのは、典孝が精神的励起状態にある事を如実に表していた。

「はぁー」

典孝は大きな大きなため息をついた。キーコに再会したのは、去年の七月中旬だった。早いもので、それから九ヶ月の歳月が流れた。だが、それでも平衡状態にたどり着くには、まだかなりの歳月が必要と思われた。勉強一筋で来た男の、人生初の恋愛だけに、インパクトの大きさは桁外れだった。さすがに、恋愛当初の狂おしい程の熱烈さは消え去ったが、

それでもキーコの事を考えない日は一日たりとも無かった。特にキーコとの結婚を決意してからは、すっかり空想癖がついてしまった。何度も何度も空想するものだから、空想と既成事実との境界が曖昧になる場合すらあった。空想はバリエーションに富んでいたが、唯一共通する点が一つだけ有った。それはキーコと典孝が相思相愛である事だ。勝手にそれを前提条件として来たが、今日はつきりしたのは、典孝がキーコを想っている程には、キーコは典孝を想っていない、という事だった。

「愛する事に疲れたみたいだ」

典孝は呟いた。こんなに日々恋焦がれても、何一つ報われない、というのであれば、愛なんてとんだ徒労に過ぎないのではないか。もう愛の奴隷の日々は沢山だ。キーコとはキツパリ別れよう。この汚れきった関係を清算しよう。そして、愛の無い自由な日々を取り戻すのだ。キーコとは単なるメル友に戻ろう。

このように考えて、典孝は思いを新たに  
した。元々単なるメル友に過ぎなかったが。

32・典孝立つ  
キーコとは空想の中で二回別れた。その度  
に、キーコとは単なるメル友に戻ろうと思っ  
た。しかし、単調なメールをやり取りする中  
でも、典孝の空想はやはり膨らんで行くのだ  
った。そして結局『俺にはやはりキーコしか  
居ない』という所に落ち着いた。  
十一月中旬になり、親父の一周忌のため典  
孝は帰省した。一周忌の法要は、泉福寺で修  
一おじさん夫妻と民子おばちゃん夫妻と兄貴  
と典孝が出席して、つつがなく行われた。典  
孝に取って、一周忌とは出陣式としての意味  
合いも併せ持っていた。実は、翌日の午後二  
時、高橋病院近くの公園でキーコと会う約束  
をしていた。いよいよ一年前から計画してい  
たプロポーズ大作戦を実行すべき時が到来し  
のだ。典孝は明後日の朝東京に戻る予定でい  
た。明日は平日であったが、典孝にしては珍  
しく有休を申請していた。なんとしても明日  
中にキーコに会って、決着を着けて置く必要

があつた。高橋病院は午後零時から午後三時まで昼休みだったので、その時間を利用しようと思ひ付いたのだ。『明日俺は男になる。親父、見ててくれ！』典孝は墓前で手を合わせて、何度も親父に語りかけた。明日のため、何回リハーサルを繰り返しただろう。裕に千回を超えているだろう。典孝の中ではあらゆるパターンを網羅したような気がなつていた。何が起こつても大丈夫だ。対応できる。絶対対応できる。そう自分に言ひ聞かせながら、内心不安で不安で堪らなかつた。結局一睡も出来ぬまま当日を迎えた。居ても立つても居られず、その日の午後一時前には、典孝は公園のベンチに座つていた。二時が近づくとつれ、緊張が高まってきた。ああ、もう何処か逃げ出してしまいたい、永久に二時にならなければいい、そう思った。二時十分前にキーコがひよいと姿を現した。も

う少し猶予があると思っていたので、典孝のシナリオは最初から狂った。咄嗟にこの場から走って逃げ出そうかと思っただが、さすがにそれは思い留まった。呼び出しておいて会うや否や全力で逃走したら、さぞかしビックリしたであろう。キーコの方は至って普段通りだった。

「ノリ君、もう来てたの？ 待たせちゃいけないと思っ、少し早めに出てきたんだけど。ノリ君のお父様が亡くなって、もう一年経つからね。ホントに早いよね。ノリ君も折角帰省したなら、もっとゆっくりして行けばいいのに。ゴメンね。今日は忙しくて、あんまり時間取れないの。三時きっかりに患者さんの受付が始まるから十分前には戻らないと」

典孝の隣に座るなり、キーコは堰を切ったようにしゃべり出した。

「分がったっす」

典孝はキーコを見ず、真正面を向いたままそう答えた。それからキーコは最近身の周りに

起こった事をあれこれと喋った。どれもこれも取るに足りない話で、正直典孝にはどうでもいい事だった。キーコが一生懸命話しているので、さも面白そうに聞いているふりをした。だが、実際は完全に上の空だった。どのタイミングでプロポーズを切り出すべきか、典孝が考えていたのはそれだけだった。そうこうしているうちに、キーコが戻らなければならぬ時間が近づいて来た。よくよく考えれば、約一年ぶりに再会して、即座にプロポーズするというのは、余りに唐突過ぎるような気がして来た。ある程度、それに類する、あるいは準ずる話が伏せんとしてあれば別だ。しかし、そんな話は毛頭無いのだ。典孝はすっかり弱気になって来た。

「そう言えば、ノリ君、あたしになんか用事があるようなこと言っただけだった？」

「まあ、用事が有ると言えば有るような、無いと言えれば無いような……」

「なにそれ？ 変な人」

キーコは忙しそうだし、今日はこの程度にして、また今度会った時に話せばいいかな。・・。そういう方向に気持ちが始めた瞬間だ。課レクで沖縄に行った時、工藤課長から言われたセリフがそのまま脳裏に蘇って来た。

『お前今までいつもそうやって、何かにつけて屁理屈つけて、自分の気持ちに背を向けて来たんだろが！今出来る事を今やらなかったら何時やるんだよ！時間が経てば経つ程、最初の一步は踏み出し難くなるんだ』

『何かツッコ付けてんだよ！好きなら好きって言え！会いたいなら会いたいわって言え！不様でいい！みっとも無くもいい！自分の正直な気持ちぶつけてみるよ！それが出来なかったら男じゃねえっ！金玉この場で切り捨てろ！！』

典孝は敢然と立ち上がった。  
俺が大学院に落ちた時、親父が立ち上がった。  
た。  
親父が死んだ時、兄貴が立ち上がった。  
そうだ。今度は俺の番だ。男には、立ち上が  
って言わねばならぬ時がある——  
「キーコ、俺と結婚してくれ！」  
「えっ？」  
「キーコは自分の耳を疑うように言った。  
「キーコ、俺、キーコが好きだ。俺と結婚し  
てくれ！」  
典孝の突然のプロポーズに、キーコはかなり  
狼狽したようだった。  
「ちよ、ちよっと待ってよ！なんで藪から棒  
に結婚の話が出てくるの？結婚も何も、あた  
し達付き合ってる訳じゃあるまいし・・・」  
「メールのやり取りはやってっぺ？」  
「ノリ君、あなた頭良過ぎて何処かおかしく  
なったんじゃないの？メールのやり取りやつ  
てる程度じゃ、付き合った部類に入らない

の。あなたこれまで女性と付き合ったこと無いでしょ？だからそんな頓珍漢なこと言うのよ。結婚に至るまでには様々なプロセスがあるでしょ？当人同志の問題だけじゃなくて、家同志の問題も生じて来るし・・・」

「愛があれば、なんとか乗り越えられるんじゃない？」

「愛だけじゃだめよ！それで全て解決するんじゃない、誰も苦労しないわ。ごめん、あたし戻る時間だから」

キーコは立ち上がった、半ば逃げるように小走りに去って行った。典孝は一人その場に取残り残されて、暫くじっとしていた。

なんとも複雑な心境だった。一年間練りに練っていたプロポーズ大作戦を遂行出来たという達成感もあった。自分は呆気なく振られたという絶望感もあった。成るべくして成った結末と言えるような気もした。自分は惨めで、みっともない男だったかもしれないが、工藤課長の言う通り、自分の正直な気持ち

伝えられて良かった、と最終的には思った。  
こうして、典孝の生まれて初めてのラブス  
トリーリーは、呆気ない、非常に呆気ない幕切  
れを迎えた。

33・か、に見えた

か、に見えた。ところが、だ。キーコはこの事をまず自分の母親に報告した。母親はすかさず自分の夫に報告した。これを聞いて、今度は高橋先生が立ち上がった。彼は自分の娘を呼びつけ、典孝との関係や恋愛観についての問診を行った。彼の問診結果は下記の通りだ。

① 清子は高校三年生の時に典孝とクラスが同じで、一方的に想いを寄せていた。が、典孝からは全く相手にされなかった。

② 初めて付き合った男に騙され、深く傷ついた時に典孝に救ってもらった。それについて深く感謝している。

③ 今現在は典孝に対して恋愛感情を全く持っていない。但し、人間としては尊敬している。

④ 今現在付き合っている人はおらず、好きな人もいない。男性への不信感が中々払拭できない。

ずにいる。

この結果を以って、高橋先生は娘に通告した。  
「ならば佐藤典孝と結婚せよ。これは家長命令である」  
高橋先生は三十年以上医師として勤務し、これまで何千人という患者を見て来た。人間を見る目には自信があつた。典孝から父親の病状について何回か相談を受けたが、その態度、言葉使い、礼儀、知識、頭の切れ等総合的に勘案して、この男はものになる、と踏んでいた。勿論東大卒という事で、ひいき目で見ている点もあるかもしれないが、今時珍しい、すっかりした好青年である事は間違いないと確信していた。聞けば高校時代に清子が想いを寄せていたと言う。仮に今現在大好きな男が居て、その男と結婚したとしても、いつかは恋愛感情など無くなるものだ。大切なのは、恋愛感情が無くなつた時に相手をどう

評価するかであり、清子は典孝を尊敬していると言おう。ましてや清子が失意のどん底にあった時に救いの手を差し伸べてくれた命の恩人ではないか。清子の伴侶として、佐藤典孝以上の男は考えられない。今は男性不信が残っている段階だが、しっかりした伴侶を持ってば、後は時間が解決してくれる。それが高橋先生の結論だった。

プロポーズ大作戦大失敗の翌日、典孝は朝九時の新幹線で東京へ戻った。午後から出社して、通常通り勤務するつもりでいた。考えまい、考えまいとしても、昨日の出来事はトラウマとなつて事あるごとに典孝を苦しめた。生まれて初めての失恋だった。しかしよく考えれば、失恋と呼ぶ値すら無いかも知れない。完全なる独り相撲なのだ。付き合い合つてもいない相手に突然プロポーズされれば、誰だつてうろたえるだろう。キーコは極めて自然な反応を示しただけなのだ。少し遠

目に考えて見れば、自分のした事が非常識である事は直ぐ気付くはずだった。が、自分はそのれに気付かなかった。恋は盲目と言われる所以だろう。もしかすると、自分は親父の死から目を逸らすために、偽装的な結婚話を仕立て挙げただけなのかもしれない。精神的な支柱を失って、偽装だろうが何だろうが、生きて行く上の指針が欲しかったのだ。俺は自分が立ち直るためにキコを利用しただけなのだ。当然の結末を迎えたのだ。キコ。この事は諦めねばなるまい。典孝はそう考えた。その日は水曜日だったが、毎週水曜は定時退勤日と言って残業が原則的に禁じられている。た。よって、午後から仕事を始めて定時で退勤した。そして直ぐ独身寮に戻り、食事を取った。その後、特に何をやる気にもなれず、ただボートとしていた。すると、兄貴からは携帯に電話が掛かって来た。兄貴の中華屋は毎週水曜が定休日だし、帰りが早い事を伝

えてあったから、兄貴からの電話は水曜の夜が多かった。「はい、はい」

典孝はいつも通り出たが、その日の兄貴はいつもと全く異なっていた。

「ノリ、お前、結婚すんのが！？」

兄貴は開口一番そう言った。

「結婚？俺が？誰と？」

「こつちが聞いてんだぞ！ノリ、今高橋先生が奥さんと娘さんば連れて家さ来てんだぞ。

高橋先生が突然結婚がどうのこうの言い出してよ。俺もビックリしてしまつて、途中から頭真っ白になつてよ。高橋先生が何言つてつかさつぱり分がねんだ。ノリ、分かり易く説明してける」

それを聞いて、典孝は昨日のキーコへのプロポーズが絡んでいる事が直ぐに分かった。もしかすると、キーコへの唐突なプロポーズが高橋先生の耳に入つて、気分を害したのかもしれなかつた。兄貴を仲介すると全く話が通

じないため、高橋先生と電話で直接話す事にした。その話の内容は、典孝に取って正に青天の霹靂だった。高橋先生の話をもとめると、下記の通りだ。

① 昨日清子は突然プロポーズされ、気が動転してしまい、きちんと返事が出来なかった。

② 落ち着いて考えると、自分にとって典孝君以上の結婚相手は居ない事に気付いた。

③ 私も妻も、典孝君の人柄を良く知ってお

り、何の異論も無い。むしろ、大賛成である。

④ てつきり典孝君が未だ山形に滞在していると考え、親子三人でプロポーズを承諾する旨を伝えるに来たが、生憎と典孝君は東京へ戻ってしまっていた。

⑤ 孝一君さえ了承してくれば、反対する人は誰もいない事になる。直ぐにでも結婚の話を進めたい。

話を聞いても、典孝は俄かに信じる事が出来なかつた。兄貴が途中で頭が真つ白になつてしまつたのは、無理もない事だつた。電話で話す内容ではないと思つたので、今度の週末に再度帰省して直接話し合いを持つ事にして貰つた。

その後には立石に水だつた。なにしろ、反対する人が誰も居ないのだ。当人同士よりも、キークの両親の方が大変乗り気で、二人の気持ちが変わらないうちに、さつさと話を進めたいようにも見えた。典孝のプロポーズから僅か三ヶ月後に結婚式の日取りが設定された。典孝は金も無いし、地味婚を希望してはいない、高橋病院の御令嬢ともなればそれもいかないうで、山形随一の高級ホテルの披露宴場で執り行われる事となつた。典孝はこの事を真つ先に工藤課長に報告した。全く寝耳に水のため、課長は最初冗談かと思つたようだ。しかしそれが本当と分かると、おもむろ

に典孝の両肩をわしづかみにして、そのまま  
床に叩き付けようとした。極めて手荒な、課  
長流の祝福だった。課長がド派手に喧伝する  
ものだから、典孝は一躍時の人になった。皆  
寄つてたかつてキーコの人柄やら二人の馴れ  
初めやら、根掘り葉掘り聞き出そうとした。  
決まって聞かれるのは、  
「お前から二人、一体どこまで行ったんだ？」  
という、ある意味低俗な質問だった。  
「取り敢えず、山形までです」  
と、軽いボケをかまし、  
「何ボケてんだよ。男女関係についてだ  
よ！」  
と突っ込まれると、  
「男女関係？ まあ、その辺の事は昼間から言  
える事ではないし、ご想像にお任せします  
よ。はっはっはっはっは」  
そう余裕積々に答えるのが常だった。その  
実、手一つ握った事は無かったが。  
その後、様々な打ち合わせ等で頻繁に帰省

したが、大抵は高橋夫人が同席したし、キ  
コと二人きりになる事は殆ど無かった。寝泊  
まりは自分の実家でしたので、結局典孝は全  
くプラトニックな状態で結婚式を迎えた。キ  
ーコも典孝の人柄を良く知っているし、そう  
いった経験が皆無なものも知っていたので、特  
になんとも思っていないようだった。  
結婚披露宴は典孝の想像以上に盛大だっ  
た。会社からは戸田部長、工藤課長の他、典  
孝の上司二人が出席した。また、新郎友人と  
して佳勝先生と飯田綾子が出席した。綾子は  
キーコの親友だったが、友人が一人だけとい  
うのは格好付かなかったし、綾子が臨席の方  
が、佳勝先生が喜ぶと思っただけで、肩書上敢  
えてそうした。新婦側で列席したのは、殆ど  
が医療関係者で、大学教授や公立病院の医院  
長等そうそうたる面々だった。キーコの希望  
で、ブルーツリーのママと、北斗のマスター  
も出席したが、新婦友人という肩書となっ  
た。二人共、典孝とキーコの結婚を非常に喜

んでくれた。披露宴の後、直ぐに新婚旅行へと出掛けたが、これは熱海への二泊三日の旅行だった。披露宴と比較するとかなり地味だったが、これには理由があった。実は今回の結婚式で、兄貴と高橋夫妻に相当の経済的援助を賜った。典孝はそれをかなり心苦しく感じていた。新婚旅行位は二人が負担すると申し出たが、現実問題二人共金銭的余裕が無かった。そこで、出来るだけ費用を抑えるため、国内旅行にした。そして典孝は、親父がおっ母との熱海への新婚旅行を懐かしみ、また行きたがっていた事が頭から離れなかった。自然に、自分も新婚旅行で熱海へ行ってみたいと思うようになった。兄貴の了承を得て、バツクの中に親父の位牌を入れた。親父にも一度熱海を見せてやりたかったのだ。但し、折角の新婚旅行に位牌を持ち歩いている、というのは気分を害すると思ったから、キーコには内緒にした。

3  
4  
・  
送りバント

結婚後典孝は独身寮を出た。独身寮近辺は閑静な住宅街で家賃も安かった。その近所に2LDKのマンションを借り、そこでキッチンとの新婚生活をスタートさせた。暫くは引っ越しやら荷物の整理やら種々の手続きやら慌ただしい日々を過ごした。お互い全くの新生活に手探り状態で、早く慣れようと必死だったし、気を使っていたから表面上は波風が立つ事は無かった。が、それが落ち着き、やや平静を取り戻した頃、今度は細かい点で良く衝突するようになった。おそらく、これは何処の夫婦でもそうであろう。何十年と全く異なる環境で育ってきた二人が急に一つ屋根の下に住むようになって、結婚前には見えなかったお互いの欠点が見えて来たり、生活習慣や価値観の相違が露呈するようになるのは、むしろ自然な事と言えた。

最初にぶつかったのは、トイレの使い方についてだった。トイレは洋式だったが、典孝

は便座を上げて立ちションスタイルで用を足  
 した。しかし、それだとオシッコが結構飛び  
 散るので、キークは便座に座って用を足す事  
 を要求した。典孝は当初、一々座ってション  
 ベンしてられっかと考えていたが、結局はど  
 ちらかが妥協しなければならぬ。これは妥  
 協の範囲内と考え、その要求を呑む事にし  
 た。  
 。  
 しかし、それで一件落着という訳には行か  
 なかった。女の人だったら洋式トイレに座れ  
 ば直ぐにオシッコできるだろうが、男の場合  
 はそうはいかない。そのまますれば場外ホー  
 ムランになっってしまうのだ。手堅く送りバン  
 トを決める必要があった。しかし、たかが送  
 りバンと侮る事は出来なかった。  
 『急ぐとも心静かに手を添えて外に漏らすな  
 松茸の露』  
 別に急いでいる訳ではないのだが、送りバン  
 トを失敗する事が珍しくはなかった。特に朝  
 立ちの状態での座りションベンは困難を極め

た。中々チンコが言う事をきかないのだ。  
『朝立ちや小便までの命かな』  
シヨンベンが終わった後、非常にシヨンベン  
がし易い状態になる、というのは非常に皮肉  
な話と思った。他の男性陣はどうしているの  
だろう、とも思ったが、こういう話を気楽に  
できるのは兄貴だけしかいなかった。止むを  
得ず場外ホームランを打ってしまった場合  
は、トイレットペーパーで綺麗にふき取るよ  
うに心掛ける事にした。



番だった人。東大を優秀な成績で卒業した人。真面目一方で、女なんかには見向きもしなかった人。私が一番困っている時に救いの手を差し伸べてくれた人。それ自体は事実だし、偽装していた訳でも何でも無い。今でも真面目一方の人かと問われれば、その通りなのだ。酒、タバコは一切やらないし、当然浮気もしない。趣味も持たず、仕事一本槍だ。しかし、何かが違う。それが何かと問われればうまく答えられないが、何かが違うのだ。こんな事があった。寝室のベッドの直ぐ左脇にカラーボックスがあり、典孝の好きなマンガ本が並べてあった。寝る前にマンガを読んだりラックスするのが典孝の習慣だったのだ。カラーボックスの上方に通気口があり、その通気口のファイルターをキーコは月に一度掃除する事に行っている。ある日曜日の午後、キーコはベッドでごろ寝している典孝に向かって言った。「ちよつとあなた、ごめんなさいね。ファイル

ターを掃除させてね。直ぐ終わるから」  
そうして、典孝の直ぐ左横でガサガサ作業を  
行った。五、六分で清掃作業を終え、向き直  
った際、キーコの視線はカラーボックスへと  
移った。滅多にカラーボックスに注意を払う  
事は無かった。漠然とマンガ本がある事は分  
かっていたが、よくよく見ると、三段有るう  
ちの上段の左端に、何やら小さく丸まった紙  
くずのような物が幾つか置いてあった。中に  
は縮れた毛のようなものが付着している物も  
あった。  
「ちよつとあなた、何これ？ゴミ？」  
「ああ？」  
典孝はゆつくりと起き上がると、けだるそう  
に答えた。  
「なんだ、それか。ケツパーだよ」  
「何、ケツパーって？」  
「あれ、知らなかったっけ？」  
典孝は意外そうに言うとしばし押し黙っ  
た。その後、おもむろに口を開いた。

「ケツ毛は分がっぺ？ケツの割れ目に生えて  
る毛の事な。皆あっぺ？そのケツ毛にトイレ  
ペーパーがこびり付いている事が良く有る。  
世のインテリ達はそれをケツパーと呼ぶらし  
い。夜中トイレに起きた後、なかなか寝付け  
ない時、俺思わずケツパーをまさぐってしま  
うんだ。その一つ一つを丁寧に取り除いてや  
る。丁度キーコが今やったフィルター掃除の  
ようなものさ。稀にケツ毛もろとも引っこ抜  
いてしまう場合もある。結構痛いぜ・・・。  
よく見るとケツパーに毛が付着しているもの  
があるだろ？怪しむ事は無い。それはケツ毛  
に他ならないんだよ。あと場合によっては、  
ケツパーに茶色い固形物のような物が付着し  
ている事が有るかもしれない。それは無視し  
ていい！だから、これはキーコが考えている  
ようなおかしな物では決してないから、安心  
してくれ・・・」

キーコにしてみれば、想像を遥かに凌駕する  
摩訶不思議な物であった。しかし、下手に反

論してまたおもむろに語り継がれては堪らんと  
思ったし、特にコメントすべき言葉も見当  
たらなかったので、  
「あ、それ」  
とだけ言い残し、そそくさと寢室から立ち去  
った。

しかし、これは後になって振り返れば、未  
だ序の口の出来事だった。それから程なくし  
て、キーコの価値観を根底から覆すような大  
事件が勃発してしまう。

## 36・洗チン事件

生まれたい子供を抱っこする白昼夢にふけり、一人ニヤ付くようになった。また、典孝は眠る前に、死んだ親父に必ずこう報告した。『親父、今度は俺が親父になるぜ』

そして、未だ見ぬ子にお休みのキスをするのだった。

キーコの妊娠を誰よりも喜んだ典孝だったが、実は一つだけ困った事があった。それは青春の汗の放出方法だった。結婚前は一人宴で処理していたが、結婚後はその必要が無くなった。しかし、キーコが妊娠したとあっては、一人宴を復活せざるを得なかった。浮気や風俗通いというのは、典孝の生活概念の中に存在しなかったから、これは必然的な流れと言えた。

昔から、典孝には一人宴の後どうにも我慢ならない事が有った。それは、チンコのヌメリだ。風呂の前に宴を済ませるように習慣付

いて、いる人は良からう。しかし、人間の摂理がそんなに都合良く、順序立てて働くものだろうか？手のヌメリなら洗面所で手を洗えば落とせる。しかしチンコのヌメリはそうもいかない。・・のだろうか？典孝は何度か自問自答した。いつしか典孝は手を洗うついでにチンコも洗うようになっていた。大学生になつて、一人暮らしを始めてからである。結婚後は休止していたが、キーコが妊娠して一人宴が復活すると同時に復活した。ズボンの前方をずり下げ、丁度オシッコする時のようにチンコを洗面所へと突き出した。そして、右手の平に水を貯め、それをチンコに振り掛ける。その動作を四、五回繰り返し、仕上げに手もみ洗いした。無論その際はかなり用心した。もしキーコにこんなあられもない姿を見られでもしたら、弁解の余地がないからだ。左手でずり下げたズボンの上部をがちり掴んで、目は洗面所のドアを凝視したままだった。少しでも

物音やドアが開く気配があるうものなら、  
0・1秒でズボンをずり上げるつもりだった  
し、二、三回予行練習も行った。多少なりと  
も気を緩めてはならない。常に慢心を戒める  
ように心掛けた。  
ある時、一人宴の後、洗面所に入るとキー  
コが浴室の中で丁度シャワーを浴び始めた時  
のようだった。キーコが浴室を出てから、と  
も考えたが、なにせ女の風呂は長い。少なく  
とも、三十分は見る必要があるだろう。それ  
までこのヌメヌメ感を辛抱しなければならな  
いのだろうか？しかし、と典孝は考えた。キ  
ーコは今シャワーを浴び始めたばかりだ。髪  
や体を洗うだけでも、結構時間が掛かるだろ  
う。なによりシャワーの音がしている間は作  
業中という事であり、浴室から出て来る事は  
起こり得ないのだ。典孝はおもむろにズボン  
をずり下げると、いつものようにチンコを洗  
い始めた。  
「んー、しかしこのヌメヌメ感。これは体内

から放出されるリンスのようなものか  
な・・・』  
などとしようもない事を考えていると、ガチ  
ヤ、と突然浴室のドアが半分開き、  
「ちよつと、あなた」  
と呼び掛けられた。これには完全に虚を突か  
れた。条件反射的に浴室に体を向けた。手が  
濡れていた。チンコも濡れていた。丸出しだ  
った。キーコが浴室から半分顔を出して典孝  
を見た。ここに至って、キーコは初めて事態  
の深刻さに気付いたようだった。最初は単に  
呼び掛けただけだったのだ。  
「あ、あ、あなた、一体何やってんの！？」  
何の心の準備も無かった典孝は、有りのまま  
を答えるしか無かった。  
「手を洗うついでに、チンコも洗つところと  
思つて・・・」  
「なんで洗面所で洗チンなんかすんのよ！」  
キーコはそう捨てゼリフを吐くと、ガチャ、  
と浴室のドアを閉じた。典孝は茫然自失の体

で洗面所に向き直った。水が出しっぱなしだったので、慣性の法則に従って洗チンを再開した。

「いやー、タマげたタマげた。タイミングが悪過ぎだ。ビツクリしてオシッコがちびりそうになった。そう言えば大学生の頃は洗チンのどさくさついでに良くオシッコもしてたっけ。それはもうやりたい放題だった。今ではそんなお下品な事は到底考えられない。あの頃は怖い物知らずだった。若かったのかな・・・」

などと、つかの間の白昼夢に思いを馳せていると、ガチャ、と再度浴室のドアが開いた。

「いつまで洗チンしてるのよ！」

さすがのキーコも鬼の形相だった。そして命令口調で言った。

「洗面所の下から買い置きのリンス取って。詰め替え用のやつ」

「はい」

典孝は素早くチンコをしまうと、素直に詰め

替え用のリンスを渡した。

つまる話はこうだ。キーコはシャワーをひねり、いざ髪を洗おうという段になってリンスを切らしている事を思い出した。丁度洗面所に典孝が居るようだ。買い置きのリンスを出して貰おうと、シャワーを出したままドアを開けて典孝に声を掛けた所、そこには丸出しの典孝の姿があった。聞けば洗チンしていると言う。悪い夢を見た気分でドアを閉めた。しかし用件が未だ済んでいなかった。冷静に考えれば、よもや洗面所で洗チンする輩は居るまい。なにかの拍子にツルリと手が滑り、勢い余ってズボンをずり下げてしまったに違いない。テレ隠しに洗チンしているなどと答えたのだらう。常識的にそうとしか考えられない。かろうじて気を取り直して、再度ドアを開けると、そこ見たのは力一杯洗チンする典孝の姿だった。チンコをしまう手際良さを見て、かなりやり慣れている事が想像つ

いた。

キーコは典孝に対して二つの大きなコンプレックスを抱いていた。一つは典孝が東大を優秀な成績で卒業したのに対して、自分は無名の短大を卒業したに過ぎない事、もう一つは典孝にとって自分が最初の異性であったのに対して、自分にとって典孝が最初の異性ではなかった事だ。このコンプレックスはおそらく一生拭えないと思っていた。しかし、この洗チン事件がキーコの価値観を根底から覆した。東大を優秀な成績で卒業した？ほーそれは大したものですね。しかし一皮むけば、ケッパーマさぐる洗チン野郎に過ぎないではないか。佐藤典孝、恐るるに足らず。世の中に、大仰な肩書を持つ人が沢山いる。しかし、その肩書を拭い去って丸裸になった時、人間なんて大差ないのではないか？そんなふうに思うようになった。かく言う自分だって偉そうな事は言えないのだ。必死に眉毛を剃

り、わき毛を剃り、すね毛を剃っておいて、  
『私は生まれつきこの顔です。わき毛も、す  
ね毛も、生まれてこの方生えた事ござりませ  
ぬ』  
そんな顔して生きているではないか。  
皆澄まし顔で生きている。しかしいざ足元  
に目を移せば、目一杯つま先立ちして、その  
ふくらはぎはガチガチに凝り固まっているの  
ではないか。それは世間の荒海を渡って行く  
上で否応無しに会得する処世術と言えるのか  
もしれない。しかし、せめて夫婦間では背伸  
びしなくていい。引け目を感じる必要はな  
い。自らを卑下する必要も無い。相手を買い  
かぶる事も無い。自然体で生きて行けばいい  
のだ。キークはそう思えるようになった。

37・まー君

年の瀬近くになって、キーコは男の子を出産した。典孝の『典』の字を一字取って、『正典』と命名した。キーコが「まー君、まー君」と呼ぶものだから、典孝も自然にまー君と呼ぶようになった。正典は、二人の愛情を一身に受け、すくすくと成長した。十ヶ月を過ぎ、伝え歩きができるようになって、壁を伝ってあちこち移動するようになった。ある日の夕食後、正典をちらりと見ると、高さ五十センチの小型テーブルに寄っかかるようにテレビを見ていた。歯を磨くため洗面所に入る際、典孝は正典に向かって満面の微笑みで高らかに宣言した。

「まー君、僕歯磨くけど、こっちは来ないで頂きます？」

そう言うと典孝は大急ぎで洗面所に入った。もちろんドアはきちんと閉めず、五、六センチ隙間を空けていた。そうしてひたすら歯を磨くこと二分四十五秒。耳を澄ませても、聞

こえて来るのはテレビの音だけだった。待てども待てども正典が姿を見せる気配は一向に無かった。このままでは歯を磨き終わってしまふ。さすがに典孝は焦りを感じ始めた。ドアの隙間からそつと覗いて見ると、彼は紙オムツ一丁の姿でひたすらテレビに見入っていた。た。おーい

「おーい」

小声で呼び掛けてみたが、何の反応も無い。しばし彼の後姿をじつと見つめた。紙オムツが尻に少しめり込んでいるのが眩しかった。何故か良く分からないが、彼は突然テーブルを連続してパンツ、パンツと平手打ちした。そのままおし黙ってテレビを見ている。

「おーい」

さつきより少し大きめの声で呼び掛けて見たが、やはり何の反応も無い。致し方なくもう一度呼び掛けようとした時、

「諦めえーいッ！」

キーコの乾いた声が部屋中に響き渡った。弾

かされたように典孝は洗面所に引っ込んだ。顔面からみるみる血の気が引いて行くのが分かった。残酷に突き付けられた現実に棒立ちと化した。何という事だろう。俺はあいつにこっちには来るなどはつきり伝えたはずだ。間違ひなくあいつは聞いていたはずなんだ。それが何だ、あの態度は。まるで馬耳東風じゃないか。こんな血も凍る、冷酷無比な仕打ちがあるものか。日本国憲法が唄う基本的人権の尊重を完全に踏みにじる暴挙であり、断じて許す訳にはいかない。これ程の巨悪がまかり通るのであれば、国家が破綻してしまう。天下り？許そう。俺が生まれる前から言われ続けている事だ。そんな簡単に無くなるならとつくに無くなっているだろう。税金の無駄使い？許そう。公共事業が完全に合理化されれば失業者が街に溢れてしまう事だろう。義理人情に根差した我が国の風土では必要悪とすら言えるだろう。

う。  
しかしあの野郎だけは絶対許せん。俺は断固としてこの巨悪に立ち向かう。今度会ったら？市中引き回しの上打ち首獄門の刑に決まってるじゃねえかっ！  
典孝が怒り心頭に達している時、ドアがスーッと開いて正典がひよっこり現れた。何故か良く分からないが、一瞬泣きそうに顔を歪めた。  
「あだあーッ！まーきゅん来ちゃったの！？意地悪！知らない！チューしちやう！（中略）あーあ・・・。この頬つぺたにはかなわねーや。参ったなー、もおーッ！」  
こんな事が飽くもせず毎日繰り返された。  
無論、厳しく躰けるべき所は厳しく躰けた。家の中であつても危険は沢山あるのだ。一歳を迎え、自分の足であちこち歩くようになると危険度は倍増した。風呂場等、水を扱ふ所では特に危険だった。

ある日の夜、一緒にお風呂に入っている時の事だ。典孝は頭を洗うため、一瞬正典から目を離した。わずかに、二分の間だったが、正典を見ると、ひっくり返った洗面器の上に載って、そこから更に浴槽へとよじ登ろうとしていた。そんな事が出来るようになったのかとビックリして、急いで洗面器から降ろした。未だ浴槽によじ登るだけの力は無かったが、やって良い事と悪い事の区別をはっきりさせておかなければならないと考えた。そこで正典を真正面から見据えて、そういう事はやっていけないとやさしく諭した。まだ言葉を理解できるレベルではなかったが、雰囲気的に怒られている事は分かるのだろう。正典はしょんぼりと俯いてしまった。典孝は可哀想にも思ったが、命に関わる事なので、説教を続けた。少し言い過ぎたと思つて、何かフオロ―する言葉が無いか思い巡らせたが、思い浮かばなかつた。正典が俯いたまま、下方で何やらモゾモゾしているので、何かと思

つて見てみると、彼は手でチンコをプロペラの  
のようにクルクル回したり、上下左右に引っ張  
ったり、体の中に押し込んだりして、縦横無  
尽にいじくり回しているのだった。どうし  
ようもない野郎だと思つて、全身の力が抜け  
てしまった。ただ、冷静に考えて見れば、こ  
れが一歳の男の子に出来る精一杯の懺悔の姿  
なのかも知れなかつた。或いは、説教の事な  
ど屁とも思わず、反省のポーズだけ取りつつ  
一番身近なおもちゃを弄んでいただけかも知  
れなかつた。もし、後者の方とすれば、例え  
偽りであつても、反省のポーズを取つてさえ  
いれば説教が緩和される事を見越している  
という事であり、中々の知能犯と言えた。しか  
し、一歳の子供にそれ程の知恵があるのだろ  
うか？もし偽りだとすれば、知恵と言うより  
は本能とも言ふべきものだらうと考へた。

典孝は、年末になって会社が休みに入ると直ぐ、キーコと一歳を少し越えた正典を連れて帰省した。正典を山形に連れて行くのは、これが初だった。兄貴は長かった髪をバツサリ切って、スポーツ刈りにしていたので、一瞬見違えた。訳を聞くと、中華屋『上海』はこの度新しく支店を出す事になり、兄貴がその支店長に任命された。それで気持ちも新規一転しようと考え、思い切って短髪にしたと言う。兄貴は正典を抱くと、『めんごい、めんごい』と連呼した。正典も兄貴に良く懐いた。典孝は兄貴がこれ程子供好きである事を初めて知った。帰省した翌日、兄貴が突然「民子おばちゃんの家さ行くべ」と言い出した。おばちゃんの家は歩いて十分程度の所だったので、兄貴と典孝と正典を抱いたキーコが連れ立って、散歩がてら歩いて行った。ノーアポであったが、玄関のチャイムを鳴らすと、直ぐおばちゃんが出て来た。

おばちゃんは、兄貴を一目見て、口を開けた。まま静止してしまった。兄貴がニヤニヤしながら、

「民子おばちゃん、何固まってるの？」

と聞くと、おばちゃんは開口一番こう言った。

「あー、ビックリした。いきなり若かりし頃の健兄が入って来たかと思っただよ。コウ君、いつ髪ば短くしたの？」

「ついこの前だす」

「やっぱり親子だずねー。髪短くすつと似てる似てる」

「ははははは、んだべが？」

そう言いつつ後にいるキーコを手招きして、

「民子おばちゃんさ、まー君ば見せてやれ」

と言った。おばちゃんは、キーコに抱かれた。正典を見て、再度感嘆の声を挙げた。

「あららららら、こっちはちちやこい頃のノリ君さ良く似ったごと。生き証人のあたしが言うんだから間違いないよ。大体一歳位

だべ？ノリ君がこの位の頃、健兄さ抱かれて  
家さ良く来たんだっけ。ノリ君、歳は幾つ  
になったんだ？」  
「二十六だす」  
「そうすつと、丁度二十五年前だねえ。あれ  
からもう四半世紀経つのが。こりや年取る訳  
だよ」  
おばちゃんは感慨深げだった。  
「とにかく中さ入ってけろ」  
と、皆を招き入れた後、お茶を飲みながらお  
互いの近況について雑談を交わした。そし  
て、カメラを持ち出して来て、パシャパシャ  
皆の写真を撮りまくった。おばちゃんはふと  
思い立ったように兄貴に言った。  
「コウ君、まー君ば抱いてそこさ立ってみて  
けろ。ツーショットを撮りたいんだぞ」  
おばちゃんはそう言いながら、正典を抱き抱  
えた兄貴を前に立たせてカメラを構えた。  
「・・・」  
おばちゃんはそのまま押し黙ってしまった。

兄貴は正典のご機嫌を取ろうと必死だ。

「・・・」

おばちゃんの沈黙が続いた。典孝が不審に思  
つておばちゃんを覗き込むと、おばちゃんの  
カメラを持つ手がぶるぶる震えていた。そし  
て、その目からは大粒の涙が流れ落ちている  
のだった。

「民子おばちゃん、何したの？」

「そのまんまだず」

「えっ？」

「二十五年前の健兄とノリ君、そのまんまだ  
ず。まるでタイムマシンで戻ったみてえだ」

典孝は改めて兄貴と正典を見た。二十五年  
前、親父はまだ一歳だった俺を抱いて、よく  
おばちゃんの家を訪れたという。その当時の  
親父と俺は本当にあんな感じだったのだろ  
う。一番間近で見ていたおばちゃんが言うの  
だから間違いない。

俺が大学生だった頃、親父から『タイムマ  
シンでホント造れんだが？』と質問された事

が有った。理由を聞くと、『ちちやこい子見  
掛けつとめんごくめてめんごくてな。コウと  
ノリも昔はああだった、もう一回腕の中で抱  
っこしてみたいとかしみじみ思うようになった  
たんだぞ』と答えた。そういう親父の希望は  
当然実現不可能な事ではあつたが、形を変え  
て実現したと言えるのではないか。沖縄旅行  
に行った時、親父に『今一番欲しいもの  
は？』と質問したら、『孫』と答えた。もし  
親父が生きていて、正典を抱いたらどんなに  
喜んだらう。  
「コウ君、今度はあたしを抱っこさせてけ  
ろ」  
そう言つて、おばちゃんは正典を抱くと、  
「よちよち。めんごいな、めんごいな」  
と頻りに言つた。そして、おばちゃんは典孝  
が高熱を出した時の思い出を語り出した。そ  
れは初めて聞く内容だった。

ある夜、親父が典孝を抱きかかえたまま、

血相を変えておばちゃんの家飛び込んで来た。聞けば、典孝の様子がおかしいと言う。おばちゃんが典孝を抱いてみると、ひどく高熱でぐったりしていた。脱水症状を起こし掛けているように見えた。親父の説明では、昨日おっ母が胃の精密検査のため入院した。タイミング悪く、今日になつて孝一が熱を出し、小学校を早退して来た。慌てて看病したが、その間いつもは泣きぐずったりする典孝がすやすや眠っているように見えた。これは好都合だと思つて、暫く孝一の看病に専念した。夜になつて、孝一の容態が落ち着き、やれやれと胸を撫で下ろした。それにしてもノリが大人し過ぎるな、と思つて抱きかかえて見ると、酷い高熱でぐったりしていたという。孝一のウイルスが感染したのか、それともその逆なのか分からないが、一刻の猶予も無いと思われた。おばちゃんの子供をいつも診てもらつていた掛り付けの医者が居たので、親父と典孝をそこへ連れ

ていった。  
「医者に診せた瞬間、医者から『なしてこ  
いなるまでほっといたんだ！』ってあたしが  
代わりにごしやがってよ。健兄も物凄くしよ  
げ返って、『おっ母の留守を預かっているの  
に、何たる様だ。ノリに万一の事があった  
ら、おっ母に申し訳が立たない。死んでお詫  
びする』とか言うんだもの。あたしも頭さカ  
ッと血が上ってよ、『なに馬鹿なと言つて  
んだ！あんたが死んでも、死んだ典孝は生き  
返らね！』と怒鳴り散らしてしまつたんだ  
ず。そしたら、健兄が半べそかいたような、  
すがるような顔して私を見てな・・・。あ  
あ、今でも悔やまれる！健兄が子供が病気で  
取り乱してんのになしてあだな縁起の悪  
い、きつい言い方してしまつたんだべ？なし  
て優しく励ましてやれなかつたんだべ？悔や  
んでも悔やみ切れないよ。結局、ノリ君は何  
事もなかつたように回復したんだげんと、笑  
い話にはならなかつた。健兄は二度とその事

には触れなかったし、私も触れて悪いような気がしたから触れなかった。んだどもいつか謝りたい、謝りたいとは思ってたんだっけ。結局果たせなかったげんとな。あたしの人生の最大の失言だな」

それを聞いて、典孝はふと思いついた事を聞いて見た。

「民子おばちゃん、もしタイムマシンが有ったら、その時さ戻ってやり直したいと思うが？」

「その時さ戻ってやり直す？ノリ君、面白やいごと言う人だな。顔から火が出るような恥ずかしい思い出や、悔やんでも悔やみ切れないう思い出は、誰でも幾つか持ってっぺ？それが有ってこそ人生さ。それが無い人生なて価値ね」

おばちゃんはそう答えて、典孝の質問を一蹴した。

「コウ君、よくよく考えつと、未だツィシヨット撮って無かった。もう一回まー君ば抱い

てそこさ立ってける」

「分がったっす」

兄貴が正典を抱くと、正典も兄貴に良く懐いているので、キャツキャツと喜んだ。

「ああ、めんごい、めんごい。民子おばちゃん、ちっちゃい子ってなしてこだいめんごいんだべな」

「自分の子だとその何倍もめんごいぞ。コウ君も早く結婚しろよ。弟に先越されおって」

「まさかノリに先を越されるとは思わなかつたんだぜ」

そんな二人の会話を聞きながら、典孝は考えた。ああ、親父もあんな風に、俺の事ばめんごくてめんごくて育ててくれたんだべな。俺は親父が大好きだった。親父は俺の誇りだった。木のの上に立って見ると書いて『親』と読む。親父は正にそんな人だった。

歴史は絶対に逆行しない。しかし、歴史は繰り返す。人間は無意識の内に、親が自分に對して接してくれたように自分の子供に接す

るのだろう。典孝は正典の誕生後、しみじみ  
そう思うようになった。親父、俺は誓う。親  
父が俺を命懸けで支えてくれたように、俺は  
あの子を命懸けで支えるよ。そして、あの子  
が誇りに思ってくれるような父親になる。親  
父に恩返しらしき事は何一つしてやれなかつ  
たけど、それが恩返しに繋がると考えていい  
べ？親父、おっ母と一緒に天国で俺の事ば見  
守っていていろ。

了